

年に至りてはコンスタンチノオブルと一葦帶水を隔つるニカヤの地亦土耳其人の據る所となりぬ。東帝アレキシウス第一世急を訴へて羅馬法皇の援を求めぬ。

時の法皇ウルバン第二世は此の聲を聽きて聖地恢復の軍を興すことに心を決し、先づ東洋より歸りたる隱者ペテロをして遊説せしめぬ。ペテロは短軀にして跣足驢馬に騎して各地を巡り、熱烈なる辯舌を以て聖地回復の必要を絶叫したり。然して法皇はブラセンザに會議を召集し、更に又一〇九五年クレルモンにて會議を開きぬ。然して法皇はペテロ及び東羅馬帝國の使節とともに之に臨席して演説をなせり。群衆の感激は極度に達し、「これ神の御心なり」と絶叫せり。且つ法皇は聖軍に従ふものは其の功德によりて一切の罪の赦免を得らるべしとの約束を以て誘ひしかば先を争ふて従軍を志願せり。兵士は赤色の布片を右肩に附して徽章となせり。

十字軍は前後七回あり。一〇九六年乃至一〇九九年の第一十字軍に始まり一二四八―七〇年佛國聖ルイの起せしものに終る。第一回の十字軍はペテロの率ゐたる烏合隊先づ進發し、佛國のグイヨン公ゴドフレイ、ツウルウズ

ペテロの遊説

クレルモンの會議

1 Godfrey, Duke of Bouillon
2 Raymond, Count of Toulouse

3 Robert
4 Hugo
5 Baldwin
6 Conrad
7 Saladin

第二回十字軍

伯ライモンド、王ウイリヤムの兄弟ノルマンディ侯ロベルト、佛國王の弟フワゴオの率たる武士三十餘萬を數ふる大軍後より進發し、コンスタンチノオブルを経て一〇九七年六月ニカヤを陥れ進んでエデッサ及びアンテオテを取り、一〇九九年六月エルサレムに達し激戦の末七月十五日之を陥れぬ。乃ち基督教の王國を建てゴドフレイを選んで王となし、エルサレム、ヨッバ、ナザレ、カイザリヤは此の王國に直屬し、別にラオデキヤ、テベリオ、アンテオケ、エデッサの四侯國を置き封建の組織を以て王國に屬せしむ。一一〇〇年ゴドフレイ死して其弟バルドウィン第一世（一一〇八）及び甥バルドウィン第二世（一一一八）位を繼ぐ。然るにゴドフレイの死後威力漸く衰へ一一四六年エデッサはムハメッド教徒の回復する所となる。是に於て法皇ユウゼビウス第三世第二の十字軍を興すことに決し、聖ペルナルド遊説に力めたり。佛王ルイ第七世獨逸帝コンラド第三世之に應じて出陣せしが小亞細亞に於て土耳其軍と戦ふて敗れ、殘兵ダマスコを攻めたれども陥らず、意氣沮喪して歸りたるは一一四九年の事なり。これより四十年近くの間エルサレムの王國事なきを得たるはムハメッドの諸君侯の間不和なりしによれり。然るにサラヂ

エルサレム、サラ
ゲンの有
に歸す
第三回十
字軍

ンなる英雄興りて埃及及び西部亞細亞を統一し國勢頗る盛にして一一八七年十月三日エルサレムを取りたり。この報歐洲に達するや第三の十字軍は催されぬ。獨逸帝フリードリッヒ一世、佛王フキリッブ、アウガスタス、英王リチャドの三王之に加はれり。然るにフリードリッヒは小亞細亞にまで進軍し、イコニウムの河にて水浴中溺死したり。其の率ゐたる兵士の一部分は皇子スワビヤ侯フリードリッヒに率ゐられてアンテオケに着し、アクル攻撃に参加したり。英佛王の軍海路よりアクルに着し大軍を以てアクルを圍み一一九一漸く之を陥るを得たり。英佛王相争ふて佛王早く歸國し、英王は留りてサラヂンと戦ひ三年の休戦を約し海岸一帯の土地を得且つエルサレムに行く巡禮者を苦むることなき約束を得て歸れり。第四十字軍は一二〇二年にあり、法皇インノケント三世の首唱に因る。此の時ヴェニスと東帝國の間に争あり。十字軍士はヴェニス人の誘ふ所となり、聖地に向はずして東帝國の首都を攻めて之を取り一二〇四年より一二六一年まで此處に羅甸王國を建設せり。(其後の事廿七章を見よ)。第五はグレゴリウス第九世の時にフリードリッヒ二世によりて行はれぬ。フリードリッヒは聖地に達せ

第四回十
字軍

第五回十
字軍

第六七回
十字軍

しも戦はずサルタンと談判の結果十年間の休戦を約しエルサレム(オマアルの禮拜堂を除き)及びヂャファ、ベテレヘム、ナザレを得て歸れり。これ一二二九年の事なり。一二四四年エルサレム再びムハメッド教徒の手に歸せり。是に於て佛王ルイ第九(世聖ルイ)第六の十字軍を起し埃及を経て行かんと計畫せしが、カイロに進む途中捕虜となり一萬の兵士大抵殺され、ルイは贖はれて漸く歸るを得たり。彼は一二七〇年更に第七十字軍を起しチウニスに向ひしが此處にて疫病にかゝりて死せり。之と同時に英王エドワード第一世當時はまだ皇なりしがアクルに進みナザレを取り十年間の和を講じて歸る。一二九一年アクル終にムハメッド教徒の手に歸し、基督者は全く聖地の領土を失へり。

十字軍は斯の如くにして終れり。十字軍の歴史は光明暗黒の兩側面を有せり。救主の聖墓を回復するてふ夢の如き理想に驅られて昨日まで仇敵の如くなりし人々兄弟の如く手を握り、安逸に耽りし武士劍を磨き土地を賣り遠く東洋に向ひて炎熱と風濤に暴露するを辭せず、これ實に傳奇的詩的時代なり。當時の理想は殉教者にあらず、劍を執つて聖母の爲に戦ふ武士にてあ

傳奇的時代
小兒十字軍

りき。如何に傳奇的なる熱情が歐洲の人心を動かせしかは小兒十字軍によりて其一斑を想像するを得べし。小兒十字軍は第四第五十字軍の中間(一二年)にありし事なり。少年の預言者現れて聖地の恢復は清淨無垢なる少年によりて成さるべしとの神託を受けたりと説けり。其の噂忽ち佛國及び獨逸の西部に傳はり三萬の少年少女ステファノに率ゐられてマルセユに着せしが、ここにて商人に欺かれアルジイル、パレステナに奴隸として賣られしもの數千人に上れり。又五萬人はゴゼノアに達し市民の慈悲によりて育てられ富人となりしものあり。又以太利のプリンヂシより船にてパレステナに航せしものは如何になりしか明ならずと云ふ。

十字軍の
暗黒面

小兒十字軍の話は華麗なる畫圖の裏に横はれる困難、狂妄、失敗の半面を示すものなり。第一回に先發せしペテロ等の率ゐたる烏合の衆の如き宛がら蝗蟲の如く過ぐる國々を食ひ荒しつゝ進みスレシヤに着せし時は乞食の如き有様となり、東帝人を遣して之を救恤することなかりせば盡く途中にて餓死せしならん。後より進みし王侯の率ひし武士の隊は撰を異にせりと雖も、規律なき雜兵の之に随ひ行くが爲に沿道の民を苦めたるも多かりき。是の

結果

如き客を迎へて最も困難を覚えしは東帝國の人民にて、殊に第四回の軍に至りてはムハメッド教徒と戦ふにあらずして基督教東帝國を敵として之を攻めたり。

十字軍が歐洲の社會萬般の事に及したる結果は大なるものなりき。其の主なるものを擧ぐれば(一)歐洲諸國民の團結を促進し、基督教國の意識を喚起したること(二)ムハメッド教西侵の勢を阻止せしこと(三)士道を發達せしめて一般に感情の調子を高めたること(四)貴族産を失ひて封建制度の衰頽を早め、中等社會の勃興を助けたること(五)海運の事業之がために進歩し殊に地中海岸の以太利の都府の繁榮を増進せしめしこと(六)ムハメッド教國より發明及び新知識を輸入して東洋と接觸の機會を與へしこと(七)羅馬教會の收入及び財産を増加し、法權を盛ならしめしこと等なり。

以上は一般歴史上に及ぼしたる影響なるが更に宗教思想に及したる影響あり。ハルナツク曰く「十字軍に因りて原始基督教の意識は回復せられたり。聖地聖場は人の想像を喚起して福音書中の基督の許に導き到りたり。救主の苦みと死とを鮮に觀することによりて敬虔の念は活潑にせられたり。彼

宗教思想
に及したる
影響

等は歩一歩彼の悲哀の行程に追隨せり。然して禮典の基督以外に歴史的基督の姿は地位を得たり、謙遜の中に威光あり刑罰の苦の中にありて罪なく死の中に生命ある姿ぞそれなりける。第二十十字軍の唱道者なるベルナルドは亦十字軍の結果たる信仰の復興を代表したり。

士 神殿の武
Knight Templars
聖ヨハネ
教團

武士教團 十字軍の結果として武士教團なる特別なる團體は生じたり。彼等は劍を執りて戦ふ修道者なり。其の主なるものは「神殿の武士」と稱するものにしてベルナルド其の規則を草したり。初めエルサレムの神殿の内のソロモンの廊に住み、屢々戦闘に参加したり。エルサレムがサラジンの陥る所となるや退いてアケルを根據地となせしが、一二九一年此の地も亦奪はるゝに及び或る者はクプロに殖民し、多くのものは佛國に歸り巴理を根據となせり。此の團體は聖地より歸りし後も多くの領地を擁し、又貿易銀行等を營みて巨多の富を得、弊害少からず、人の嫉妬も強く、且つ貪欲なる佛王フィリップ此の團體の富を奪はんと欲し、種々なる惡事を誣ひて財産を沒收し、或者は焚き或る者は流罪に處したり。時の法皇クレメンスは佛王の傀儡なりし故(第二十四章參照)一三一二年此の教團を解散したり。同じ目的を以て建てられたる團體中有力なものは「聖ヨハネ社團」と稱せらるものにして聖地に於て營し、又病める且禮者を救護す

るを以て目的とせり始めは聖パアテスマのヨハネ病院と稱し、一一二一年規則を定め、非常に盛大なるものとなれり。

第十五章 スコラ哲學(第一期)

スコラ哲學の性質

中世の神學は之をスコラ神學と稱し又スコラ哲學と稱す。中世に於ては哲學は即ち神學なり。教會に於て既に定まりたる教義あり、哲學的方式を問ひて之を説明し辨證し組織を立つ、これ哲學の本分なりとせり。之を批評し、改造し、或は新しき眞理を探究するは其の範圍外に屬す。其の方式に於てはスコラ哲學は古代の哲學を踏襲したるものなり。スコラなる名はシャーレマン帝の宮廷學校をスコラと云ひしより起れり。

時期

スコラ神學の歴史は三の時期に分たる。第一は發生期にして第九世紀より第十二世紀に至る。第二は全盛期にして第十三世紀これなり。第三は衰頽期にして第十四世紀より第十五世紀に亘る。此の章に於ては第一期の學者と其の思想を略叙すべし。

スコラ哲學の開祖と云ふべきはアンセルムスなるが、アンセルムスに先つこと二百年、宛がら平地に屹立せる高峰の如く、時代に先じて現れたる思想家

スコタス・エリゲナの思想

- 1 Johannes Scotus Erigena
- 2 Charles the Bald
- 3 De Divisione Naturae

エリゲナの思想

あり。既に其の名を記したるヨハネス・スコタス・エリゲナこれなり。

スコタス・エリゲナは愛蘭に生れ、八四五年頃フランク王禿頭シャール¹の招く所となりて佛國に來り宮廷學校を監し其の知遇を受けたり。國王の命により僞デオヌシウスの書を譯し、又「自然の區分」と題する著²あり。彼は希臘語の研究を鼓吹し、希臘の教父に關する知識の如きは從來チウトン人の間に³出でたるあらゆる學者に優れり。彼は又思想力の大膽なるを以て勝る。其の説によれば哲學と宗教との目的を有す。哲學は研究し議論し、宗教は禮拜す。内容同一なれども形式異なり。この點は後のスコラ哲學と立場を一せるが如きも、哲學未だ教義に服屬せる地位に立たず、道理主となる傾あり。

エリゲナの神と宇宙の關係を觀るや汎神論的なり。宇宙は神のうち在り、神は宇宙のうち在りて其の本質、其の精神、其の生命なり。創造は永遠にして連續せる行爲なり、始無く又終無し、神に於ては思ふは即ち創造するなり。故に神が宇宙の上にあるは時に於て先せるにあらず、位に於て然り。神も宇宙も永遠なり、ただ神は絶對的に永遠なると宇宙は相對的に永遠なるとの相違あり。斯の如く宇宙は神より出づ、又終に神に歸らざるべからず。自然が

神に歸るは人類に依り、人類が神に歸るは基督及び基督者により、基督者が神に歸るは智慧學問の靈によつて神と結合を遂ぐるによる。

エリゲナの後に出て其の思想之に近き哲學者は中世に於てはエックハルトあり、近世に於てはヘゲルあり。

第十一世紀に至り暗黒時代の雲霧漸く散じて文化の微光照り初めぬ。東帝國と交通の開けたること、西班牙のアラビヤ人の學術より受けし感化等は知的活動を刺戟する力大なりき。第十一世紀の半ベレンガリウスとランフランクと議論を闘はすに當りてアリストテレスの論理學を用ゐたることも亦一新紀元を開きたりと云ふを得べし。

アンセルムス(一〇三三)は此の時期を代表せる偉大なる思想家なり。伊太利ビイドモントのアオスタに生れ佛國のノルマンヂイのベクの修道院にて修行を積む。ランフランク院長たりしが他に轉ずるに及びアンセルムス其の地位を襲ひ、一〇九二年英國カンタアベリイの大監督に擧げらる。彼はヒルデブランドと主義を同くし、時の國王ウイリヤム二世と衝突し、一〇九七年に國外に放逐せられしがヘンリイ第一世の時代に呼び還され其後復た

△アンセルムス

4 Anselmus
5 Aosta
6 Bec

7 Monologion
8 Prosogion
9 Cur Deus Homo

實體論的有神論的

信と知

出で、數年間伊太利に留り、一一〇六年英國に歸り死に至れり。著す所の書

『獨語』⁷『對話』⁸『何故神人となりしや』⁹あり。

アンセルムスが基督教の思想に貢獻したるもの、中最も重要なものは其の實體論的論證と贖罪論となり。

實體論的論證は『對話』のうちに見るを得べし。此の書の序論に記す所によれば、彼は神の存在を證明する爲に唯一にして他を要せざる論證を見出さんと欲して幾度か思を凝らしたれども之を得ず、或る時は之に觸るるかど覺えて復た逸し去り、失望して止めんとすれば此の問題其の心を壓し、精神疲れ悶えつゝありし時、端なく問題の解決に達せりと云ふ。彼は以下順次に得たる解釋を論述せるが本題に入る前、第一章の終に次の有名なる言あり。「余は信せんが爲に知らんことを求めず、知らんがために信す。余は信す、我れ信するに非れば知る能はざるを」信仰と知識との關係はスコラ哲學の問題の一となれり。

我等は神よりも大なるものありと考ふることを能はず。然して其れよりも大なるものあるべしと考へ得られざるものはたゞ我等の思想上に存在する

にあらず實際に存在せざるべからず。唯思想上にのみ存在するものならば之よりも更に大なるもの即ち實際に存するものを考へ得らるべければなり。これ彼の實體論證の大意なり。

贖罪論

アンセルムスの贖罪論は「何故神人となりしか」の一書の中に詳論せらる。此れ基督教の神學ありてより以來初めて體系の整へる贖罪論なりと云ふを得べし。アンセルムスの贖罪論は神の名譽と云ふ一事を起點となす。人の此の世に在るは神の名譽を維持し惡魔を恥ぢしめんが爲なり。人類は弱く且つ誘惑に圍まれたるものなり、然るに人類にして神を信する事によりて罪を犯さざるを得ば、人類よりも強く且つ誘惑するものなくして墮落したる惡魔を恥ぢしむるに足れり。神の名譽之によりて大に揚がりたるならん。然るに人類は罪を犯したる故神の面目甚しく毀損せられたり。是に於て之を償ふ道なかるべからず。人は之を爲すべくして爲し得る力なし。神は爲し得れども爲すべからず。唯ここに「神人現るゝによりて爲し得べきものと爲すべき者」とを兼ねるを得べし。神人基督之を爲し得たり。然らば如何にして彼は神を満足せしめたるか。パウロの言によれば人は罪の爲に死す。

然るに基督は罪なきに死せり。故に神より報賞を受くることを得べし。然るに基督は神なるが故に總てのものを有す。故に自ら受け得る賞を轉じて之を人類に附與するを好みたり。人類の罪限りなく大なり。基督一人の死能く之を掩ふに足るか。曰く之を掩ふに足る、何となれば茲に人ありて基督を殺すか或は全世界の罪を負擔するかと問はゞ、我は寧ろ全世界の罪を負擔するも猶ほ基督を殺すことをせざるべし。これ基督の死が全世界の人の罪よりも更に大なるを證するものなり。

アンセルムスよりも稍々晩くして其の思想多くの點に於て反對の地に立てるものはアベラルズスなり。彼は一〇七九年佛蘭西のブレタニイに生る。若年にして諸國を遍歴して學を修め二十歳に滿たずして巴里に來りノートルダム寺院附屬の學校に於てアンセルムスの弟子シャムボオのギヨームに就きて學ぶ。然るに幾くもなくして其の論敵となり、其の實在論に反對したり。アベラルズスはノートルダムを瞰下したるサン・ゼネヴィエの丘に學校を立て哲學を講ず。燦然たる才華と大膽なる議論とによりて名聲大に揚り、門下に集まる學徒數千人。一代の盛を極めたり。然るに有名なるヘロイス

8 Abelardus
9 Heloise

ア
ル
ベ
ル
ズ
ス

との關係は不幸なる結果を見るに至り、修道院に入りて一一一九年より一一三六年まで修道院に在り、ヘロイス亦尼となれり。一一三六年再び巴里に出て教授し聲望復た隆々たり。然るにベルナルドをはじめ監督等其の説を異端なりとし、一一四〇年ソンスの會議に於て二の偉人相對せり。一方は神秘家にして一は論理の人なり。¹⁰ベルナルドは勝てり。アベラルズは法皇に上告したれども斥けられ永久に修道院に禁錮すべきことを宣告せられたり。アベラルズは羅馬に行く途中病を得多少意見を曲げてクルウニイの修道院に留ることを許され一一四二年に死せり。

アベラルズは中世に於て最も大膽なる思想家なり。彼は道理に據りて權威に反對せり。聖書の靈感につきては頗る自由なる意見を有し、神靈の啓示は信仰と希望と愛と聖禮典に係はる事に限られ、他のことはさまで重大ならず、預言者使徒も誤り得べしと云へり。原罪説につきては罪は自由の意志に因る者なれば原罪は嚴密なる意味に於て原罪に非すと論じ、贖罪説につきては、十字架は神の慈愛の表現なり神の子の犠牲によりて罪人の靈魂を融かし憂悔の念を起さしむる道なりと説けり。彼は近世の道德感化説の開祖な

りと云ふを得べし。

アベラルドスの議論は中世の時代を超越して近世思想に近き所多し。ただ論理より出で宗教的實驗より出づる所少きは其の弱點なり。

アベラルドスの弟子にペトルス・ロムバルズ(一六)あり。集語家中最も有名なるものなり。集語家とはスコラ學者の語を集め類を分ちて書を著したる人々を云ふ。ロンバルドスの語類は汎く行はれたるが大體アベラルズスの書に據れり。

第十六章 ベルナルド及び佛蘭西の

神秘家

スコラ哲學第二期の歴史に進む前に第一期のそれと時を同じくして興りたる神秘的思想の事を語らざるべからからず。

アベラルドス對ベルナルドの論戰はスコラ學者と神秘家との争なり。歐洲中世の思想界は此の二の原野に分れたるものと觀るを得べし。固より兩者は根本に於て相反するものにあらず。スコラ哲學の根は神秘思想によりて養はる。但だ前者は推理を重じ、後者は直觀を旨とす。前者には客觀的の分子多く、後者には主觀的の分子多き相違あるのみ。

神秘的思想家のうちにも獨逸の神秘家と佛國の神秘家とは特色を異にす。前者は哲學的なり、後者には感情的詩的の分子多し。佛國の神秘家は中世に於てベルナルドと其の徒あり、宗教改革後に於てはギオン夫人の如き靜定を重ずる人々あり。

スコラ哲學
と神秘思想

佛國の
神秘家

ベルナルド

- 1 Citeaux
- 2 Aube
- 3 Clairvaux

クレルボ

ベルナルドの勢力

ベルナルドは一〇九一年ヂジョンを距る二哩にある父の城中に生る。

父は第一十字軍に従軍して戰死せり。母は信仰篤く單純にて慈悲に富めり。七人の子ありてベルナルドは第三の男子なりき。幼少より修道院の生活を慕ひしが、二十三歳の頃シトオの修道院に入る。彼と同時に同じ生活に入りし貴族三十人、その中にベルナルドの兄弟四人あり、他に一人の弟も之を望みしも年少の故を以て許されず、二年の後素志を遂げたり。在院二年の後ベルナルドは新しき修道院を開くために十二人の徒とともに派遣せらる。其の地はアウプ河に臨める溪谷にして荒蕪卑濕人之を蛆蟲の谷と呼べり。然るをベルナルド此處を開拓して修道院を建つるに及び光景全く一變してクレルボ²即ち光明の谷と稱せらるゝほど美麗なる土地となりぬ。

ベルナルドは終生クレルボの修道院長たる外何等の地位をも有せざりしと雖も實際の勢力は羅馬の法皇を凌ぎ帝王公侯その教を仰ぎしとは今日存せる往復の書翰に徴すれば明なり。インノケント三世とアナクレタス二世との争はベルナルドによりて決定せられ偉大なるインノケント法皇となることとなれり(參照^{第廿章})。殊に法皇ユウゼニウス三世はベルナル

雄辯

ドの門下生なれば彼を通じてベルナルドは世界に號合したり。彼は身體強壯ならず且つ非常なる禁慾的生活の爲に枯稿し直立すること難きほごなりしも一度教を説くや其の聲能く一萬人の聽衆に徹したり。彼は第二十字軍の遊説者たりしのみならず其の燃ゆる如き情熱の人を勵す力驚くべきものありき。

神學に於てベルナルドは全然保守的の立場を占め、アペラルドスの自由思想と戦ひたり。彼が思想上に於ける貢獻はここにあらずして其神秘的方面にあり。ベルナルドの神秘思想の特色は、單に無限者に對する憧憬たるに止まらずして、惱める基督を思慕觀想する熱情にあり。彼は舊約の「雅歌」を題とせる八十餘篇の説教に於てこの思想をのべたり。其の作りし讚美歌のうち「一度傷きたる聖なる頭よ」(Salve, caput cruciatum)との句を以て始まれる有名なる一篇の如き最も其の情調を見るべきものなり。基督に對する一種感覺的に近き愛の表現はオリゲネスの雅歌註解のうち其の端緒を見るべしと云ふ。この流れはオリゲネスより希臘の教父に傳はりしが、十字軍の影響は此の情念を刺戟したること既に記せる如し。

ベルナルドの神秘思想

シスタア派の勢力

I Cistercian

聖ヴァイクトル寺院の一派

ベルナルドは神に對する愛の種類を分つことを好む。書翰のうちにも現れ、又「神を愛すること」と題する文章に於て單純にして又實に美しく神を愛する經驗を記述したり。人は先づ己の爲に己を愛す、次に己の爲に神を愛す。己の爲に神の助を求め神の愛を經驗する度重なるに及び神の爲に神を愛し、遂に神の爲に己を愛する境に進む。

ベルナルドの精神に活かされたシスタアシャンの一派は非常なる勢力となりぬ。クレルボオに新しき修道院の建てられしと時を同じくして猶ほ三個處の修道院開かれしが、一一一九年には其の數十三となり一一五一年には三百となり、第十三世紀の半には千八百となり、盛を極めたり。當時之と頗頗し得しものはクルウニイの修道院にして四百人の修道者あり。之に屬せる修道院二千に上りたり。シスタアシャン派の建築はゴット式の先驅を爲し、荒蕪を開拓して農業を勵み異教徒教化の中心なり、基督教文化の傳播に少からざる貢獻をなせり。

佛國に現れたる神秘思想家にしてベルナルドよりも自由なる思索を試みし者を巴里の聖ヴァイクトル寺院に居れるフウゴオ(一〇九六—一〇四一)及びリチャア

ド(三一年死)の人々となす。おもに神は推理によりて知り得べからず直覺冥想によりて到達し得らるべきを説く。フウゴオはアウグスチヌス以後最も多く心理に注意せる人なり。我等は先づ外界を知覺し、次には内なる心界を觀更に進んで神を觀想するに及び最高の段階に達せりと説く。リチャードは人の靈魂神に到るに六の段階あり。最高の段階に於て靈魂は膨脹して自己以上に登り自己より救はるべしと説く。

2 Hugo
3 Richard

第十七章 托鉢教團

ペルナルドがクレルポオの修道院を建てしより(一一一五年正)に百年を経て一二一五年ドミニックは其の教團を創め、之に先つと八年フランチェスコは其教團を開きたり。ペルナルド死してより既に五十年を経過したり。十字軍の結果として東方の奢侈品多く輸入せられ、風俗華美に趨く時代に於て、褐衣繩帶遍歴して道を傳へたる托鉢僧の團體は、宗教界の大勢力となり、又諸大學の學柄を握るに至りぬ。

フランチェスコは一一八二年以太利のアシジに生る。本名はジョヴァンニ・ペルナルドニと云ふ。家は呉服商にして富めり。父商用にて佛蘭西に旅行せし間に生れし故、父は此の子をフランチェスコと呼ぶを好みたり。少年の頃豪華自ら悦び、友を會して宴樂に耽りたり。或る時重き病に罹りて後、端なく人生の空虚なるを感じて宗教心大に動き、生活を一變して身を神に獻ぐる志を立てたり。新にせられたる彼の靈は周圍に目撃する病者貧民すべて苦み

1 Francesco
2 Assisi
3 Giovanni Bernardone

フラン
チェ
スコ

5 Santa Clara

4 Fraterculi
『小兄弟』

法皇に謁す

惱める人に對する同情に動かされたり。一日馬に乗りて過ぐる途上に癩病人を見馬を下りて之に接吻したり。彼はアシジの近郊にあるサン・ダミアンの會堂に於て親しく耶蘇に接するの經驗を得、家人郷黨の狂人視するを顧す一切の所有を棄ててダミアンの會堂の修復をなせり。家を出でて流浪煩悶の裡に二三年を過したるが、一二〇九年アシジに於て説教を始めた。その熱誠に動かされて同志の士漸く數を増しぬ。『小兄弟』とは彼が同志の團體に付したる名にてありき。其うち二人宛を派遣して道を傳へしめたるが、耶蘇が其の弟子に命じたると同じく簡單なる旅装を以て出で立てり。フランチェスコ自身も亦極めて粗衣粗食にて生活したり。一二〇九年數人の徒を伴ふて羅馬に上り法皇インノケント第三世に謁して一の教團を作る允許を請ふ。インノケントは躊躇したれども遂に之を承認せり。此の際フランチェスコの起草したる簡單なる規約ありしも傳はらず。其の要旨は基督に倣ひ全く此の世の所有を擲ちて道を傳ふるにありき。一二一二年アシジの身分高き家の娘クララ城を出でフランチェスコの許に來り髪を斷ちて弟子となりぬ。十年の間に非常に勢力を加へ一二一九年アシジに於て會議を開き、各基督教國

に使徒を派遣することを決議しフランチェスコも十二人の徒と、もに東方に行けり。之より先きインノケント第三世死してホノリウス第三世(一二二七)の代となりしより法皇はフランチェスコを保護したり。

一二二一年より此の教團の勢力大に發展して社員三千人に至り一二〇九年の規則を原として新しき規則を制定したり。同志の者の衣食を支ふる道は初は或は勞働し或は人の客となりて其の厚意を受くるものあり、また土地家屋を有せざりしがこの頃より土地の寄贈を受け寺院を建つるに至り(表面は之を其の都市の財産としたれども)一二二三年の規則には勞働自活の方法を載せず、乞食して生活することを特定の誠として記載したり。又開祖の志は平民の間に入りて救拯の業を爲すにあれば學問に囚はるゝことは之を怖れたるが、フランチェスコの修道院にて學を講ずるのみならず、ドミニックの例に倣ひて其の勢力を大學に扶植することを力むるに至れり。大勢はフランチェスコの欲せざる方向に進ましめぬ。

一二二四年フランチェスコはクララを頭とせる婦人教團の爲に規則を立て、法皇之を批准したり。彼等は法皇とフランチェスコ及び其の後繼者に服従を

婦人教團

誓ひ、沈黙と共同の勞働を勉め、何物も所有せず義捨にのみ依りて生活するを定め、其の規律甚だ嚴格なりき。窮乏の間に此の團體も亦長足の進歩をなせり。

不休の活動と禁慾的生活の爲に早くも體質を銷盡してフランチェスコは一二二六年四十二歳にてアシジに死せり。彼の遺言狀は一二二三年の規則に反對し勞働によりて生活することを奨めたるものにてなりき。然れども托鉢の風既に定まりて挽回し難く、クレゴリウス第九世は一二二九年此の遺言狀は眞物にあらずと判定したり。

フランチェスコは以太利人の性格精神の體現なり。感情濃厚にして熱き愛は自然界にまで及び鳥魚までも其の説教に傾聴したりと云ふ。彼は又天成の詩人なり。平民の語を以て歌ひたるダンテの先驅者とも云ふべし。天地の萬象は友の如く彼の歌に上りぬ。「日の歌」の如き最も有名なるものなり。

ドミニックはフランチェスコと時を同じくして生れ爲せる事業相似たりと雖も其性格と性格の事業に反映する所全く異なり。フランチェスコが多感多情なる以太利人なる如く、ドミニックは西班牙人を代表せり。堅確なる意志

フランチェ
スコの死

托鉢の風

ドミニ
ック1 Osma
2 Diego

力を有して他の意志を支配する方に富み、時勢を觀破する識力あり。ダンテは其の詩中に之れを評して「友に善く敵には畏ろしき人」と云へり。彼は一二七〇西班牙のオスマに生る。ボレンカ大學に學び、其の地の監督デエゴに擢用せられてアウグスチヌス派のカノンとなり、博學熱信にしてムハメツド教徒及び異端の徒を教化するに熱心なりしが、宮廷の使命を帯びデエゴに隨行して南佛に行けり。當時アルビゼンセス(第二十三章參照)なる異端に屬する運動南佛に起りて傳播の勢甚だ盛なりき。ドミニックは之を見て慨然として之が教化に着手しシスタシャンの人々と事を共にせしも其の無氣力なるを見て關係を絶ち數人の徒どもにツウルウスに留りて傳道に盡力せしが、獨立の一教團を造るの利益あるを思ひ一二一五年羅馬のラテラン會議に出席してインノケント第三世に允許を請ふ。法皇は寧ろ既存の修道院の規則に遵ふべしとの旨なりしが、ホノリウス即位するに及び其の願は聽かれたり。四年を経ざる中此の教團は以太利、西班牙、佛蘭西、波蘭の諸國に蔓延し、一二二〇年法皇は法皇宮の一部分にドミニックと其の門徒に特別なる屯處を與へて之に托するに法皇の内廷及び仕人の精神的教育の任を以てす。其の後此の職

は常にこの教團の擔任する所となりぬ。一二二〇年の會議に於て貧を守る盟約を一層厲行し、フランチェスカンの例に倣ひて托鉢して生活するを定則とし、團體として寺院の建物の外一切財産を所有せざることを定めたり。

ドミニックは一二二一年以太利のボロニヤに死せり。彼死して後、財産を所有すべからずとの義務は個人にのみ適用すべく團體としては財産を所有するを妨げざることに解釋せられたり。

フランチェスコとドミニックの人物の相違はその建てし教團に反映して兩者相異なる處多し。然れども其の組織と活動の相似たる點も亦頗る多し。フランチェスカンに聖クララ女教團ある如くドミニカンにも同じ組織あり。又出家して教團に加はり全身を之に委ぬるに至らざる人にして其の精神を賛成し之を實行せんと力むる人々あり。フランチェスカンに於ては之を「懺悔の友」と稱せり。彼等は格別なる衣服を着け、慈善を勉め、兵役に服し官吏となるを避けしものあり。ドミニカンにも亦同様の團體ありき。其外ドミニカンに附屬せる武士の團體あり。こはアルビゼンス征討の軍に従ひし武士の隊が一二〇九年以來ドミニック派に屬せるあり。これを「基督の兵士」と稱せ

兩教團の類似

1 Collegia poenitentium
2 Militia Christi

托鉢團の事業

大學に於ける勢力

り。

托鉢教團の事業は親しく民衆に接して其の友となり、助言者となり、告白を聴き、説教するにあり。普通の教師修道者が寺院或は修道院に籠もりて民衆に接觸すること少く、其の禮拜も亦普通人民の了解する能はざる言語を以て爲されたる時に當り、托鉢教團は此の缺陷を充たし得べき生命を有したり。アルビゼンスの如き所謂異端の徒が勢力を得しは之に力を用ひしに因れるもの多し。托鉢教團は敵の武器を用ひて之と戦へり。

大學に於て勢力を占むるに至りしはドミニカン先にしてフランチェスカン之に倣へり。初めは大學所在の都市に寺院を建てて大學の教師を其の勢力の下に致し、次第に其の勢力を大學内に扶殖したり。且つ托鉢僧は孰れも法皇に忠義を盟ひ用を爲すを事とせるが故に、法皇は彼等に後援を與へ、インノケント第四世は兩教團の社員が大學の學職に就くことを許すべき命令を發したり。斯くて第十三世紀の史上に現れたる大なるスコラ學者は大托鉢抵教團に屬する人なりき。アレクサンダア、ボナヴェンチュラ、ドンヌスコオトス、ロヂャー・ベエコンはフランチェスコ教團に屬し、アルベルツス、アクイナスは

ドミニック教團に屬せり。

1 Order of Carmelites	山カル
2 Berthold	教メル
1 Simon Stock	團

1 アウグスチヌス教團

托鉢の制度を探りしもの以上二大教團の外に猶ほ二ありたり。左の如し。カルメル山教團 十字軍の時代に以太利より來りしベルトルドなる隱者パレステナの海岸にあるカルメル山に之を創立す。昔預言者エリヤの棲みし山なる因みにより自から權威を得たり。サラセン人の攻むる所となり此の山より退去するに當り、其の長シモン・ストックなるもの聖母より宣示を受け、此派の徽章を着くるものは練獄の苦しみを經ずして天國に入るべしとの約束ありたりと稱ふ。此の派の修道院は歐羅巴各國に増加したり。

アウグスチヌス教團 數個の隱者の團體を合併して設置せしもの、一二五〇年法皇アレキサンダー第四世之を許可したり。中世紀末には一勢力となり。ルウテルの入りし修道院は此の教團に屬せり。

一二七四年法皇グレゴリウス第十世リオンの大會議(第二十卷參照)に於て托鉢教團の數は既存の四個以上に加ふべからずと限定したり。英國に於ては托鉢僧の衣服の色によりてドミニック教團のものを黒色僧ブラックフライヤ、フランチェスコ教團の

ものを灰色僧グレイフライヤ、カルメル山教團のものを白色僧ホワイトフライヤと稱し、今も倫敦ロンドンの地名に遺れり。

第十八章 スコラ哲學(第二期)

スコラ哲學の第二期は第十三世紀を含む。實にその全盛期なり。之に次ぎて第三期即ち衰頽時代は來りぬ。此の章此の二の時期を合して主とし基督敎に關係せる方面を叙述すべし。

之より先き以太利を始めとし佛英兩國に大學は設立せられたり。ポロニヤ大學が獨逸皇帝より允許狀を得たるは一一五八年巴里大學が佛國王及び法皇の公證を受けたるは一一八〇年なり。英國のオクスフォールド、ケムブリッヂ兩大學の公認は之よりやゝ晩かりしもともに第十二世紀に屬す。爾來競ふて多くの大學歐洲の大都府に設立せられたり。學問の權は今や修道院より大學に移りぬ。これ一新現象なるが、此等の大學がフランセスコ、ドミニック兩托鉢敎團の支配する所となり來りしも亦特異なる現象なり。

アリストテレスの哲學書の全部分歐洲に紹介せられて哲學思想の權威となりし一事亦此時期の特質を形成する一要素なり。アリストテレス哲

大學の設

アリストテレスの流

- 1 Avicenna
- 2 Ib Sina
- 3 Averroes
- 4 Ib Rcschd

5 Brabant

- 6 Alexander of Hales
- 7 Summa Theologica

學の研究は一時歐洲に斷えてアラビヤ人の間に殘存し、アヴィセンナ(本名イブシイナ)及ビアヴェロエス(本名イブロシッド)の註解によりて歐洲の學者に紹介せられしが十三世紀の始までは敎會は之を用ふるを禁制したり。然るに一二五五年巴里大學はアリストテレスの論理學を教科書として用ふることとなり、オクスフォールド大學も一二六七年之に倣ひ、他の大學相踵ぎて之を採用せり。一二七三年にはドミニック敎團に屬するブラバントのウイリヤム原語より之を翻譯せるあり。アリストテレスの勢力哲學界を席卷し忽ち羅匈敎會を支配する權威となりぬ。聖書よりも敎父の書よりもアリストテレスは多く引用せられ、羅匈敎會の敎義は此の哲學の形式に入れて解釋せられ辯護せらるる時代は來りぬ。

初めてアリストテレスの哲學の全般に通曉し之を用ひて神學の系統を建てんと試みたる人はヘエルスのアレクサンダアなり。英國の人、巴里に於て敎授し、『神學要義』を著す。一二四五年死す。フランセスコ敎團に屬し、其の弟子ボナヴェンチュラは此の派の長となれり。アレクサンダアよりも更に大なるはアルベルツス・マグヌス(一二九三)なり。

8 Bonaventura
9 Albertus Magnus

8 Bonaventura
9 Albertus Magnus

1 Thomas Aquinas
2 Summa Totus Theologica

獨逸のヌツピヤに生れ、十年間バドアにありてアリステレエスの哲學を研究し、ドミニック教團に入り、六年間以太利のボロニヤに於て神學を修め、ケルンに於て教授し名聲を馳す。一二五四年獨逸のドミニック教團長となり、後レエグンスブルグの監督となりしも、専ら學問に従事せんがために之を辭し、ケルンに於て教授すると十八年、一二八〇年八十七歳の齡を以て死せり。彼はアラビヤ譯に原きてアリステレエスの哲學を譯し之を註解せり。彼は自然科学に通じ、又神秘的傾向あり。トマス・アキナスと神秘思想家なるエックハルトとともに彼の門下より出でぬ。アルベルタス哲學と教義との調和を試みたれども兩者の融合に達したるにあらず、兩者相並んで存する觀あり。道德を説くに於ても基督教の徳と古代哲學者の説きし徳と同格のものとして相並べしに止まれり。之よりも進みたる統一を成就したるものをトマス・アキナスとなす。

トマス・アキナス(一二二七—一二七四)は以太利のナアポリ州内にあるアキノオの伯爵の子にして法皇ホノリウス洗禮の時の教保なり。一二四四年家族の諫止するに係はらずドミニック教團に入りケルン及び巴里にて學を修め、殊に

一 思想の統

2 Summa Totus Theologica

アルベルツス・マグヌスの教育を受けたり。一二七二年法皇ウルバヌス第二世の招聘によりナアポリ大學の教授となり、一二七四年死す。「神學要領」は其の大著なり。又「異邦の眞理に對する加特力信仰眞理の要領」と名くる著書あり。福音書及びパウロの書翰の註解を著せり。彼は著述し論議する前に先ち祈禱し、學問上の疑問に接するときも祈りて光明を求めたり。

哲學と宗教と、道理と信仰とを調和して統一に達せんとするスコラ哲學の理想はアキナスに於て一種完成の域に達したり。彼は兩界の調和を圖るや従前のスコラ哲學の執りしと方法を異にせり。即ち道理は天啓と同一結果に到着すべしと信じたる前時代の思想の維持し難きを慮り、理性の達し得る領分と天啓によりてのみ與へらるる領分とを區分す。例へば神の一なる事の如きは道理によりて知るを得れども三一神の秘義に至りては天啓により初めて之を知るを得べし。この領分に於ては理性はたゞ蓋然の理もしくは類推を供し得るに止る。この天啓の眞理と道理とは矛盾するものにあらずして相互の間に調和あり。信仰と知識とは調和すべきものなりと云ふ確信の上に彼の哲學は建設せられたり。

彼は上下兩界の區別を宇宙全體の説明に推し及ぼせり。下なるものは上なるもの、手段となり素質となる。靈界と物質界、來世と現世、教會と國家、信愛望の神學的の徳と知勇節制正義の四大徳皆この關係に於て説明せられたり。

有神論に於てアクイナスは本體論を排斥せしにあらざれども論證としては宇宙論を取れり。

贖罪論は大體に於てアンセルムスと同じけれど多少の相違あり。アクイナスの意見に據れば神は贖なくとも罪を赦すこと能はざるにあらず、然れども其子の死によりて救の道を開くを最も善しと見給へり。故に贖罪の必要は相對的なり絶對的なり。耶蘇の贖は獨り其の死にのみ因らず完全なる服従、罪人に同情して經驗せる苦惱等其の全生活を含めり。然して信者が贖罪の效果に與かり得る所には、基督と神秘的の一致あるが爲なりと説けり。

アクイナスは偉大なる思想の建設者なり、之に對して批評家の地位に立ちしものをドンヌスコオトスとなす。スコオトスはアクイナスに後るゝこと約五十年、一二七四年(或は一二六六年)英國ノルスアムブリヤ州のドンヌスタン

ドヌスコオトス

ドヌスコオトス
i Dons Scotus
アクイナス

に生る。オクスフォールドのメルトン學校に學び、業成りて後オクスフォールド、巴里、ケルンに於て教授せり。一三〇八年頃ケルンに於て死す。彼は種々の點に於てアクイナスと反對の地位を占む。アクイナスはドミニカンに屬し、スコオトスはフランチェスカンに屬す。アクイナスはアリストテレスを尊奉し、スコオトスはプラトオン及び新プラトオン派の思想より得る所多し。アクイナスは神の意志は神の知性を見て以て善とする所に従ふと説くに反し、スコオトスは神の意志以外に意志を定むるものなしと説く。アクイナスによれば神は善なるが故に命令するなり、スコオタスによれば神の命令これ善なり。アクイナスは人の至上の祝福は神を知り神を觀するにありとし、スコオタスは祝福は寧ろ意志の状態にありとなす。アクイナスは天地創造靈魂不死の如き事は理性によりて知り得べきことなりとし、スコオタスは此等も亦天啓ありて初めて知り得べき領分に屬すと云へり。贖罪論に於てもアクイナスは基督の死は萬人の罪の値する刑罰に匹敵して餘ありと説き、スコオタスは神意之を受けて罪に當るに足るものとせりと説く。根本思想の相違は總ての點に於て異なる見解に達せしめたり。

スコラ哲
學の衰
頹期
ウイリ
ヤム・
オツカ
ム

スコラ哲學の瓦解はスコトスより始まりしが、其の弟子ウイリヤム・オツカムに至り愈々衰頹期に入れり。オツカムは英國人にして一二八〇年生れ一三四七年死す。オツカムに至り理性と信仰とを調和統一せんとせるスコラ哲學の理想は全く崩壊したり。彼は理性を以て知り得べき眞理と、天啓によりて知り得べき眞理とは全く範圍を異にせるものにして、宗教上の眞理は天啓と教會の教權の定むる所により知り得べしと論せり。同じ道理により教會は國家の上に立ちて相調和すべきものなりと云ふアクイナスの説を取らず、兩者權威の範圍を異にするが故に法皇は國家の政權に干渉すべきものにあらざと云ふこととなる。此の思想は國家の主權を擁護し、改革の氣運を促進したる力少なからず。ルウテルもオツカムの書を研究して之を稱讚したり。

エック
ハルト
Eckhart

第十九章 神秘的思想家及び

神秘主義の團體

佛蘭西に興りたる神秘者の事は既に記したり。此の章には獨逸を中心として瑞西和蘭地方に蔓延したる神秘思想の流を記すべし。

獨逸に於ける神秘思想の源を聞きたる者をエックハルトとす。彼は一二五〇年より一二六〇年迄の間に生れ、十五歳にしてエルフルトに在るドミニック派の修道院に入り、ケルンに移りてアルベルツスの門下に學ぶ。一三〇二年頃巴里に學び、一三一二年ストラスブルグに行き、一三二〇頃ケルンに歸りて説教し、一三二七年死す。其の死ぬる前一年異端として訴へられしが、死後二年羅馬は彼の所説のうち十七箇條を異端と判決したり。エックハルトの議論はアウグスチヌス、僞デオシウス、アクイナス等の學說に據る所なく、エリゲナをも讀みしならん。此等を融化して彼は大膽なる神秘思想の系

エツクハ
ルトの思
想

統を建設したり。

エツクハルトは人格的の形を以て現れたる神と、其の背後にあり其の基礎となれる神性とを區別す、後者は我等の知識を超越して無名なり、虚無なり、永遠の今なり。神性は自知の活動によりて自己を知識の對象となし、此の對象を自己に歸入せしむるを喜ぶ。是に於て主觀と客觀の差別を生ず。主觀は父なる神なり。客觀は子なる神なり、兩者の間の愛はこれ即ち聖靈なり。斯の如く三一の神はこれ即ち神の自意識の永遠の手續なり。宇宙の創造もこれ亦神の自意識なり神の永遠の思想なり。己の裡に有する觀念を時と空間に投射したる者これ即ち宇宙なり。この宇宙の理想的總體は子なる神なり。子たる神のうちに包括せられて父に歸入するこれ萬物の歸趣なり。人以外の萬物はまた人の理性に包括せられて神に歸入す。人の靈魂は萬有を包括せる小宇宙なり。人の心の頂に神的の「火花」あり。これ最も神に近きものなり。こは神に造られしものなるや或は神なるや。エツクハルトの思想時に動搖あり。初は之を造られしものと説き、晩年は造られしものにあらずと見たり。彼は曰く「靈魂以上の或るもの靈魂に存す、神聖、單純にして純然たる無

2 Tauler
3 Ruysbroek
4 Suso
タウレル

なり。有名よりは寧ろ無名、知らるるよりは寧ろ知るべからず。……我は時として之を力と稱へ、時としては造られざる光と稱へ、時としては神の火花と稱へたり」と。

エツクハルトの思想の流を汲むものにして汎神的の一面に向ひ、道徳を無視する輩もありたれども、宗教的經驗を重んじ力を盡して靈的生活を營みたるものあり。彼等は思想上に於てエツクハルトに加ふる所あらざりしも實際上に於て神秘者の最も美なる側面を發揮したり。タウレル、ルズブレエク、スウソオの三人は之を代表す。

ヨハン・タウレル 一三〇〇年頃ストラスブルグに生れ、一三一五年ドミニック派の修道院に入り、ケルンに學んでエツクハルトの感化を受け、又巴理に遊び、終にストラスブルグに歸りて説教す。一三三九年羅馬法皇此の市に總放逐を宣告するに及び、去つて瑞西のバアゼルに行けり。バアゼルは「神の友」(下文に)の巢窟なればタウレルは親しく其の徒と交りたりと見ゆ。一三五二年ストラスブルグに歸り、黒死病の流行せる時市民の救助に力を盡せり。一三六一年死す。其の説教は神の内住、內的の光明を説くこと多し。たゞ其の

思想實際的にして、罪の觀念強く、神の恩寵と悔改を説く所、エックハルトと異なる所あり。『博士タウレルの歴史と生涯』と題する文書は、初めタウレルがストラスブルグに於て説教せし頃一人の常信徒來りて深刻なる批評を與へ、タウレルは深省して沈黙數年全く新しき人となりたる次第を載す。其の人はバアゼルに於て『神の友』に屬したるニコラスなりと云ふ人あれども、之を取らざる學者もあり。

ヨハン・ルスブレエク(一三九三—一三八一) ルスブレエクは地名なり、今の白耳義の都ブルツセルに近き村の名なり。ブルツセルの西南二十四哩ばかりなるスワニイの森の中にあるグレンタアルの修道院に隱遁して神秘的論文を著せり。晩年厚き尊信を受けたり。彼は哲學的思想の人にあらず情緒の深粹を以て勝る。内的生活と冥想を重んじ神との一致契合を説く事は他の神秘思想者と同じ。

ハインリッヒ・スウソオ(一三六五—一三九五) 上部リングンのベルグの人、少くしてコンスタンツのドミニック派の修道院に入り、一三二五年より三年間ケルンに學びエックハルトの教を受く。後コンスタンツに歸りて修道院長となる。彼

5 Nicholas

エルスブレ
エック6 Soignies
7 Grünthal8 Lingen
9 Berg
スウソオ1 Beguini ア及びベ
2 Beghardi ヤ及びギ
ベカイ

は愛情の人なり、舊約の箴言のうちに女性化したる、永遠の知慧を想像憧憬の對象とし、其の光明赫灼たる姿を幻覺し、遂に特別な神の恩惠によりて永久の知慧と結婚したる意識に達せりと云ふ。彼は之が爲に種々の苦業を積み。永久の知慧彼に告げて曰く「我とともに猛烈なる酸苦を味はざるものは我が甘美をも楽しむことなからん」と。其の著「知慧の書」及び自傳あり。

神秘思想は獨り上に擧げたる如き思想家に表れしのみならず、此等の思想家に鼓吹せられ又彼等に地盤を與へたる團體ありて獨逸及び和蘭地方に蔓延し、普通人民の間に偉大なる感化を及ぼしたり。其の中の主なるものを擧ぐべし。

1 ベギニイ及びベガアヂ 前者は第十一世紀頃既に存在したる婦人の團體なり。名の起源に關しては諸説一定せず。創立に與つて力ありしベグエと云へる人の名に因めるなりとも云ふ。彼等は共同生活をなし粗服を着け食を共にし、時を定めて祈の爲に會合す。其他は業を勵み貧民病者を慰問せり。ベガアヂは之と性質を同じくせる男子の團體にして一二二〇年ルウヴァイに立てられたるものを以て最も古しとなす。此の團體に屬せるものは紡

3 Brothers and Sisters
of the Free spirit

神の友

績業者等普通の人民多かりき。此の兩團體は何れも行の堅固なる慈善の行を以て令聞あり。其の數非常なる勢を以て増加し一二五〇ケルン市内に於けるベギイニの數千人以上に昇りたりと云ふ。然るに彼等の末流に至りてはその生活主觀に偏して檢束する所なく、僧侶に反對し禮典に與らざる如き事あり、又行の修らざるものありしより第十四世紀の始め火刑等の罰を受くるものを出せり。斯くて一三一年法皇クレメンヌ第五世は令を下しこの團體を禁遏したり。『自由なる精神の兄弟姉妹』と稱する團體も亦之と相近く頽敗の分子を代表したり。

『神の友』 此團體は共同生活を營む如き種類の者にあらず、各々氣脈を通じて敬虔の道に於て相助け相勵ますを以て目的となせり。第十四世紀の前半に於て獨逸には帝位の争より戰亂あり又一三四八には黒死病歐洲全體に流行して人々不安の念に満たされたる時に當り信仰により相結ぶの渴望に促されて起りたり。獨逸の西南地方より南は瑞西北はネエデルランドに及び、ドミニック、フランチェスコ兩派修道院の中より之に屬するもの多かりき。ルルマン・メルスキント云へるはストラスブルグの富める商人なり。忽ち回

4 Gottesfreunde

5 Rulman Merswin
6 Theologia Germanicaテオロギ
ニカゲル
マ

心して業を罷め産を傾けて慈善の目的に用ふ。一三六六年ストラスブルグ附近のイル河上にある一島にありし古き修道院を購ひて之を同志の住居となせり。タウレルと語りて之を警戒したりと云ふニコラスも此の派に屬せり。彼は異端の厄に遭ふを避くる爲に行動を秘して老年に至りしが、獨り佛蘭西に入り捕へられて一三八二年ヴァイエンに於て焚殺せられたりと云ふ。

『テオロギヤ・ゲルマニカ』日耳曼神學と題する著者不明の書も亦『神の友』に屬する徒によりて著されたものなり。トマス・ケムピスの『基督の模倣』にも中世神秘思想の産み出たしたる雙璧と云ふべし。ルウテルは之を發見し一五一六年初出版したり。彼が附したる序文のうちに云へり「此の尊き書は言語に於ては貧しく且つ粗朴なれども知識と神に屬する知慧に於ては遙に富み且つ貴し。……聖書と聖アウグスチヌスの書の外我が手に達したる書にして神と基督と人と總ての事物につきて之よりも多く學び又學ばんと願ひたるものなし」と。此の書神が全き善なるが故に人は私心を去りて神の爲に神を愛すべきことを説けり。

『共同運命の兄弟』一に『共同生活の兄弟』と云ふ。ルスブレエクの弟子ダ

共同運命
の兄弟

- 7 Brethren of the Common Lot
- 8 Gerhard Groot
- 9 Deventer

ルハアド・グロウトの設立にかゝる。有益なる書籍を増加し青年の教育に力を盡すを目的とせり。之に屬する或る人の家には大なる室あり、一人の誦讀者と數人の寫字生あり。讀むに隨ひ之を寫して民間に流布せしむ。學校は⁹デヴェンターにありしもの最も有名にして一時二千人の學生を容れたり。此の學校の出身者のうちにはデシデラス・エラスムスあり。此の團體に屬せる人にして記憶すべきもの二人あり。トマス・ア・ケムピスとヨハン・ウエッセルこれなり。

- 1 Thomas a Kempis
- 2 Kempen
- 3 Florentius
- 4 St Agnes

トマス・ア・ケムピス(一三八〇—一四七〇) ケルンに近きケムペンと云へる村に生る。故に此の名を得たり。父は工人にして貧しく母は篤信の婦人なりき。十三歳にしてデヴェンター¹の學校に送らる。此處にてフロレンチウスと云ふ人の感化を受けたり。後サンタ・アグネス(ツォオル)の寺院に入り修道者となり、靜なる一生を送れり。著書のうち「基督に倣ふ」は最も有名なり。其の外「薔薇の園」と云へる書及び説教書翰傳記の著あり。彼は一面神秘的敬虔の人にして一面は知識的の人なり。獨逸に於ける新學問の開拓に與りて方ありし人々多く其の門下より出でたり。⁴ルドルフ・アグリコラ、⁵アレキサンダー・ベギウ

- ル ヨハン
- ウ エッセル
- ツ
- セ

スの如きこれなり。彼の思想には積極的要素の少からざるを見る。

⁶ヨハン・ウエッセル(一四二〇—一四八九) グレニンゲンの人、ツォオルの「共同運命の兄弟」の學校に學べり。當時ケムピスはサンタ・アグネスの寺院に居りしが、ウエッセルは其の書を読み、又親しく之に接して教を受けたり。長くケルンに學び、ハイデルベルヒ、巴里、羅馬に教授して盛名あり。巴里に於ては「世界の光」の稱を得たり。晩年サンタ・アグネスに隱退す。彼は信仰によりて教を得るの教理を解し之を説くこと明快にして熱心なりき。ルウテル曰く「我れ若し夙にウエッセルの書を読みしならば、我が敵は我が教理の全體をウエッセルより借り來れりと云ひしならん。彼と我との心はさほご相一致せり」。

ヨハン・ウエッセルと混じ易き人はヨハン・ウエッセルなり。本名はヨハン・ブルカルドなるが、ウエッセルと同じく自由にして且つ敬虔なる思想家なり。學問と雄辯は之に如かざれども、改革的精神を抱き、一四五〇年よりエルフルト及びウオルムスに於て教授し、免罪符及順禮斷食の俗に反對して説教せり。其の書は焚かれ一四八二獄中にて死せり。

- 7 Lux Mundi
- 8 Johann Wesel
- 9 Burchard

- 4 Rudolf Agricola
- 5 Alexander Hegius
- 6 Johann Wessel

第二十章 羅甸教會の大會議

東西教會一致して開きたる世界的大會議第七回は七八七年の第二ニカヤ會議を以て最後となす(第五章 照)。然して第八の大會議は八六九年と八七九年とに開かれ、前者は東方教會之を認めず、後者は西方教會之を認めず(第十章 照)。然して第九回以降は西方教會のみの大會議となる。此の時代に於て六回の大會議開かれたり。其のうち前の四回はラテラン法皇宮に於て開かれ、後の二回はリオンに於て開かれたり。

1 Lateran Council

第一回ラテラン會議

第二回ラテラン會議

第一回ラテラン會議(第九回)は一一二三年に法皇カリクストゥス二世の召集する所、議題は「ウオルムス協約(第十二章 照)」を確認するにありたり。
第二回ラテラン會議(第十回)一一三九年法皇インノケンツト二世の召集する所にして會するもの千人以上に昇れり。初めホノリウス第五世(一一三〇—一一三二)死して後インノケンツト二世(一一三三—一一四三)とアナクレタス二世と法皇の椅子を争へり。アナクレタスは賄賂を用ひカアデナル會議に於て多數の投票を

神の休戦

2 Truce of God

第三回ラテラン會議

第四回ラテラン會議

得て位に登りたれども、インノケンツトはベルナルドの如き有名なる人物の援助あり、以太利以外の國は之を認めたり。一一三八年アナクレタス死せし故、大會議は教會の平和の回復を祝しインノケンツトの正統を承認したるなり。この會議は又「神の休戦」と稱する風習を確認したり。此の定めによれば降誕節、大齋期、或る祝節日、毎週木曜夕より次の月曜の朝まで戦争奪掠等の行爲を休止することゝなれり。戦亂多き世に於て是の如き事は幾分か兵火の慘害を減する力ありき。又教職に在る人の身體は侵すべからざること、又教職の結婚を禁ずるともこの會議にて決せられたり(次章 參照)。

第三回ラテラン會議(第十一回)一一七九年アレキサンダ第三世の召集する所にして主として法皇撰擧法の問題を議し、三分の二の投票を得るを要することを定めたり。
第四回ラテラン會議(第十二回)一二一五年偉大なる法皇インノケンツト三世の召集する所なり。會したる大監督七十七人、監督四百十二人、修道院長八百人、其他の參列者合計二千二百八十三人に達せりと云ふ。其の盛大想ふべし。此の會議に於ては先づ新に十字軍を起すを決し、又教會の弊害を矯

一年一度
の告白及
び聖餐式

化體説な
す信條と

第一リ
オン會議

正するを決したり。又各人少くとも一年一度教師の前に於て告白を爲すべきこと、聖餐式を守るべき事を決したり。然れども第四ラテラン會議に於て最も重大なる事件は化體説を以て教會の信條となせし事なり。此の會議は又王侯たる者は力を盡して異端の徒を其の領土より掃蕩することを誓ふべきことを訓令したり。

第一回リオン會議(第十三回) 法皇インノケント第四世皇帝フリードリッヒ二世と争ひ之が爲に羅馬より逐はれたため一二四五年に會議を開きしなり。フリードリッヒの人物行爲を議して之を教會より放逐し皇帝の位を貶することを可決したれどもフリードリッヒは死ぬるまで平然として動かざりき。又第七十字軍を興すことを決議し、自費を以てルイ第九世の軍に従ふものは懺悔の心だにあらば、罪の赦免を得べきことを宣言したり。

第二回リオン會議(第十四回) 一二七四年クレゴリウス第十世の召集する所、東西教會の調和を圖らんとして集まれり。東帝ミカエル・パレオロガスは法皇の至上權を認むることまで賛成し、之に同意せざる大主教は辭職して東帝に同意し得る人を擧げ、聖靈の出處につきては父と子とより出れども、一の

第二回リ
オン會議
の東西和
計畫

Michael
Palaeologus

原理一の息より出づることを述べたる妥協的信條を造り和協成れるを祝して別れたり三四年の間之を維持したるが一二七七年に至り早くも分離したり。此の會議は又法皇撰擧を行ふ場所、其の隔離事務の迅速なるべき事等につきて規定を設けたり。

第二十一章 カノン法

Canon Law

教會法の發達

中世の加特力教會は統一的宗教團體たるに止まらずして又統一的政治團體なり。故に此の教會の信仰を解釋し統一する爲にスコラ哲學の發達を促したる如く、法制上の問題を處理する必要よりしてカノン法即ち教會法なるものは發達したり。

日耳曼民族が歐羅巴の主人公となるや、此の民族固有の風俗習慣に原きたる法律制度を生ぜり。封建制度の如きこれなり。周圍は甚く變じたるに係らず教會内部は昔の如く羅馬法に據れり。時々必要に應じて開かれたる會議の決議、法皇の教令を羅馬法に附加したるものこれ即ち教會を支配したる法律なりき。然るに年を経るに隨ひ教會法は羅馬法の支配を脱しておのづから獨立の體系を具へ來れり。ヒルデブランドが教會の綱紀を振肅し偉大なる權力を主張して天下に號令するに當りカノン法の整頓統一の必要を生ず。且つ當時大學の勃興に伴ふてボロニヤ大學を主として羅馬法は復た

法令集

- 5 Extravagantes
- 2 Decretum Gratiani
- 3 Raymond de Pennafort
- 4 Clementinas

羅馬法皇の權能

盛んに研究せられたり。之に摸りて教會の法制も亦組織的に研究せらるゝ氣運を生じぬ。

教會の法令を類集したる書はこれまでも數種ありしが、ボロニヤの修道者グラチャヌスが一一五〇年頃編纂したる法令集は最も汎く行はれたり。此の書は單に法文を羅列したるに止らず議論を加へたるものにして將來の教會法研究の基礎と爲れり。グラチャヌスより第十三世紀末までは大會議の屢々開かれし時代(前章に見ゆ)なれば新しき法律の制定せられしもの亦多かりき。之に次ぎては一二三四年ライモンド・デ・ベナフォルトがグレゴリウス第九世の爲に新法令集を編するあり。その後更に法皇クレメンヌ第五世の編成せしめたるクレメンヌ集及び更に晩く成りたる「エクストラヴァガント」(一三一八年)と名くる集出で、教會法の盛時は過ぎ去りぬ。

教會法に關する事は殆んど専門の一科を成せるものにして、こゝに詳記する能はず、たゞ一端を擧ぐるに止めざるを得ず。

法皇の權能 教會法の中心は羅馬法皇なり。羅馬教會全盛の時代に於て、法皇の有せりとして認められたる權能のうち左の如きものあり。

法皇と監督 法皇と監督とは全く別種のものなり。法皇は神及び基督の代理者 (Vicar) なり、監督は法皇の代理者なり。法皇は監督を任命する權あり、又之を罷免する權あり。監督は任職せらるゝ時法皇の代理者に對し法皇に忠義を盡すべきことを誓ふ。監督の裁判を受けし人法皇に上告し得るのみならず之を受くる前にも上告するを得べし。監督の爲す事にして法皇の干渉し得ざることなし。監督は大監督の下にありて之に服屬するものなれども其の服屬は有限的なり。何となれば兩者の權は皆法皇の至上權に原きて與へられたるものなればなり。

法皇の立法權及び會議との關係 法皇は舊き法律を廢止しまた新しき法律を制定し得る權あり。教會の會議は法皇の權下に服し、法皇の召集によりて効力あり。故に第三ラテラン會議後其の議決は法皇の名を以て發布せられ、たい大會議の協賛を経たることを附記せり。
聖者號を授くる權 監督は各自の監督區内に於てこの權を有せしが法皇アレキサンダア第三世(一一八九)之を法皇の手に收めたり。

教職に附帶せる特權 教職の身體は侵害すべからず。彼等は納税の義務を負ふことなし。これフリードリッヒ第二世が一二二〇年十一月制定したる法令にて決せし所なり。教職に在る者は普通の裁判所にて裁判を受くべきやとの問題につきてはグラチャヌスの法令集には教職に在る者も世間のことに就ては世間の裁判所の審判を受くべきことを認めたるが、ウルバヌス第二世の時²ニウムに開かれたる會議は世間の法官の前に聖職に在るものを引くは神を瀆すものなりと宣言し、アレキサンダア第三世は放逐を以て之を罰すべきものなりと云へり。英國のヘンリー第二世はこの權を回復せんと欲し、クラレンドン法典を制定して争ひたれども遂に屈したることは既に之を記したり(第十三章 照)

教會の刑法及び國家の刑法との關係 教會が罪を犯せし人に加ふる最高の懲罰は放逐なること既に記したる如し。然るに前時代以來之に加へて永久放逐の罰あり。こは破門せられて懺悔の態度なき人に加へらる。又同じ時代の末に總放逐の制あり。こは或人に加へたる制裁を有効ならしむる爲に其の人の住める市又は邑をすべて破門するものにして、其の間は、飢餓、乞食

教會の刑
と國家の刑

外國人、二歳以下の小兒にあらざれば死するとも宗教の式を以て葬を行ふを得ず。ミサ祭は黙して行ふことを許さる。毎日第三時に教會より合圖をすれば土地の人民盡く踞きて懺悔の祈禱を爲すを要す。此の刑の解除せられざる内は何人も結婚すること、肉食すること、髪及び髯を剪ることを得ず。不治の病に罹れる人のみ懺悔及び聖餐の禮典に與かることを許さる。

教會より罰を受くべき罪を犯したるものはこれ亦社會に對して罪を犯したるものなれば皇帝國王は之を罰せざるべからず。是に於て放逐せられたる者の財産を沒收し或は之を極刑に處する等の事あり。然れども教會が己の勢力を張らんが爲めに濫りに懲罰の武器を用ひし時國王は之に同せざることありき。

世間の刑法に問はれて罰を受けし者に對して教會は又相當の裁判を與へたり。海賊を行ひ、貨幣を贗造し、高利貸をなせし者の如き教會の懲罰を免れ得ざりき。

羅馬教會
の收入

羅馬教會の收入 羅馬教會は其の大なる機關を維持運轉すべき財源を何

處に有するか。羅馬教會は廣大なる土地を所有したれば之より得る收入あり、服屬したる修道院より獻する所あり、各國より法皇に納むる税あり、又監督が按手禮を受くる時大主教大監督或は監督に納金する風あり。其の額少からず、按手禮を受くる人の一年の收入に相當せることもありき。然るに今や監督を任命する權は羅馬法皇の手に歸したれば、此の方法によりて得る收入巨額に上れり。されど最大の財源はすべて教會の財産及び收入に課せる税金なり。教會が財産を所有するに至りし道は様々なれども、其の一は遺言によりて教會に財産を寄附する習慣なり。十字軍起りて教會は土地を買ひ或は抵當として之を得たり。

教職の獨
身生活

教職の獨身生活 ヒルデブランドは教職の獨身生活を厲行せしめんとしたること既に記せる如し。此の制度には反對少からずして完全に實行すると難かりしも、大體は之に定まりぬ。特に副執事以上の高等なる職に在る者の結婚は全然之を禁じ、既に結婚せるものは之を解消すべきものとせり。之より以下の職にあるものは既婚者は之を取消すを要せざれども、就職後結婚

すれば其の職を失ふことゝなれり。

第二十二章 中世に於ける禮拜及び生活

禮拜の用

羅馬教會の禮拜風習の完成したりしと云ふべき此の時代は中世の禮拜及び生活の概要を記すに最も適したる時機なるべし。

雄辯家

説教 中世の教會の禮拜に於て主なるものは説教にあらずして儀式禮典なり。西歐の教會の禮拜に於て用ひられたる國語は羅句語なり、讀まるる聖書は羅句語譯なり。説教も教職學生に向てなざるものは羅句語を以てせられたり。普通人民の解する能はざる國語を用ひてなざるる禮拜はおのづから耳に聽く言よりも目に見ゆる形式を重するに至らざるを得ざりき。然れども中世に於ても時勢の必要に促され通俗の言語を用ひて多數國民に感動を與へたる雄辯家の興りし時代ありき。十字軍の時代は其の一にしてクレルモンの會議に於ける法皇ウルバヌス二世の演説をはじめとし、聖ペルナアルドの熱情と雄辯とは一代の人心を燃え立たしめたり。次には第十三世紀に於ける托鉢教團勃興の時代は復た通俗語の説教を盛ならしめ、ドミニ

1 Berthold
説教の體

2 Guibert of Nogent
3 Honorius of Autun

4 Sacraments
5 Confirmation
6 Penance
7 Extreme unction
8 Ordination

ツク、フランセスコ兩開祖は云ふまでもなくフランセスコ派に屬するレエゲ
ンスブルグのペルトルドの如き大説教者を輩出せしめたり。トマス・アクイ
ナスの如き碩學も平易なる以太利語を以て人民に説教したり。

然れども教師の知識の程度おしなべて低くして説教を爲す力なきもの多
かりき。一二二一年トリヤアに開かれたる地方の大會は教育なく經驗なき
僧侶の説教は害ありて益なければ之を禁すべしとの意見を發表したり。

説教は大抵長からず、教理を説くよりも實際上の教訓を與ふること多かり
き。聖者の物語屢々引用せられ、古の説教書に據るものも多かりき。説教書
を著せし人には第十三世紀の初、²ノオゼントのギベルトあり。³アウタンのホ
ノリウスの説教の如き夙く行はれたるものにてありき。

禮典 禮典の數は一定せざりしが、⁴ペテルス・ロムバルズ(一一一〇)は七を
以て定數とし、一四三九年フイレンチエの大會議(この時代に屬す)は之を公認
せり。七個の禮典とは洗禮、堅信(堅振)、聖餐、聖體、悔悛、結婚、終油、任職(品級)こ
れなり。このうち洗禮、堅信、任職の三禮典は一生に一度以上受くべからず。
此の三は、靈魂に消えざる印號を捺るものなればなり。すべて禮典は之を執

化體説

5 Concomitance

6 Robert Pulleyn
麵麴の
を頒つ
風み

り行ふ人の品性人格に係はりなく禮典それみづから効力を具ふ。又受くる
人が故意に恩恵を拒むか或は大罪を犯せるものにあらずば、其の人の精神狀
態に係はりなくして恩恵を與ふる力あるものなり。

七禮典の中心となるは聖餐式なり。化體なる語は第二世紀の始頃より時
々用ひられ、⁵ペテルス・ロムバルズ初めて明なる形式を附せり、彼は曰く麵包
は基督の肉に、葡萄酒は其の血に變化す。されど麵包を頒つ時も、葡萄酒を頒
つ時も、基督の全聖體祭壇の上に現在す。アクイナスは之を⁵コンコミタン
スと名けたり。アクイナス更に之に加へ祭壇の上には基督の聖體あるのみ
ならず、基督の靈魂は其の體に加はり、神性は其の靈魂に加はることを説けり。
これ今日の加特力教徒の信仰なり。

聖餐式の時麵包のみを陪餐者に與へ、盃は之を與へざる風は基督の血を零
して之を瀆すを恐れたるより生ぜり。第十二世紀に於てロベルト・プレイン
かかる事を説きしが、第十三世紀に至りヘールスのアレキサンダアこの風を
是認し、アルベルツス之を不可とせしが、アクイナスは又た之を是認し、一四一
五年コンスタンツの大會議是認を與へたり。然るにボヘミヤのフツス黨の

小兒の陪餐

反對あり、バアゼルの大會議に於ては麵包のみにて足れども葡萄酒を頒つ事も亦妨なしと修正したり。(第二十五) 小兒の陪餐は第十二世紀に至り次第に廢たれ、第十三世紀に至り禁止せられたり。東方教會は之を存す。(第二十八)

7 Missa (Mass) ミサ祭

聖餐式は禮典にして又祭 (Sacrifice) なり。禮典は之に陪する人の爲なれども祭は神に對して獻ぐるものなり。聖餐式の麵包と酒とは靈魂と神性とを具へたる基督の體と血に化するものにして此の體と血を神に獻ぐるこれミサ祭なり。ミサ祭に於ても基督は司祭の手を以て血を流さずして身を神に獻ず、方法は異なれども實體は同じ。是に於て司祭は基督の聖體を神に捧ぐる無上の重大なる務をなすものとなる。

ミサ祭は誰の爲に行はるゝやと云へば、此の世に在る人の爲め又煉獄に苦む人の爲に之を行ふ。死者の爲に行ふミサは供養の如きものとなる。一のミサの爲に一の祭壇を要するが故に大なる會堂に於ては數個の祭壇を要し、又多數の司祭を要することゝなれり。又これが教職の收入の源となれり。其の他の禮典に付て洗禮、按手禮、婚姻は別に云ふべきとなし、堅信は既に洗

堅信禮

8 Confirmation 終油 9 Extreme unction 終油

禮を受けたるものゝ信仰を堅固にする爲に聖靈と其の賜を得る式なり。原は洗禮の時、按手し油を灌ぎたりしも中世の始より洗禮より獨立したる禮典となりしなり。監督の行ふ所にして先づ按手して祈り次に聖香油を以て額に十字架を記せり。

終油の禮は初代教會以來病者に油を塗りて祈りたる風習より來り、聖油を病者の五體に傳けて祈り、靈魂を助け又時として身體を助くる禮を云ふ。第十二世紀以來は主として死に臨む準備に解せらるゝに至れり。初めて之を禮典と見し人は聖グイクトル寺院のフウゴオなり。

悔悛の禮は後節に譲る。

聖者禮拜 聖者禮拜の風は古代教會に其の端を發したるものなるが、中世に於て益々盛んに行はれたり。

聖者傳は増加して實際生存せざりし聖者の名多く崇められ六一〇年には法皇ボニアチウス第四世諸聖者祭を始めぬ。聖者の稱號を贈るの風は八〇〇年より九四〇年間に起れり。十字軍は聖者の崇拜の風を盛ならしむる

聖者號の起原

機會となりぬ。東方に於てのみ崇められし聖者は西方に傳へられぬ。基督を刺せし槍は一〇九八年アンテオケに於て發見せられ、基督が聖餐を行ひたる盃は一〇一年カイザリヤ征服の際發見せられ、彼が身に着けたる縫目なき上衣までも現れたりと傳へられぬ。

聖母崇拜の程度

聖者に對する崇拜の程度はスコラ哲學者の議論の一問題となれり。アキナスは三種に區別し、神に對しては禮拜 *Latria*、聖者に對しては崇拜 *Prostratio*、聖母に對しては最高崇拜 *Hyperdulia* を捧ぐべしと云へり。

聖者を顧ひ求むる形式二種あり、一は「何々聖者よ我等の爲に祈れ」と云ふもの、一は「何々聖者の取成しと功德によりて神に祈るものなり。

祈願すべき事に應じてそれ／＼特別に助を與ふる聖者あり。火災は聖フロリアン、安産は聖マルガレタ、海上安全は聖ニコラス、學問の保護は聖カタリナ、鼠除けは聖ベルトルウドなどあるに至れり。

聖母崇拜

聖母崇拜 聖者の最上位を占むるものは聖母マリヤなり。マリヤを崇むることは古代より傳はりし風なるが、中世に入りて益々盛を致せり。これ一は婦人を崇むる士道の影響なり。武士は聖母に身を獻じて其の役を奉じ、戰

仲保者マリヤ

ダミアン

† Pietro Damiani

場に出でては聖母の加護を祈りたり。修道院に獨身生活を營めるもの亦清貞なる其姿に憧憬を寄せぬ。是に於て大寺院にはマリヤの會堂マリアンは設けられ、マリヤを稱ふる讚美は誦せられぬ。聖ベルナルド曰く「基督は父なる神の前に畏縮せる罪人の爲め仲保者として與へられたり、然れども神なる基督の尊き名は罪人の畏るる所に依て以て基督に近くべき仲保者を求む。然ればマリヤの許に進めよ。其の純粹なる人性は子も亦之を崇む。子は母に聽き、父は子に聽く。罪人の爲に設られたる此の梯子こそ我が全き望なれ」マリヤ崇拜の形式を定むるに與て力ありし一人はピイトロ・ダミアン(一〇七〇—一〇七二)なり。以太利の人、禁慾苦行を勉め自ら鞭撻する一宗を開けり。隱者の間に大なる勢力あり。後オスチヤの監督に任せられ一〇五八年カアヂナルに擧げらる。著書の數多し。就中聖母に仕ふる爲の祈禱文及び讚美歌を作り、寺院修道院に於ける日々の勤行の一部分とせり。ダミアンの説教に現れたるマリヤは全然神化したるものにして爲し得ざる事なきものとなれり。ルカ傳第一章二十八節に記されたる天使マリヤを祝する言「めでたし恵まらるるものよ云々」の句を唱ふことは第十三世紀に於て一般に行はれぬ。即

無垢懐胎

2 Immaculate Conception

ちアベ、マリヤ Ave Maria は「主の祈禱」に次ぐ重大なる言となり、幾度も繰返して之を唱ふるを尊ぶ爲に、度数を算する珠數は用ひられぬ。

マリヤは貞潔にして罪垢なきを信する所より、轉じて彼は母胎に宿れる時より潔められ清淨無垢なりしことを信するやうになれり。アンセルムス、ベルナルド、アクイナスは之に反對せしがダンススコオタスと其の徒は之を賛成し、ドミニク派は之に反對しフランセスコ派は之を採れり。然して無垢懐胎の祭は十二月八日に祝はるることとなりぬ。

1 Contrition
2 Confession
3 Satisfaction

悔悛、告白及び免罪 悔悛も亦禮拜の二に數へられぬ。悔悛に必要なは痛悔と告白と贖なり。教會の大勢は告白の義務と其性質を擴張する方に向へり。告白につきては種々の點につきて議論あり。(一)如何なる罪を告白すべきか。トマス・アクイナスは洗禮後大罪に陥りたるもののみ告白を必要とすと云へり。然れどもインノケント第三世は第四回ラテラン會議に於て總ての信者は少くとも一年一度總ての罪を教師の前に告白すべしと宣言したり。(二)告白は誰に向て爲すべきか。教職の前に之を爲すべし。定住の教師の許

善行の功

可を得て他の教師に爲すも可なり。已むを得ざる場合には教職に在らざる人の前になせる告白も亦聖禮典の如き効用を有すとアルベルツス、アクイナスの説なれどもボナヴェンチュラ、ダンススコオタス等は之を以て効力なしと云へり。(三)告白は如何なる効力なるか。大罪は之によりて小罪となり贖ひにより赦され得るものとなる。

悔悛の精神を表する爲に善行を勤むるは昔よりの風なるが、この時代に至りて或る善行を爲せし者は罪の赦を得ることを信するに至り、初めは監督之を與へしを後には法皇大仕掛に之を布告せり。グレゴリウス第六世は一〇四四年羅馬の教會堂の修復に金を寄進するもの、爲め法皇と後繼者は一年三度羅馬の總ての教會に於てミサを行ふべしと約し、ヒルデブランドはハインリッヒ第四世と争ふに當り此の皇帝の反對者ルドルフに隨ふ者に罪の赦免を與ふべしと宣言し、ウルバヌス第二世は一〇九五、五年クレルモン會議に於て信仰心より十字軍に従ふものは全く罪を赦さるべしと約束したり。此の種の約束は十字軍の間に屢々繰返されたり。後には贖の効用は煉獄にある死者にまで及ぶものと解せられ人を誘ふ力を強くせり。固より罪の赦免

4 Treasury of meris 説功德蓄積

を得る爲には痛悔告白の條件の具はることを要したれども此等は一片の形式となり、罪の赦免は獻金或は善行によりて得べしと信せらるゝに至れり。實際の後に理論あり。法皇は如何にして罪を赦すことを得るかに關してスコラ學者は功德蓄積説を以て之を解釋せんと試み、トマス・アクイナス之を完成せり。功德の蓄積とは基督の犠牲をはじめ代々の聖者善人の爲せし善行の功德は蓄積して教會に保存せらるゝ故に、法皇は之を人に與へ得る鑰を有すと云ふにあり。

讚美歌

5 Thomas of Celano
6 Jacobus de Benedictus
7 Adams of St. Victor
8 Robert

讚美歌 中世羅旬教會の讚美歌は莊重森嚴を以て勝る。ベルナルドの事は既に之を言へり。フランセスコの友にして其の傳記を著したるケラノのトマス(一四五頃死)が最後の審判を歌ひたる「怒の日」Dies Iraeは中世の最大なる讚美歌と稱せらる。又十字架の下に立てる聖母を詠じたる Sabat Matar「母は立ちての意は一三〇〇年ヤコブス・デ・ベネチクスの作りしものにして悲惻の調べを以て有名なり。其の他聖ヴィクトルのアダムス(一一七死)佛國ロポルト(一一〇三死)の作亦顯る。アクイナス及びボナヴェンチュラ亦讚美歌を作れり。

第二十三章 外國傳道

此の時代は大なる傳道の時代にあらずと雖も、猶ほ記憶せらるべき二偉人の名を遺せり。1ライモンド、2ルリイ・ド・コルヴィノこれなり。

1 Raymond Lully
2 John de Monte Corvino

フランセスコはムハメッド教徒を教化する必要を感じ計畫する所ありたり。彼は見るべき効果を擧ぐるに及ばざりしも其の精神全くは忘れられず、其の教團のうちより偉大なる宣教師を出だせり。ライモンド・ルリイは一二三四年西班牙のマデヨルカに生る。貴族なり。國王の宮中に入出して華麗なる生活を送り、詩を作り戀を樂めり。或る時十字架につけられたる基督を幻に見、又フランセスコ派の説教者に接して、大に感奮し、ムハメッド教徒の傳道に身を捧げんことを志せり。こゝに於て彼はマデヨルカ島の山間に隱遁しアラビヤ人の奴隸を買ひ之を師として七年間アラビヤ語を學び、又フランセスカンの托鉢僧をしてアラビヤ語を學ばしむべき學校をマデヨルカ島に建てたり。彼はチウニスに行きてムハメッド教徒の學者と議論を闘はし禁

3 Majorca

1 ドライ
・イ
・ル
・モン

4 Bugia

ノ
コ
ル
ダ
イ

銅せられ放逐せられんとして漸く身を以て遁れたり。其後地中海岸の各地に旅行して或はネストリヤンの主教を説きて正統の教會に復歸せしめんとし、或は復た阿非利加に行き猶太人、ムハマッド教徒の教化に力めたり。一三〇一年年グアイエンの會議に出席して基督教國の大學に東洋語の教授を置くべきことを論じオクスフォード、パリ、サラマンカ等の諸大學之を實行せり。彼は傳道の間研究を怠らず、ムハマッド教徒に對して基督教を辨證すべき書を著したり。其の著書四千部に上りたりといふことは信じ難きも今日存するもの三百餘卷ありといふ。七十九歳の時北阿弗利加のブギヤといふ地に到り改信者を訪ひ、市場に立ちて教を説きしが、石にて撃たれたり。基督者の商人之を助けて船に載せ歸航の途中死せり。これ一三一五年六月の事なり。

ライモンド・ルリイが阿弗利加に傳道しつゝある時、デモン・ド・コルダインは北京に來りて傳道しつゝありき。時は元朝に際せり。有名なる旅行者マルコ・ポロの父及び其の兄弟忽必烈の朝廷を訪ひしに、忽必烈は之に托して書を法皇に贈り百人の宣敎使を支那に遣さんことを請へり。羅馬の教會に此の機會に乗するの準備なく、僅かに一二七一年二人のドミニカンの托

鉢僧を遣せしが、達せずして歸る。それより二十年を経てフランセスコ敎團のコルダインは支那に遣されたり。印度に於て支那に行くべき隊商を待つこと一年、途中に三年を費して到着せり。當時支那には景教徒の殘存せるあり、コルダインの來るを喜ばざりしも忽必烈は之を歡待して國都に教會を建てしめ、六千人に洗禮を施し、新約聖書及び詩篇を支那語に譯したり。後より七人の宣敎使を遣せしが、三人は安全に支那に着したり。コルダインは八十年歳まで傳道に盡瘁して死せり。その後元朝倒れて明朝となるに及んで基督教は歡迎せられず、歐洲にも傳道の熱心衰へたり。

第七時代 羅馬教會衰頹時代

一三〇三年より一五一七年に至る

第二十四章 宗教改革前の改革者

改革前の
類

ルウテル、ツキンググレイの人々現はれ宗教改革の大業を成せしに先ちて出で改革の説を唱へたる先覺者あり。機未だ熟せず、多くは志を遂ぐるに至らず、殉教の血を濺ぎしものあれども、改革の氣運は彼等の犠牲によりて作られたり。此の種の人々を略ぼ三類に分つ。第一教理的改革者、第二實際的改革者、第三神秘的改革者これなり。同じ種類のうち固より醇不醇の異あり。神秘的の者は既に記したり。此の章他の二種の人を記すべし。

教理上の改革者とは其志單に道德上の刷新を圖るにあらず、教理信仰の上
に於て羅馬教會の教ふる所に服せざりし人々を云ふ。之に屬するものはワ

ルドオの徒、アルビゼンセス、ウイクリッフと其の徒、フッス及びボヘミヤの改革黨なり。

1 Waldo のワ
2 Waldenses ルドオ

ワルドオの徒即ちワルデンセス 佛蘭西のリオンの町にワルドオと名くる商人あり。鉅多の富を積めり。宗教心覺醒して資を投じて聖書及び教父の書を通俗語に譯せしむ。一日聖アレキシウスが結婚の夕新婦及び両親に別れて修道者となりし物語を読み、又馬太傳十九章にある耶蘇と富める青年の話を読みて決する所あり。財産を賣りて貧者に施したり。一一七七年同志の男女と共に福音を宣傳する目的を以て會を結び、聖書の教のまゝに杖無く旅囊なく木履を穿ちて道を傳へたり。リオンの大監督は彼等の説教を禁じたれども従はざりければ之を其の教區より放逐し、法皇ルキアス第三世は異端なりとして一一八四年之を破門したり。然れども此の派は忽ち南佛南獨、以太利、西班牙にまで傳播したり。其の名稱はアルプス山北に於ては「リオンの貧者」と呼ばれたり。ワルドオは一一九七年にボヘミヤにて死せしが其の徒に對する羅馬教會の禁制は一二一五年インノケント第三世の時に繰り返され、一二二九年ツウルウズにて開かれたる會議に於て普通の信徒の聖書

を讀むを禁ずる規則可決せられたるにより根本的の打撃を受けたり。彼等は元來議論の人にあらず羅馬教會の教義に違ふ考ありしにあらず、一心に聖書の教を遵奉し使徒の模範に倣はんと欲する志なりしも、教會より離れざるを得ざるに至り、次第に羅馬教會に行はれたる傳説を棄て、聖書を以て信仰行爲を教ふる唯一の源となすに至れり。彼等は煉獄の教理及び死者の爲にする祈禱、禮典を取らず。普通の信者にては善き人なれば聖禮典を行ふも可なりと考へたり。然れども其の主張未だ徹底するに至らず、羅馬教會にて行はるゝ種々なる禮典を承認したり。要するに此の派は思想よりも實行に傾き、山上聖訓の如き教を嚴格に行ふことを勉めたり。彼等のうちに神學者なく又思想上の産物の見るべきものなし。然るに聖書によりて養はれたる精神より團結し、非常なる迫害に堪へて今日に至りしは歴史上驚くべき事實の一なり。

宗教改革後の歴史 ルウテルの宗教改革起るに及び彼等はプロテスタントと交通して次第に相接近せり。之が爲に羅馬教會より激しき迫害を受けプロテスタントに於ては一五四五年二十二の村を焼かれ、虐殺せらるゝもの四千人一六八

3 Cathari
4 Albigenses
セビカ
ンアタ
セルリ
スビ及

5 Patarini
6 Publicani
7 Bulgari

五年以太利のピイドモントに於て迫害あり。一萬四千餘の人捕虜となれり。然れども殘徒頑固なる抵抗を試みて敵を破り第十九世紀に至りピイドモントの山間に遣れるもの百二十萬人ありき。以太利統一の後初めて公然信仰の自由を得、今日に於ては以太利に於ける最も有力なるプロテスタントの團體なり。
カタリ及びアルビゼンス カタリと云ふ一派は加特力教會の教義禮典に反對すれども、基督教の本旨に復るにあらずして二元論的思想を混せる所他の改革者と類を異にせり。二元論的世界觀の潜流斷えず、昔はグノオシス宗、マニ教ありしが中世に於てはパウリカン及びボゴミイルとなりて現れたり。カタリ亦同一系統に屬せるものの如し。大體物質と靈魂とを對立せしめ物質を以て惡の源となす。故に結婚及び財産の所有を不可とせり。カサリ即ち純潔の名は之より生じたり。一時其の勢力の及ぶ所頗る廣く、佛蘭西の南北、以太利、獨逸、英國にまで及べり。土地により其の名を異にす。以太利に於てはバタリニ佛國に於てはバブリカニ(パウリカンと同じ)、佛國の北部に於てはブルガリイの如きこれなり。アルビゼンスの如き其の一派なりと見做さる。カタリのうちには學者少からず、眞摯にして議論に長じたり。アルビと云へる都府は南佛にありツウルウズの東北四十一哩の處にあり。

8 Peter de Bruys
9 Henry

アペラルドスの弟子にペテロ・ド・ブルウスと云へる人あり。大膽熱烈なる説教者なり。一一一〇年頃より二十年間此の地方に於て教を説き、小兒の洗禮、十字架を用ゐること、死者の爲にする祈禱と禮典に反對し、基督の體聖餐に宿ると云ふ教理に反對したり。彼は多數の門徒を得しが民衆の爲に焚殺せられたり。⁹アンリイと云へるは初めクルウニイ寺院の修道者なりしが、元來當時の教會に反對の意見を有し、ブルウスの徒に合し盛に活動して紡織業者の間に勢力を得たり。此等の運動とカタリとの接觸の次第明ならざれども兩者相混じて一の運動となりしと見るの外なし。其の頃より此の派は異端と見做され、之に屬する人民を教化して復歸せしめん爲に多くの説教者は送られたり。ベルナアルドやドミニックも之に與れり。一一九八年インノケント三世法皇となるや初めて兵を用ひて此異端を禁遏せしむ。之を稱してアルビゼンスの十字軍と云ふ。殺戮掠奪慘を極む。先づ陥りたるベジェールは人口三萬の都會なるが市民の殆んど總てを屠殺したり。そののみならず嫌疑ある人を法廷に引き異端者は之を火刑に處せり。ドミニック教團の人専ら之に當りぬ。歐羅巴の歴史上の一害毒たる宗教裁判の制は之より始

10 Beziars
11 Inquisition
宗教裁判

まり一二三二年法皇グレゴリウス九世之を承認したり。

宗教裁判所に於ては告訴者の名を告げずして審問し、上告の道なく、拷問をも用ひたり。其の課する刑は或は重き罰金を以てし、或は巡禮をなさしめ、或は終身の禁錮に處し、或は之を火刑に要したり。

デヨン・ウイクリッフと其の徒 ウイクリッフの主張はワルドオの徒と相似たる所あり。然れども彼は貧にして無學なりしに反して、此は大學に據りて勢力を張り高きに居りて叫ぶ利ありき。當時巴里大學は英國との戦争の餘弊を受けて昔の如き勢力なく學界の權は英國のオクスフォードに移り大陸の學徒來り學ぶ者多かりき。ウイクリッフは一三二四年に生れオクスフォードにて教育を受けた。彼は其の學識と人格とに於て嶄然群を抜き、一三三五年「フェロオ」となり、一三六〇年バリオル學校の校長となり、一三七二年神學博士の學位を得て神學を講じたり(當時同大學のメルトン學校に同名の)。彼は又エドワード三世の宮廷に牧師となり樞機に參じ、國王の使節の一人として佛國ブルウスに行き法皇の使者と折衝せしことありき。當時法皇が英國に課する税は甚だ重く國王と國會は之を拒みしがウイクリッフは之に

1 John Wiclif

ウイクリッフ
の徒と其

賛成したり。彼は高き教職にあるもの、暴横富有を攻撃せしかば法皇は彼を禁錮すべく五通の公文を發したれども皇室の保護により、又法皇政治の分裂により無事なるを得たり。然れども思想漸く進みて法皇政治の誤謬を攻撃し化體説の如き羅馬教會の教理に反對し聖書の無上の權威を主張するや倫敦大會は其の説を異端なりと決議し、ウイクリッフは大學を去りてラツタアウオルスに退き牧師となれり。これより先き彼は舊新約聖書を羅甸文より英語に翻譯したりしが一三八二年之を完成せり。全部ウイクリッフの筆に成りしにあらざるも福音書の如きは親ら譯したるものなり。其の外通俗語を用ひて人民の爲に小冊子を著したり。歴史家グリーンは彼を以て英國近世の散文の祖と云へり。

3 Lollards

ウイクリッフは又信仰を同くする人々を國中に派遣して教を説かしめたり。此等の人々はウイクリッフの譯したる聖書と彼の説教の寫を携へて各地を廻り平民の歡迎する所となれり。ウイクリッフは一三八四年に死したれども其の徒はロラルドと稱せられ一大勢力となれり。

ヨハン・フッス及びボヘミヤの改革者 フッスは一三六九年ボヘミヤに生

1 Johann Hus
2 Conrad
3 Miltz
4 Matthias

5 De Ecclesia
コンスタツ會議

る。ボヘミヤの地は元來東方よりの傳道によりて教の開けたる土地なる故に羅馬との關係比較的深からず。ワルドオの徒亦多く此の土地より出でたり。フッス以前にこの國にコンラド²、ミリツツ³、マテアスの三人の説教者出で熱心に教會の腐敗を叫びたり。フッスは此等の先人に負ふ所少からず。且つ一三三二年ボヘミヤ王カアル第四世の女アンナ英王リチャルド第二世の後となりしより以來、オクスフォールド大學とボヘミヤのブラグ大學との間に交通の道開かれ、英國に學びたる學生にしてウイクリッフの書を携へ歸る者多かりき。フッスはブラグ大學の哲學の教授となり、一四〇一年ブラグのベテレヘム教會の説教者となり、雄辯ならずと雖も謙遜嚴格なる人格によりて偉大なる感化を及ぼしたり。

フッスが説教の内に法皇政治の腐敗を攻撃し殊に免罪符賣買に反對したるより次第に波瀾を捲き起したり。然して此の賣買を詐偽なりと罵りたる三人の青年は斬罪に處せらる。フッスはボヘミヤ王の求によりブラグを去て友人の居城に隠れて「教會論」と題する一書を著せり。其の議論全然ウイクリフに基けり。此の間瑞西のコンスタツに教會の大會開かる(次章に詳なり)。

フツスの
殉教

獨逸皇帝シギスモンドはボヘミヤ王の兄弟なればボヘミヤが異端を容れた
りとの悪名を免れしめんが爲にフツスをコンスタンツに來らしめ、フツスは
皇帝より身の上安全の證明を得て行けり。フツスの敵は彼をドミニク派の
修道院の土窟に禁錮し、一四一五年四月より審問は開かれたり。フツスの著
はウイクリッフと同じ意見なる事實摘發せられ、フツスをして説を曲げしめ
んとて種々内部より手段を廻らしたれども彼は之を拒絶したり。斯くて其
の年七月六日頑固なる異端として職を褫ぎ其の靈魂は惡魔に渡さるとの宣
告を與へられたり。フツスは皇帝を注視したるに皇帝は赤面したりと云ふ。
彼は即日火刑に處せられしが、泰然として死ねり。其の友人にて同じく大學
の教授たりしゼロオムはフツスの處刑後召喚せられ、臆して一旦自説を取り
消したるが、未だ放免せられず獄に在りし間に勇氣を回復して前回の陳述を
否認しフツスと同じ刑を受けて死せり。

フツスが殺されたる報着するやボヘミヤ人は憤慨したり。フツスの黨は
ブラグの南五十哩に在る高原に據り之をタボル山と名け、ヨハン・チスカ之を
率ひたり。ボヘミヤ王死して獨逸帝其の兄弟たるの故を以て後を繼がんと

將軍チス
カ

6 Johann Ziska

ラサ
ボノ
ロ

7 Giralmo Savonorola

するの報あるやシギスモンドを怨みたるボヘミヤ人は益々憤激したり。チ
スカは良く兵を用ひ後旨せしも猶彼の在る所必ず勝てり。此の頃よりフツ
スの殘黨は硬軟兩派に別れ溫和派は聖餐の杯を普通の信者に與ふことを
主張し、急激派は根本的なる教理の改革を求めたり。チスカ死して急激派
はず、溫和黨に歸する者を出だせり。かゝるうちバアゼルの大會議開かれて
調和の交渉は開かれぬ。

以上の人々は多少教理上の改革を試んどせしものなるが、他に専ら教會内
の腐敗を淨め道德的の改革を行はんと試みたる人々あり。ピサ、コンスタン
ツ、バアゼルの三大會議の主動者たる人々も此の部類に屬せるが、これは次章
に譲りここにはサボノロラの事を記すべし。

ギラルモ・サボノロラは一四五二年以太利のフェルララに生る。少きより
沈鬱孤獨の人なりき。父母彼を醫者とせんとし、其の爲アキナスの書及び
アリストテレスを學ばしむ。アキナス神學綱要はいたく彼の心を動しぬ。
青年の頃才色絶美なるフイレンチエの貴族の女を戀ひて酬ひられず、念を功
名に斷ちドミニク派の修道院に入り心を潜て聖書及びアキナスの書を讀

み、其の神學の上に固く思想の基礎を築けり。一四八二年フイレンチエに往きて説教せしが榮華に酔へる市民耳を傾くる者なかりしも、彼は此失敗に屈せず、昔の預言者の如き熱誠に充ちて叫びしかば、反響次第に起り來り、其の教を説く處人を以て埋めらるるに至りぬ。彼は遂に聖マルコの院長に擧げられぬ。時にフイレンチエは富豪メヂチ家の權下に服したり。サボノロラは滿都風俗の頹敗を攻撃して假借せざりき。ロレンゾメヂチの死後彼は市の政治に於ける一大勢力となれり。彼は預言者の如く以太利に神罰の來るべきを叫びたるが、果して一四九四年佛國王シャル第八世の侵入となれり。サボノロラの政治的の活動は之より始まりぬ。彼は市民の爲に前後二回佛國王に謁して兵を戡めしむるに盡力せり。之より後彼は着々理想をフイレンチエに實行し、此處を根據として全以太利の革清を行はんとする志ありき。虚榮の巷一時聖徒の都となり、謝肉祭にも躍り狂ふものなく、ポツカチオの書までも焼き棄つるに至れり。彼は更に進んで腐敗の源たる羅馬を攻撃せり。法皇アレキサンダ第六世は彼を憚れども名利を以て之を誘ふ能はず。遂に彼を破門せり。サボノロラは之を無効なりと宣言して捕縛せられて悲

改革の事

殉教

慘を極めたる拷問を受けし末、一四九八年五月二十三日教會を迫害し人民を惑す罪を以て絞罪に處せられ焚かれて其の灰はアルノ河に投せられたり。彼は獄中に於て舊約の詩篇第五十一の註解を著したり。其の中に行によらざる救拯を説くや、其の意見プロテスタント改革者の立場に近きものあり。ルウテルは之を稱賛し序文を附して之を刊行したり。

ロラルドの徒

ロラルドの徒　ロラルドの名は古和蘭語ロレン Lollen 或はルレン Lullen〔歌ふ〕或は「唱ふ」の意より出で一三〇〇年頃アントゥエルブルに起りし或る團體を然か呼びしに生まれりと云ふ。一三八四年ウイックリツフ死して後其世紀の未だ終らざる間に、ロラドと稱せられし其の徒の數俄に増加せり。貴族の間にもありたれども、倫敦其他大都府の中等社會の民の中堅たりき。彼等は聖書を尊んで無二の權威となし、化體説、聖者崇拜、巡禮、教職の俗權、其の獨身生活、羅馬法皇の主上權に反對せり。一三九四年此の精神に原ける請願書を國會に提出せり。ヘンリー第四世の即位（一三九四）後迫害は始まり一四〇一年最初の殉教者を出せしを始めとし、ヘンリー第五世の朝に亘り多くの人大刑に處せられぬ。然れども全く之を滅す能はず、特に東部地方に残存して宗教改革時代に至れり。

第二十五章 バビロン囚虜時代及び

改革大會議

一三〇五年法皇クレメンヌ第五世法皇宮を佛蘭西のアヴィニオンに遷し爾後七十年間此の處に留まれり。事の次第を尋ぬるに、法皇ボニファシウス第八世(一三〇三)は最も法權を擴張したる法皇の一人にして之が爲に佛王フィリップと衝突を生じ、法皇も一時囚へられて禁錮せられしことありき。ボニファシウスの後一代を隔てて位に上りしクレメンヌ第五世(一三〇五)は佛人にして佛國ボルドオの大監督たりし人なり。彼は前法皇が佛國王に加へたる非難責罰をば盡く取り消し、法皇宮をアヴィニオンに遷せり。此地は南佛にありてロオン河の左岸に臨めり。法皇土地を購ふてこゝに住みぬ。此の土地は第十八世紀末まで法皇の所有地なりき。猶太人が七十年間バビロンに囚虜たりし歴史に因みて之を「バビロン囚虜時代」と云ふなり。實に羅馬

1 Avignon

スクレメンヌ第五世

2 Babylonian Captivity

3 Bari

分裂時代

教會大屈辱の時代にして、法權の衰微甚しきを證明したり。クレメンヌ第五世の後アヴィニオンに住みし法皇はジョアン第二十二世(一三〇六)ベネデクトゥス第十二世(一三〇三)クレメンヌ第六世(一三〇三)インノケンツ第六世(一三〇三)ウルバヌス第五世(一三〇三)グレゴリウス第十一世(一三〇三)なり。一三七八年グレゴリウス第十一世死するや、以太利人より法皇を挙げ、羅馬に歸還せんことを求むる要求熱切を極め之に應せずんば、羅馬の騷擾底止することを知らざる虞あり。カアヂナルの多數は佛蘭西人なりしかご、以太利のバリの監督を舉げて法皇となす、羅馬に住みてウルバヌス第六世と號せり。然るにウルバヌス、カアヂナルを攻撃せしかば、彼等は失望して佛蘭西に歸り、ゼネバ伯を舉げて法皇となし、クレメンヌ第七世と稱しアヴィニオンに都せしむ。之より羅馬とアヴィニオンの兩處に法皇ありて所謂分裂は始まりぬ。以太利、獨逸、英吉利は羅馬の法皇を戴き、佛蘭西、蘇格蘭、西班牙は佛國の法皇に屬せり。分裂の時代は一三七八年より一四一七年まで約四十年に亘れり。法皇の權威益々失墜して國民的精神の勃興を促したり。

對立せる法皇の宮廷は孰れも財政の缺乏に苦しみ、官職賣買等の弊政行は

4 Peter Dailly
5 John Gerson

ピサ大會

コン
ツ
大會

れたり。教會の爲に憂ふる人起らざるを得ず。巴里大學の校長にベテロダ
リイなる人あり。其の門下生にして後繼者となりし6ゼルソン(一四三六三)と云
へる學者あり。教會の墮落を慨嘆し、之を救ふ道は基督教國の大會議を開き、
之に主なる權力を握らしむるに如くはなしと信じたり。即ち法皇獨裁の政
治を變じて一種の立憲政治を建てんと計畫したるなり。此の人々の盡力に
より一四〇九年以太利のピサに大會議を開くと、なりぬ。ピサ大會議は先
づ教會の分裂を調和することに盡力し、グレゴリウス十二世とベネデクツス
十三世兩法皇を黜けて、ミラノの大監督を法皇に擧げアレキサンドル第五世
と稱せしが、彼に改革を斷行する氣力無く、位を退きたる兩法皇亦各々或る國
に勢力を有せるを以て實際上三法皇鼎立の姿となれり。其の中アレキサン
ドル死してジョアン第二十三世位を嗣げり。彼は狡猾大膽にして放縱の人
なりき。ナポリ王はグレゴリウス黨なるを以て來りてジョアンを壓迫し、法
皇は皇帝シギスモンド(一四三七)に援助を請へり。皇帝は教會の近狀を憂ひ
居りしかば、彼に迫りて大會議を開かしむ。かくて一四一四年大會議はコン
スタンツに開かれたり。この會議は中世の宗教會議中最も盛大なるものに

して獨り監督大監督のみならず宗教界知名の人士、神學者、王侯及び其の使節
等多く來集し、參列者五千人の多きに及べり。皇帝シギスモンドは親しく會
議に臨み、ゼルソンとともに會議を指揮し權威を維持することを勉めたり。
先づ此の大會議は教會の正統なる代表者にして法皇と雖も之に服従すべき
ものなりと宣言し、三人の法皇をして齊しく位を退かしめ、新法皇マルチノ第
五世を擧げて漸く教會の一致を回復することに成功したり。此の大會は異
端の鎮壓に力を用ゐたり。ヨハン・フツスは教會の權威を認めずとの理由を
以て焚殺せられ、ウイクリフも亦異端の首魁なる故を以て其の著書を焚き
骸骨を焚けり。其の外この會議は異端征伐に忙しく、本來の目的なる教會の
改革につきては見るに足る効果を擧ぐることもなくして終り、一四一八年五月
散會したり。

マルチノ第五世は一四三一年死してユウゼビウス第四世位に即けり。大
會議は宗教上最高權威の所在なるが故に一定の期間内に重ねて之を開くべ
しと決議せられたれば第三大會議は一四三一年瑞西のパアゼルに於て開か
れぬ。此の會議の標榜したる目的は、教會の全體を改革し、異端を滅絶し、基督

パアゼル
大會議

教國の平和を圖るにありたり。法皇は集りたる人々に表れたる獨立の精神を喜ばず議長ケサリニに書を贈りて、一旦會議を停止し十八ヶ月を経て後之を開くべきことを宣言したり。然れども法皇黨以外の議員は之に頓着せずして會議を開きたり。皇帝シギスモンドは法皇の出席を求めたれども法皇はサタンの集會なりとして之を斥け詛の言を以て答へたり。會議は前回と同しく最高の主權を有することを宣言し、數個の事項を處理したり。ボヘミヤのフッス黨との和協は此の會議の一要件にして十五人のフッス黨の代表者は會議に出席したり。長き討議の末一四三三年十一月四箇條の條約を協定したり。(一)聖餐式につきては望むものには麵包と葡萄酒を與ふるも可なり但し教職は其の一のみにて、基督は現在し給ふことを説明すべきこと、(二)教職にある人の罪は唯教職によりて裁判せらるべし、(三)説教者の權威は監督執事より出つべし、(四)教職は財産を所有し、教會は領土を有することを得べし、ただ財産を忠實に用ふべし。ボヘミヤ人は大體之れに満足したり。たゞチスカ黨は服せずして戦ひしが一四三四年五月レパンの戦に破れたり。パアゼルの大會議は大會議は法皇以上の權威あることを決し、法皇の強制的徵稅

を制限する案、法皇の專制權を制限する案、教職の不道德を取締る案を決議したり。皇帝は教職の獨身より生ずる弊害を矯むる爲に何等かの改革を行ふ意志なりしも修道者の反對強くして之を果さざりき。一四三九年會議は散する前に法皇を廢することを決議し、サボア公アマデウスを以て之に代らしめフエリクス第五世と稱せしむ。然れどもユウゼニウスは依然として退職せず一四四七年死してニコラス第五世之に代り令名あり。フエリクスは一四四九年位を去れり。

パアゼルの大會議を認めざる法皇及び以太利人は一四三八年二月フエララに會し、翌年フイレンチエに移りたり。此の會議に於ける重大なる事項は希臘教會と合同の協議なり。希臘皇帝ヨハネ第七世はコンスタンチノオブルの大主教ヨセフを隨へて來り臨みぬ。討議の論點は四箇條にして(一)聖靈子なる神より出つるやの問題、(二)練獄の苦は東方教會の云ふ如く全然精神的なるや。或は西方の人の云ふが如く一部分物質的なるや、(三)聖餐式に無酵の麵包を用ふべきや、(四)法皇權威の問題なり。討議の末妥協の案は成立せり。其の大意は(一)東方教會が聖靈は父より出づと云ふことを重する所以は子な

る神と相關せずと云ふにあらすただ二の根原より發すると云ふ思想を取らざるのみ。此點は西方の教會も異論無し。西方は「父及び子より」と云ひ、東方は「父より子に由りて」と解すれども歸する所は相同じ（この點は西方讓歩せり）。然して西方の教會は信條に「子よりの一句を加ふる權利あり（此の點は西方讓歩なり）」と云ふに折合へり。（二）煉獄の火の性質は孰れにも考へらるべき餘地を存す。（三）聖餐式の麵包は孰にても可なり。（四）法皇は基督の代理者なり。總ての基督者の牧者教師なり、神の教會の統理者なり、たゞ東方の大主教の特權及び權利を保留す。

以上の條項は雙方の承認する所となり、一四三九年七月六日兩教會の合同を祝する爲にフィレンチェの大會堂に於て禮拜は行はれたり。東方の大主教は數週間前突然死せしかば法皇禮拜を司り、東帝威儀を整へて之に臨み慶祝の情溢るゝばかりなりき。かくて東方の皇帝及び使節は歸國せしが、合同の結果に對する東方教會の反對は意外に強く、エルサレム、アンテオケ、アレクサンドリヤの大主教擧つて反對し、コンスタンチノオブルの新大主教は之に賛成したるが爲め職を退かざるべからざるに至り、合同の計畫全く失敗に歸

せり。以太利人は東帝國を援けて土耳其人に當る約束ありしも合同不調に失望して援助を與へず、斯くて一四五三年のコンスタンチノオブル陥落となりぬ。

第二十六章 文藝復興

ルネエサ
ンスの意
義
Renaissance
其の特徴

以太利人
と文藝復興

ルネエサンスと宗教改革とは歐羅巴歴史の中世より近世に移る間に起りたる二大活動なり。ルネエサンスは姑く文藝復興と譯すれども、單に學問文藝の復興よりも廣き意味を有し、中世の社會人心を支配したる世界觀人生觀廢たれて、新しき思想に支配せらるゝことゝなりし變化の時代を指して云ふなり。其の特徴の主なるものを擧ぐれば、權威に反抗して道理の批評を重ずるに至りしこと、其の一なり、個人主義の勢力盛になりしも、其の一なり、自然の美を樂しみ、自然の能力を發揮し現世生活の幸福を享受するを喜ぶも、其の一なり。此等は團體的他界的禁慾的なる中世の理想に對するヒウマニテイの反動と見るべし。然して此の運動は先づ希臘羅甸の古文學復興の形を以て始まり、宗教改革の事業が剛健なる獨逸人の手を俟ちし如く、文藝復興の首動者たる役割は最も以太利人の天才に適したり。古代文物の遺香猶ほ此の土地に残り、地中海邊に興りたる都府には富あり、自由あり、加ふるに東方と

2 Dante Aligheri
3 Petrarch
4 Boccaccio

5 Vita Nuova
ダンテ

ハトラ
カとボ
カチオ
ツ

の交通便利なる土地なれば、文藝復興の花は先づ羅馬、フィレンチエ、ボロニヤに咲き出でしも、然るべきとなり。²ダンテ、³ペトラルカ、⁴ボッカチオの三人はその先驅者たる地位を占む。

ダンテ・アリゲリイ(一二六五)はフィレンチエに生れ、少くして南歐に萌したる國民的詩歌の新しき生命に動かされ、古文學の精神を吸ひ、⁵新生命等の歌を作りしが、壯にして市の政治にたづさはり、黨争の間に奔走して遂に要職に登りぬ。一朝非運に際し國を去りて二十年間以太利の各地に流浪し終にラベナに死す。其の間「神曲」成る。此の詩は「地獄」「煉獄」「天國」の三部より成る。中世の世界觀と信仰の精粹は此の大作に於て優美壯大なる形を以て不朽に傳へらる。ダンテは加特力教會の信仰を歌ひたる詩人なり。其の思想の基礎を供せるものはアキナスの神學なり。然れども彼の一面は新しき時代の光に浴せり。彼は或る法皇を地獄に置くを憚からず、コンスタンチヌス大帝の寄進狀を効力なしと考へたり。

ペトラルカ(一二三〇—一二九四)は近世的の情調に富める叙情詩の作者なり。古文書の探索に力を盡し、又以太利人の使節としてアヴィニオンの法皇宮に使し歸

還を請願したることあり。ボツカチオ(一三七一)はデカメロン物語の作者なり。ダンテ傳を著し「神曲」を講じたり。孰れも創始力に富み自國語の粹美を發揮し國民的自覺を喚起したり。

ダンテの友に畫家ジョットオ(一二七六)あり、一代遅れてフラアンゼリコ(一三七七)あり。淨麗なる壁畫を以太利の各寺院に留む。

一四五三年コンスタンチノオブル陥落して羅馬東帝國遂に滅び、學者典籍を抱きて以太利に來りし事は復興時代の一紀元と見るを得べし。之より先き印刷術の發明あり。一四三八年には木製活字版を發明し、一四五二年頃には金屬製活版を用ふることなれり。一四九二年にはコロンブス亞米利加大陸を發見し、次で一四九八年バスコ・デ・ガマの印度航路發見となる。思想上の發見と地理的發見とは相待ちて忽焉として人類の思想と活動の水平線を擴張したり。斯くて文藝復興の成熟期は來り、レオナルド・ダ・ヴィンチ(一四五二)チチアノ(一五七六)ラファエル(一四八三)ミケル・アンゼロ(一四七五)の鉅匠輩出して繪畫彫刻に絶世の天才を發揮し建築にはルチエサンス式なるもの起り聖ペテロの大會堂は建てられたり。(章末の註を見よ)

- 6 Decamerone
- 7 Giotto
- 3 Fra Angelico

東帝國の滅亡

印刷術の發明

新大陸の發見

- 1 Leonardo Vinci
- 2 Titiano
- 3 Raphael
- 4 Michael Angelo

以太利の復興と異教的なる

獨逸の文藝復興

敬虔の念篤く技術を宗教の聖壇に献する心を以て其作に従事したる藝術家あり、羅馬教會亦美術の保護者たるを以て誇りと爲したれども、以太利に於ける文藝復興時代の文明は其の性質に於ても基督教的に非ずして異教的となれり。「人民は趣味と感覺を飽かすに満足して禮拜に注意すること少し、まして教理には猶更注意せず。其の希望も思想も、彼等の祖先を十字軍の兵士たらしめ禁慾者たらしめたるものと同じからず。彼等の想像はダンテを鼓吹したるものとは遙に異なる種類のものにてありき」(アラニス¹「聖羅馬帝國」)其弊は伊太利の國民的生活を腐敗せしめ、政治家の徳義地を拂へり。腐敗は羅馬法皇の宮廷に及び、歴代の法皇は美術を鑑賞し美術家を保護するに力を費して敬虔の念乏しく品行修まらず。藝術そのものも當初の鉅匠に表れたる單純崇高なるものを失ひて古代文藝の模倣に陥れり。然れども文藝復興の潮流がアルプス山を越えて先づ佛蘭西に入り、獨逸と英吉利に波及してチウトン人の國民性に合するや南歐のそれとは大に異なる側面を發揮したり。基督教の歴史に於て見るべきは獨英兩國に於ける文藝復興なり。

獨逸に於ける新學問の勃興を見んと欲せば先づ大學の設立より説き起さ

いるべからず。第十五世紀に於て獨逸の王侯富豪相競ふて大學を設立し、百五十年の間に十七個の新しき大學は設立せられたり。ボヘミヤのプラグ大學は一三四八年に、ヴイenna大學は一三六五年に、ハイデルベルグ大學は一三八六年に、ケルン大學は一三八八年に、エルフルト大學は一三九二年に設立せられたり。第十五世紀に於てはライプチツヒ、グライスワルド、フライブルグ、トリヤ、バアゼル、インゴルスタット、チウビンゲン、マインツの諸大學設立せられ、ウイッテンベルグ、マルブルグ等の大學は第十六世紀に設立せられたり。然れども先づ新思想の動搖を感せしものは此等の大學にあらずして、神秘的の瞑想に餘念なく見えし「共同運命の兄弟」の學堂に出入せる學生にてありき。彼等は新しき學問の利器を用ひて教育を改良し、教會を改革し、社會的生活を淨めんとしたり。ヨハン・ウエツセル(第二十卷)、ルドルフ・アグリコラ(二四八五)、セバスチャン・ブラン(二四五七)の如き其の錚々たるものなりき。固より伊太利の學問は獨り此等の學徒によりてのみ紹介せられしにあらず、年少の學者以太利に遊學し、伊太利の學者と同じく教會を輕じ、神學を輕じたる人少からざりき。然れども沈着なるチウトン民族の氣風は、以太利人の如く異教的

1 Rudolf Agricola
2 Sebastian Brand
獨逸に於ける新學問

3 Humanist

ンロイヒリ

4 Johann Reuchlin
5 Pfeferkorn

人文學者
の頭目者
との戰

に、伊太利人の如く貴族的なる能はず。彼等の思想は、より多く實質ある問題に傾注せられ、形式の美よりも精神的開拓に向ひたり。先づ神學上の批評より始まりて、希臘、維甸、希伯來の三國語の研究に力を用ひたり。斯かる中此の新しき運動は大學に侵入し、エルフルト大學の如きは新學問の中堅となれり。獨逸に於て新しき學問を唱ふる學者をヒューマンイスト人文學者と稱へたり。一方には之に反對する學者の勢亦盛にして、學徒間の軋轢も亦激しかりき。此の事はロイヒリンと反對黨との争によりて、全國民の注意を喚起するに至れり。

ヨハン・ロイヒリン(一五二五)は當時獨逸の人文學者が推して首領と仰ぎし人なり。以太利に遊學して希臘語及び希伯來語に通じ、特に希伯來語の研究に熱心し、希伯來語の文法書を著せり。茲にケルンの猶太人にて基督教に歸依したるペフェルコルンと云ふもの猶太人を教化せんとする熱心の餘り、舊約書以外の猶太人の書を一切沒收せんとを考へ、皇帝マキシミリアヌスの勅許を得て、運動に着手したり。彼は一五〇九年の夏、ロイヒリンの應援を請ひ來りしが、ロイヒリンは之を拒絶して、反對の意見を發表したり。之より六年に亘れる論戰開かれ、獨逸の學者は兩軍に分れて、人文學者はロイヒリンの麾下

に集まり、之に反對するものをオブスキュラニスト(頑冥黨)と稱へたり。ロイヒリンの擁護者中最も有名なるものをウルリッヒ・フォン・フッテンとなす。彼は貴族の家に生れたる青年にして戦を好み、俠骨あり。自由を愛し、祖國を愛する念強く、又學問の素養あり。幼時より修道院に在りしが、去つて以太利に遊び、法學神學を修め、文筆を執りて戦へり。彼は辯難攻撃の勇者にして、目指す敵は法皇政治にあり。法皇政治は彼に取りて必ず滅ぼさるべきカルタゴなりき。さればルウテルが改革運動に着手するや、フッテンはルウテルの神學を了解し得る深みなかりしも、一臂の力を假すことを吝まざりき。

ロイヒリンの徒は自黨の勢力を張らんが爲に多くの人よりロイヒリンに贈りし書翰を集めて之を出版せしが、後更に一の趣向を案じ、「頑冥黨人の書翰」と題せる書を公にせり。此は頑冥黨の首領と見做されたるケルンのオルチユイナと云へる人に宛て諸方の修道者より寄せ來れる書翰に擬したる者にして、其の頑冥無學にして文章の拙劣なる讀者をして抱腹絶倒を禁せざらしめし一種のドンキホーテなりき。何人の筆になりしや詳ならず。或る人はフッテンの著せしものなりと云ふ。正に一五一五年の暮にしてルウテルが

戦を開始する日近かりしも、ルウテルは一層森嚴なる問題に心を潛みたる最中なりければ、諧謔の書に注意するに迫なかりしならん。

然れども歐洲の大局の上に於て新學問を代表したるものは、ロイヒリンにあらずして、デシデリウス・エラズムス(一五三六)なり。彼は文藝復興の長短併せて代表せる人なり。和蘭のロッテルダムに生れ、デヴェンタアの學校にて教育を受け、巴里に於て神學を修め、一四九八年英國に遊び、コレット及びトマス・モアアの人々とともに新學問を鼓吹し、後瑞西のパアゼルに住ひ著作に従事したり。其の著述の中最も有名なるものは「愚人の頌」及び「對話集」なり。極めて鋭利なる批評眼を以て觀察したる羅馬教會の腐敗をば縦横に諷刺し嘲弄したるものにして、其觀察力と文章の巧妙を兼ね備へたる點は、ヴォルテアに相似たり。其の盛名一時歐洲を歴し、前後比類少き勢力を揮ひたり。然してエラズムスは單に諷刺をのみ事とするものに非ず、基督教は何たるか、如何して之を改革すべきやの問題に就て一個の定見を有したり。彼は思へらく、基督教は教理にあらずして生活なり。基督の生涯に實現せられたる愛、謙遜、純潔等、是れなり。眞正の宗教改革は道德的革新を行ひ、基督の宗教

に歸らしむるにありと。此に於て彼は一面諷刺に依りて當時の宗教神學の愚を暴露したるとともに純粹なる基督教を世人の眼に示さんために新約書の原文に緒言とパラフレーズを加へて發行したり。其の第一版は一五一六年に、第二版は一五一九年に、第三版は一五二二に、第四版は一五二七年に、第五版は一五三五年に成れり。

エラスムスは議論より云へば必ずしも道德的革正に止まるべきに非ずと雖も彼の主張はルウテルの如く根本的なこと能はざりき。元來平和的調和的人にして戰鬥の場に立つ人に非ず。其の思想は理知の批判より出でしものにしてルウテルの如き深き經驗の産物にあらず。ルウテルが宗教改革を始むるや暫し同行して復た直に袂を分ちて去れり。

英國に於ける宗教改革は獨逸のそれと相似たる性質を發揮したり。以太利に遊學したる學生は新學問の熱心を懷きてオクスフォードに歸り來りしが其の中に倫敦の市長たりしことある富める商人の子デジョン・コオレット(一四六六)あり。彼は以太利に遊んで羅馬の風に染まらず希臘語を學びし目的は之によりて新約聖書の深き意味を開く鍵を見出すためなりき。彼がオク

英國の文藝復興

John Colet

モトマス

1 Thomas More
2 Utopia

モオア
スタイル

スフォールドに歸りて聖書を講ずるや中世的の寓話的神學の束縛を打破したり。エラスムス稱賛して『我が友コオレットに聽く時はプラトオンに聽くが如き感あり』と云へり。コオレットの講堂は熱心なる聽講者を以て充たされたり。コオレットとエラスマスの薰陶により出でたる天才にトマス・モオア(一四七五)あり。彼は快活にて善く談じ博く書を読み口を極めて修道院の隱遁主義を罵倒すれども身を持すること嚴格なりき。彼の生涯は幸福を以て始まり悲惨を以て終れり。國王ヘンリー第八世の寵遇淺からず大臣の位に登りしがヘンリーが離婚事件(第三章第十二)より終に羅馬法皇に背き去るやモオアは之に反對し忠義の盟約を爲す事を拒めり。之が爲に倫敦塔に幽囚せられ名著『ユウトピア』を留めて斷頭場の露と消えぬ。

中世會堂の建築 ハンリカ式及びビザンチン式の建築につきては一卷第四十六章に記せり。其より以後ルネサンス式に至るまで中世を通じて建築術の變遷を略叙すべし。ビザンチン式は第六世紀即ちユスタチニヤン帝の時代以後漸く衰へたり。中世初期に於ては西歐の建築亦大にビザンチン式の影響を受けしが、シナールマン帝の戴冠以後獨立せる建築の式漸く發達せり。之をロオマネスク式と稱す。此はハンリカ式より發展して之にビザンチン式の或る要

1 Romanesque Style
2 Gothic Style

ゴット式

3 Renaissance Style

ルネエサ
ンス式

第七時代 羅馬教會衰頹時代

四八二

素を加へたるものなり。半圓形の拱^{アーチ}を用ふるは此の式の特徴なり。基形たる十字の比例一定し來り、色硝子の製作も完備したり。此の式は第十一世紀の始に於て整頓し北部伊太利のピサ、ヴェロナ、ミラノ及びライオン、ロオン兩河時に多くの美麗なる建築を殘したり。第十三世紀に至り²ゴット式建築隆盛を極めロマネスク式は廢れぬ。ゴット式の起原は第十二世紀にあり。中世文化の盛を極めたる第十三世紀に於て絶頂に達したり。其の特色は尖頂形の拱、垂直線を極めたる窓邊の飾、尖塔等にあり。雄健、奇峭、向上、神秘の情調此の建築に現る。細密なる時代の結晶と稱すべし。一一四〇年巴里に近きサン・デニイに起工せられたる會堂は最初の標本なり。ノートルダム、ランス、アミアンの大會堂次第成れり。ゴット式は間もなく英國に傳へられ、一一七四年再建に着手せるカンタベリー會堂、一二四五年再建工事を始めたるウエストミンスター會堂皆佛國の式に則れり。英佛兩國のゴット式は多少特徴の異あり。前者は莊嚴を以て後者は溫雅を以て勝る。獨逸、伊太利、西班牙の諸國にも行はれたれども(ケルンの會堂及びザインナのステハノ會堂の如きあり)英佛兩國に及ばず。伊太利人の天才はルネエサンス式を發達せしめたり。ゴット式が末期に於て纖巧柔弱に陥りしに當りルネエサンス式は之に代り盛を極めたり。此は中は古代式の建築の復興にして半圓形の拱、圓頂閣、希臘式の圓柱を用ふ。羅馬の聖ペテロ

會堂(一五〇六年起工一六六七日落成)は最大最美の標本なり。

第二十七章 東羅馬帝國の滅亡及び東方教會

復
ブ
ン
コ
ン
ス
タ
ン
チ
ノ
オ
プ
ル
の
回

1 Michael Palaeologus
2 Arsenius

一二〇四年十字軍士がコンスタンチノオブルを取りて此處に羅甸王國を建てしことは既に之を記したり。首都を奪はれし希臘人はトレビゾンド、テサロニケ、ニカヤの三個處に政府を建てしが、ニカヤにありしもの次第に強大を加へて勢力の中心となり、希臘教會も亦コンスタンチノオブルと相關せずして存在せり。遂に一二六一年希臘人は隙を視ふてコンスタンチノオブルを襲ひ之を回復したり。之を率ゐたるミカエル・パレオロゴスは皇帝にあらず、當時八歳なりし後嗣者の教師保護者なりしが、自から皇帝の位を占め得んが爲に幼帝を盲人となせり。時の大主教アルセニウスは此の罪惡を責め赦免を與ふるを肯せず、遂に追放せられ、其の後任者セヨフの前に皇帝は跪きて罪を告白し漸く罪を免せられぬ。

首都は回復せられたれども國力衰微して癒す能はず、東帝國滅亡の一大原

オ
ト
マ
ン
土
耳
其
人

1 Ottoman
2 Seljuk
3 Murad I.

4 Hadrianopolis
5 Kosovo
6 Bajazet
7 Nicopolis

因をなせり。希臘人が羅甸基督教國に對する怨恨深からざるを得ず。且つ疲弊せる帝國を倒すべき勢力は東方に崛起しつつありき。オトマン土耳其人これなり。

¹オトマン土耳其人は十字軍の時代にバレステナ附近の土地を領有したるセルヂュク土耳其人とは種族を異にせり。彼等は慍悍なる遊牧民なり。嘗て裏海の東岸に住みしが、蒙古人の壓迫より遁れて西に移り、セルヂュク土耳其人の殘餘の土地を奪ひて國を建てたり。之に君臨せるオトマン第一世はニコメヂヤ、ニカヤ、イルリウムの土地を奪いて對岸の帝國を壓せり。²ムラド第一世(二三六九)の代に於て土耳其人は海峡を越えてコンスタンチノオブルの背後を扼し、⁴アドリヤノポリスを取りて都となせり。セルヴィヤ人とブルガリヤ人とと戦ひたれど⁵ゴソヴアの戦に破れぬ。ムラドは此の役に戦死したれども其の子バヂヤゼットは勇猛絶倫にしてマケドニヤ、テサラリヤより希臘の南部にまで領土を擴張せり。東帝シギスモンドはブルガンヂイ侯の援助を得、十萬の兵を以て一三九六年⁷ニコポリスに戦ふて敗北せり。斯くて一四〇〇年頃には東帝國の中に殘れるはコンスタンチノオブル及

帖木兒の勃興

8 Tamerlane (Timur)

び二三の斷片の土地に止まり四邊は敵國に包圍せられ最後の運命は益々迫りつつありき。然るに猶ほ半世紀の命脈を維持するを得たるは帖木兒の勃興に因れり。帖木兒はサマルカンドより興りて一時は印度より小亞細亞に跨る大帝國を建て土耳其人の背後を壓したり。彼は將に明國を攻めんとして一四〇五年途中に死せり。土耳其人は之より後顧の憂を免れぬ。東帝國が此の危機に處する道は西方の基督教國と親和して其の援助を得るの外にあるべからず。是に於て之が爲に腐心したるものは人民にあらずして皇帝なりき。ミカエル・パレオロゴスも東西教會の親和の爲に力を盡したれども羅馬法皇等は彼を目して僭奪者となし之に應せざりき。ヨハネ第七世(一四四二五)即位するに及びて國運の愈々危殆なるを見羅馬法皇ユウゼニウスと交渉する所あり。遂に大主教其の他を隨へて親しく以太利に渡り、フィレンチェの大會議に列りて東西教會合同の議を整ふるを得たるも歸れば東帝國の人民は之を悦ばず苦心遂に空しきに歸し西方教會の人をして傍觀の地に立たしめたり。

一四五一年英武にして冷酷なるムハメッド第二世土耳其帝國に君臨する

コンスタンチノポリスの攻撃

9 Justiani

陥落の前夜

10 Firenze

に及びコンスタンチノポリスを取りて國都となすの志を決し攻撃の準備を整へ、一四五三年四月六日土耳其軍はコンスタンチノポリスの城門に達せり。羅馬帝國最後の皇帝なるコンスタンチン・パレオロゴスは七千人の兵とともに防戦せんぞす。其の中二千人はゼノア及びヴェニスの兵にしてゼノアの貴族ユスチャニ軍を督して良く戦へり。然れどもゼノア人が數隻の軍艦と糧食を送りし外西歐の諸國皆な冷然たり。かかる中土耳其人は火箭と新しき武器なる大砲とを併せ用ゐて堅固なる城壘を破壊せしかば防戦五十餘日の後陥落の日は來りぬ。

ギボンが『羅馬衰亡史』の中に此の戦記を叙する所は出色の文章なり。彼は落城前夜の光景を記して曰く『二十八日(五)の夕、希臘人中の身分最も貴き者同盟軍中の最も勇敢なるものは王宮に召されぬ、こは總攻撃に際して其任務と危険とを覺悟せしめんがためなりき。彼れは或は約束し或は誓ひ、我が胸中に消え果てたる望を人の心に起させんとせしも効力無かりき……されど君王の爲す所に倣ひ、包圍の裡に在るを知つては、さすがに絶望の勇氣を戰士に装はしめたり。此の悽愴なる集會に列りし歴史家フレンザは具に當

夜の悲壯なる光景を記し留めたり。彼等は相抱擁して泣きぬ。然も家族と所有を顧ず、身命を賭して將士は各自の持場に就き、終夜眠らずして城壘を守れり。皇帝は忠義なる臣下數人を率ゐ、數時間の後には變じてモスク(ムハメツド教の堂)となるべき聖ソフイアの會堂に入り、涙と祈禱とを以て恭しく聖餐の禮典に陪しぬ。それより慟哭の聲に充ちたる宮殿に於て數瞬間の休息を爲し、もし從來何人にか害を加へしことあらば之を赦されんことを求め、馬に跨りて守備を視察し、敵兵の行動を探りたり。

城中の兵苦戦せしと雖も、五十倍乃至百倍の敵に當ること難し。土耳其人は潮の如く城壁の中に溢れ來り、ユスチャニは傷を負ふて退き、皇帝は亂軍のうち、戦死したり。奪略と殺戮縦に行はれ、慘劇都に滿ちぬ。ムハメツド教の信條は此の日より聖ソフイアの會堂に唱へられぬ。一四五三年五月二十九日コンスタンチノオブルは陥りぬ。

コンスタンチノオブルの陥落に續きて東帝國の殘土盡く土耳其人の有に歸しぬ。然れども基督教徒と猶太教徒を強壓してムハメツド教徒となすことは、「コオラン」の禁する所なるを以て基督教徒は進んで教を傳へざる限りは其

陷
落

基督者の
運命

1 Janissaries
2 Cyril Lucaris

の信仰を維持することを許されたり。土耳其のサルタンは希臘人がコンスタンチノオブルに住むことを希望し、教會の會議を組織せしめ、擧げられたる大主教に授くるに金銀造りの十字架章を與へて之を任職せり。然れども基督教徒は何等の權利なき民となり、ムハメツド教徒には課せられざる種類の税彼等にも課せられぬ。最も殘酷なるは五人の男兒のうち一人を買する制度なり。この制度は之より先きムラド第一世の代に始められし所にして、二三年毎に官吏都鄙を巡りて基督教徒の家より體格優れたる兒童を徴し、之にムハメツド教の教育を施し、訓練して兵士となせり。是の如くにして編成せし軍隊を「¹チャニサリイ」と稱し、土耳其國の武力の一要素をなせしが、後に至りて國の累をなせり。

東方の教會は益々銷沈せり。西歐に文藝復興ある頃東方の學問は益々衰へぬ。教職の地位は益々低きものとなりぬ。此の間アレクサンドリヤの大主教にして後コンスタンチノオブルに移りたるキリル・ルカリス(一六三二)の改革の企圖は西歐にまで聞えぬ。事は宗教改革と同時代に屬するを以て次の時代の歴史に譲るべし(第十三卷 第十九章)

第二十八章 希臘教會に於ける禮拜及び生活

希臘教會は其の儀式禮典に於て中世末より今日に至るまで改變する所少し。禮典は羅馬教會と同じく七個なり。日本の希臘教會にて用ゐらるゝ名稱に従へば、聖洗、聖體、傳膏、痛悔、神品、婚配、聖傳これなり。此の教會に於ては禮典と云はずして機密と云ふ。「ミステリイ」の義なり。聖洗即ち洗禮の式は三度水に沈む。其の前、間に應じて三度惡魔を棄つる事を答へ、西に向ひて此の意味を表せる舉動をなし、然して東に向ふ。これ皆昔の風を維持せるなり(第一卷第二十、九章參照)。小兒の洗禮を行ふ。傳膏は堅信禮のことなり。司祭十字形に額、鼻孔、耳、胸、手足に膏を塗る、これより以後常に神の教導の下にあることを示す。痛悔は西方教會に於ける如く細密なる制度とならず。痛悔者は痛悔の祈禱を爲して後詳に自己の罪を告白す、是に於て司祭は罪の赦免の文を誦す。神品は羅馬教會に於て品級と稱するもの即ち任職式なり。婚配は結

禮典

1 Mysteries

聖體機密

2 Liturgy (Λειτουργία)

と羅馬教會の差異

婚式なり。聖傳は羅馬教會の終油の如く死に臨むでするにあらず。ヤコブ書にも見ゆる如く病者の爲に之を行ふ。葡萄酒を和したる聖膏を七度肢體の各部に塗り、聖書を病者の頭上に置いて罪の赦しの文を誦す。

東方教會に於て禮拜の中心となれるは聖餐式なり。之を聖體機密(リトルギャ)と稱す。之を執り行ふ式羅馬教會のそれに比して更に煩雜なり。式の順序は主の兄弟ヤコブの定めしものに原けりと云ふ、之に據りて聖バシルの定めしと云ふものと、聖クリソストムの定めしと云ふものとあり。後者は前者に比すれば簡約なり。コンスタンチノオブルの教會にて採用せられ、後遍く行はるゝに至れり。羅馬教會に於て聖餐式とミサ祭と二の部分あると同じく、希臘教會に於ても先づ麴包と酒とを聖祭品として神に献じ、之を基督の體となし血となさんことを祈る。祭壇の前に聖障と稱ふるものありて機密は其の内にて行はれ一般の陪餐者は見るを得ず。麴包は醱酵せるものを用ふ。又小兒の陪餐を許す。これ等は羅馬教會と異なる所なり。その他蠟燭を點じ、屢々扉を開閉し、聖爵、星架、聖戈などさまじの祭器用ひらる。

聖者、畫像、十字架、遺物の禮拜は羅馬教會に比して更に盛なり、但だ磔殺の像

と彫像は之を用ひず。

希臘教會は第八世紀の初より讚美歌の作者を多く出たせり 第十一世紀の半まで断えざりしが最も良きものは八二〇年までの間に作られたり。³ マヌス(年頃死)⁴ コスマス(年頃死)を始として神學者ダマスコのヨハネ(第五章)亦讚美歌の作者として顯はる。其の作りし「これ復活の日なり」の歌は西方に於ても多く用ひらる。パレステナの聖サバスの修道院のステファノ(四七九)の「疲れたるものよ」の一篇(讚美歌)亦有名なり。スツデウムの修道院はテオドオル、⁷ ヨセフ、⁸ テオクリタスの如き作家を出しぬ。

修道院生活は此の教會に於て理想的生活として重せられ、主教(監督)は修道者の中より取れり。東方の修道院中最も有名なりしはスツデウム及びアンス山のそれなりき。スツデウムはコンスタンチノオブルにあり。畫像崇拜を維持する爲に戦へる牙營となり、後には讚美歌作者を出したるを以て顯れぬ。アンス山はテサロニカの東方多島海に突出したる三半島の一にあり、白花岗石の高山海面を抜くこと六千三百呎、こゝに大小の修道院會堂を合して禮拜の場九百三十五を數ふと云ふ。東帝國の皇帝にして位を棄て、此處に

讚美歌

- 3 Romanus
- 4 Cosmas
- 5 St. Sabas
- 6 Theodore

- 7 Joseph
- 8 Theocritus

- 1 Studium
- 2 Mt. Athos

のアリス修道院山

- 3 Hesychasten
- 4 Codex Sinaiticus

神學者

- 5 Photius
- 6 Bibliotheca
- 7 Nomocanon
- 8 Theodore Balsamon

隠退したるもの數人なりき。されば美麗なる壁畫あり、美術の寶こゝに藏せられ、其の文庫には多く古文書を保存せり。羅甸人がコンスタンチノオブルを取りし間、又土耳其人の侵入の始に於ては害を被りたれども、コンスタンチノオブル陥落の後、却て貢を土耳其人に納れ、一種の獨立を保ち得て今日に至れり。この修道院に一種の自己催眠の修行法あり。目を臍に着け呼吸を深くして無我の状態に入る。之を爲す人をヘスカストと云へり。其の外シナイ山に修道院あり。第六世紀ユスチニヤン皇帝の建立する所、一八五九年チシエンドルフ教授が有名なる新約聖書の古寫本(シナイ原本)を發見せし寺院なり。

創始的思想の生命は涸れぬ。然れども學問の道全く荒敗したるにあらず。ダマスコのヨハネ以後の神學者はフォーチウス(章十一)を以て最も大なりとす。其の著東方教會に於て尊重せらる。著述頗る多し。「ビブリオテカ」は文學百科全書の類にして基督教及び異教の書三百部の拔萃及び解題より成る。其の大部分は傳はらず。同じ人の著「ノモカノン」は希臘教會の教會法の基礎となれり。一一八〇テオドオル・バルサモン其の註解を著せり。フォーチウ

9 Eustathius
10 Michael Acominatus
11 Nicholas Cabasilas

第七時代 羅馬教會衰頹時代

四九四

スが古代文學の研究に力を用ひしことは學を興すの效果なきにあらざりき。ユウスタチウス、ミカエルアコミナツスの如き學者は彼に亞で起れり。コンスタンチノオブル¹⁰が十字軍に占領せられし時代の後に出でし學者のうちテサロニケの大主教ニコラス・カバシラス^{(四三)死}は神秘的の思想に富みし人にして「基督に於ける生命につきて」と題する書を著せり。タウレルと時を同じくして其の思想亦相似たりと云ふ。

第三卷 近世基督教史

第八時代 宗教改革時代

一五一七年より一六四八年に至る

第一章 第八時代總論

宗教改革
の意義

常に基督教の近世史がルウテルの宗教改革を以て始まるのみならず、汎く歐羅巴の近世時代亦之を以て始まるを見るを以て適當なりとす。レフォオメーション Reformation は改造の意なり。之を譯して宗教改革と云ふは充分適當ならずと雖も、姑く通稱に隨へり。宗教改革は多方面の事象にして其の起りたる意義亦原一ならず。民族の關係より見れば、政治制度を重んじ美的の分子多き羅甸民族の基督教に代りて、素朴獨立自由純潔の精神に富みたる日耳曼民族の基督教の勃興と見るを得べく、又權威と自由の關係より見れば、羅馬法皇の權威に對する國民的精神の覺醒、教會の權威に對する個人判斷の

r Ullmann

宗教改革
と文藝復興

権利の主張と見るを得べし。然れども一層深き宗教的意義を質せば、傳説の束縛を脱却し根本の基督教に復らんとする運動と、内的宗教的經驗の權威の主張とを以て主眼となす。ウルマンが宗教改革は福音として見たる基督教が律法として見たる基督教に對する反動なりと云へるは、此の意義の一面を表し得たるに庶幾し。アウグスチヌスの思想の忘れられたる一面の再び喚び起されたることに、パウロの神學其の勢力を復興し來りぬ。

自由を重んじ、個人の意識と判断とを重じ、遁世主義、出世間的な生活に反對して現世生活の價値を認むる點に於て宗教改革の精神は文藝復興の精神と相一致す。文藝復興は宗教改革の生長し得べき空氣を供給せり。宗教改革の先輩にして文藝復興の思潮に養はれたる者亦多し。然れども根本の要求に於て二者相異なり。彼の求むる所は自然的性能の發達なり、此の求むる所は超自然の恩寵によれる靈魂の救なり。文藝復興を導きし精神の中には希臘思想主なる要素なれども、宗教改革は寧ろ峻嚴なる希伯來的精神に動かされて起りたり。ルウテル等を動したる動機は、時代の要求を充たさんとするにあらず、己むに己まれぬ衷心の要求にありしと雖も、おのづから時代の最も深

き要求を満たし得る事業を爲したり。ゾオムの云ひし如し、曰く「中世の世界が衷心に於て願ひ求めし者は文藝復興にあらずして宗教改革にてありき。藝術及び學問の更生にあらずして教會が頭首より肢體に至るまで更生するとなりき。古代世界發見されたりとの喜ばしき消息にあらずして、貧しき者に宣べ傳へられ、罪人に祝福を齎らして全人類を更生せしめ得る喜ばしき消息にてありき。教會の生命の革新に因れる道德的復興こそ最大最高の目的にして第十五世紀の諸勢力は幾度か之に向ひて一致の運動をなすべく攪起せられたりき」(教會史要)

プロテスタントの改革者の思想上に於ける興味は神學に集中したり。ルウテル、ツッキングライ之を開拓し、メラクソン、カルヴィン之を組織して、プロテスタントの神學系統は建てられぬ。此の神學が政治、教育、道德、哲學及び國民生活に影響したる所甚だ大にしてプロテスタント教國の文化をして加特力教國の文化とは異なる性質を帯びしめぬ。

宗教改革時代の歴史は又加特力教會復興の歴史を含めり。加特力教會の生命未だ全く涸れず腐敗を淨め規律を振肅して敵に當るの運動は興されぬ。

神學

加特力教會
の復興

此の兩勢力の外に猶さまゞなる思潮あり。精神的醗酵の時代は種々の複雑なる現象を生じたり。中途にして壓倒せられ、泯滅に歸して思想と人とも忘れられしもの少からずと知るべし。『アナバプテスト』の如き其の一例なり。

政治の關係、國民性の異同等複雑なる事情は、精神的の戰の間に錯綜し、首動者の過失、個人の野心亦累を爲して改革の運動に幾多の頓挫失敗苦戰の歴史を留めぬ。内亂の血は各國に於て流され三十年戰爭に至りて慘を極めたりき。然して後チウトン民族主たる北歐に於てはプロテスタント勝を占め、羅甸民族の住める南歐の地は依然として加特力教會の領土として遺れり。

参考書 宗教改革史の全局面に亘れる書はリンゼエ Lindzey ウォーカア Walker ケムブリヤ近世史の『宗教改革』三十年戰爭ランケ Ranke の『獨逸宗教改革史』皆好し。『現代の文化』Die Kultur der Gegenwart の基督教史の卷に收めたるトルネルチ Troelisch のプロテスタント基督教に關する文章は價值多きものなり。スアード Beard のヒツボルト講演『宗教改革と近世の思想及び知識との關係』亦参考すべし。我國には村田勤著『宗教改革史』あり。
ルウテッ傳にはケストリン Koestlin フライタハ Freitag (以上二書ともに英譯あり)

リ) ヘルネ Kolde ハスラアト Hausrath 及びヘンリイ・プレサアアド・スミス Henry Pre-served Smith ヤギフェルトの著あり。カルワイン傳にはツウメルグ Dommergue の大著あり『宗教改革の英雄』The Heroes of the Reformation と題する叢書にはウォーカア Walker のカルザイン傳、ヤクソン Jackson のツキングリイ傳、リチャード Richard のメラックトン傳等の好著を含めり。

宗教改革の神學の歴史は一般教理史の外に良書少し。ドルネル Dornier の『プロテスタント神學史』(一八六七年)は既に舊しと雖も代るべき良書無し。ヤギフェルトの『カント以前のプロテスタント思想史』は簡にして要を得たり。ルウテールの神學はハルナツクの教義史の其の部分及びヘルマン Hermann の『神との交通』の解説最も見るべしとなす。

プロテスタント教會の諸信條はシャッフ Schaff の『基督教國の信條』第三卷に網羅せり。

羅馬教會復興の歴史はランケの『法皇史』ドロイセン Droyen の『對抗的宗教改革史』あり。加特力教の立場より書きたる宗教改革史にはアリンガア Dollinger の著あり。國別の歴史は、こゝに擧ぐる能はされどもスアード Baird のユウゲノオの歴史、モトリーモley の『和蘭共和國の勃興』フルウド Froude ガアザナア Gardiner ヌイ Green の英國史見るべし。

第二章 ルウテル及び改革運動の起原

マルチン・ルウテルは一四八三年十一月十日ザクセン選帝侯の領内なるアイスレエベンに生る。父は剛健なる鑛夫にして母は信仰篤き婦人なりき。¹家は貧しかりしも其子の教育に意を用ゐ、ルウテルは幼時より學校に送られ貧困の間に勉學せり。十八歳にしてエルフルト大學に入る。エルフルトは當時獨逸に於て有名なる大學にしてスコラ學派と人文學派の思想の交流せる處にてありき。ルウテルはスコラ哲學及び羅甸の古文學を修めたり。人文學派の人と交を結びたれども其思想の傾向に一致するに至らざりき。一五〇二年「バカラウレンウスの學位を得、一五〇五年マギステルの學位を得、學業の成績群を抜けり。之より進んで法學を修めんとせる時、突然大學を去りてアウグスチヌス教團(第二章參照)の修道院に入りぬ。こゝに至らしめたる原因は詳に之を知ると難けれど、一人の親友が急に死せしと、ルウテル自身中途にて激雷に逢ひし事は、心を決せしめし機縁なりと知らる。彼は自ら疑ひし

トエ Martin Luther テンマ
2 Eis-leben ル・ル
3 Erfurt ルウチ
ル

入修道院に
入る

其の動機

爲に修道院に入れりと語れり。蓋し修道者となれば普通の人よりも靈魂の救を得て安全なるべしとは當時世に行はれたる思想にして、寺院の壁畫にもこの意味を描きたるもの多かりしと云ふ。ルウテルは斯かる不安の念に驅られて修道院に入りしが、豫期したる安心を此の裡に得ずして深刻なる煩悶を経たり。之より先き彼はエルフルト大學の圖書館に於て羅甸語の聖書を發見して以來熱心に聖書を研究せしが遂に疑惑より脱すべき光明をパウロの書翰のうちに發見したり。且つここに至るを得しはアウグスチヌス派の長スタウピッツの啓發に依ること少からず。スタウピッツは信仰によりて義とせらるる教理を了解したる人なりき。ルウテルは長く苦しき宗教的經驗によりて、信仰により救を得るてふ單純なる福音の眞理を發見し、神をただ峻酷なる主君と見たる中世の信仰の非なるを覺るを得たり。其の心歡喜にて充ちぬ。

スタウピッツは又兼ねてウイテンベルグ大學の教授たりしかばルウテルを推薦して同大學の論理學及び物理學の教授たらしめ、更に進んで神學の教授たらしめんとせり。ウイテンベルグ大學は、一五〇二年の創立にかかる新

ウイッ
ンベル
グ大
學

2 Staupitz

スタウ
ピツ
ツ

しき學校なりき。ルウテルは先づアウグスチヌスの神學を研究し、ベルナアルドの著を読み、獨逸の神秘家の書に親みぬ。一五一一年より翌年にかけて使命を帯びて羅馬に旅行し、自ら云へる如く狂へる聖者の如くあらゆる會堂を駆け歩き、あらゆる虚偽を信じたり。歸りて後暫時エルフルト大學に於て神學を研究せしが、スタウビッツの切なる勸告に動され、一五一二年十月神學博士の學位を領し神學の教授に身を委ぬるに至りぬ。先づ詩篇及びパウロの書翰を講せしが、其の説く所實際に切實なるを以て異彩を放ちたり。聖書に關するルウテルの見解亦漸次透明に進めり。彼は又説教者として講壇に立ちたり。其の名聲益々高くウイテンベルグ大學はルウテルあるが爲に頓に學生の數を加へたり。彼は聖書及びアウグスチヌスの教ふる所とスコラ哲學との間に著しき相違あるを認め、アリストテレスを棄てスコラ哲學を斥け聖書とアウグスチヌスに歸るべきことを主張せり。此の二の源の外には一五一六年に初めて接したる「獨逸神學」を尊重せり。其の思想は徐々に發展しつゝありしが、免罪符の販賣の風は彼をして實際の戰場に立たしめぬ。

免罪符販賣

免罪罰販賣の風習は、既に記せし如く罪に陥れる人悔悛の實を表する爲に

思想發展

神學教授

3 Albrecht
4 Johann Tetzel九十五箇
條論題の
揭示ルウテル
の思想の
發展

或る善行をなすことを要する羅馬教會の定めより來れり。且つ第十三世紀頃より行はれたる功德の蓄積てふ思想は、免罪符の原理とも云ふべきものなりとこれ亦既に記せしが如し(第二章參照)。此の頃法皇レオ第十世は聖彼得大會堂建立の費を獲んが爲に免罪符販賣を布告し、獨逸帝國內に於てはマインツの大監督アルブレヒトに此の權を委ね、アルブレヒトは又ヨハンテッセルを用ゐて事に當らしめたり。ルウテルはテッセルが漸くウイッテンベルグに近くを見慨然起つて免罪符に關する説教を始め、更に又一五一七年十月卅一日諸聖徒祭日の前日ウイッテンベルグの諸聖徒教會堂の戸に九十五箇條の論題を揭示して免罪符販賣の非を鳴せり。此は當時大學に於て討論を催ふすものを用ゐる方式にして、挑戦に應ずる者あれば定めたる時日に討論は開かるゝなり。然るに應戰者起らざりしを以て會は開かれざりしも、此の文章は二週間を出でずして獨逸全土に傳はり、四週間以内に普く西歐羅巴の國々に知られ驚くべき勢を以て傳達せられたり。

ルウテルは當初より羅馬法皇に對して反旗を翻す念ありしにあらず。然るに事の發展とルウテル自身の研究の結果は、其の思想を歩一步根本的の改

ツライブチ

革に向つて進ましめぬ。ルウテルは熱心に歴史的研究を爲せり。然して羅馬法皇の主上權なるものは事實上後世の發達になれることを知り、權威は法皇に存せずして教會に存することを認るに至れり。然るに一五一九年夏ライブチに開かれし討論は彼の思想をして更に一步を進ましめぬ。論敵はインゴルスタット大學の教授エックなりき。エック等の戰略は、ルウテルを中世の教會が夙に異端なりと宣言したる議論にも正しきものあることを認むる立場に逐ひ込むるにあり。彼等は巧に議論の徑路をここに導き、ルウテルをしてフッスの説亦た盡く謬に非るを公言せしめたり。敵は凱歌を奏したり。然してルウテルは教會亦謬り得べしとの見解に到達せざるを得ず。彼の同僚にフイリッブメランヒトンと云ふ人あり、其母はロイヒトンの姪なり。一四九七年の生れにてハイデルベルヒ及びチウビンゲンに學び、ルウテルより少きこと十四歳なれども非凡の天才ある學者なり、二十一歳にしてウイッテンベルヒ大學の教授となり語學及び神學を教授したり。ルウテルとの友情極めて深くライブチの討論場にも同行せり。メランヒトンは更に研究を積み遂に聖書こそ據て以て會議及び教父の意見の當否を批判すべき

6 Eck

メランヒ
ト

7 Hilip Melancthon

三大論文

標準なれとの結論に到着したり。ルウテルは茲に初めて明白なる思想の立場を見出し得て勇氣頓に加はりぬ。

一五一九年正月十二日皇帝マキシミリアン死して後新帝カアル第五世位に即き人心おのづから新なり。ルウテルは此の際に於て引き続き三大論文を公にしたり。第一は一五二〇年八月の出版にかゝり、題して「獨逸の基督者なる貴族に寄す」と云ふ。僧侶の權が俗權に超脱すと云ふ思想及び聖書を解釋し大會議を召集し得る權は獨り法皇のみ之れを有すと云ふ説を論破して普通の信徒の自覺を喚起し、獨逸の貴族たるもの進んで改革の事業に當るべきを唱へたるものなり。第二は之より二箇月の後に成り、題して「教會のバビロン囚虜」と云ふ。基督者は皆司祭にして直に神に仕へ得べしとの大義を論じ七箇の禮典のうち洗禮、聖餐、懺悔の三を存留す。第三は同年十一月に成り「基督者の自由」と題し、信仰によりて義とせられたる者が有する内的自由を説けるものなり。

ルウテルは「基督者の自由」の一書に書翰を添へて法皇に獻ぜんとせり。これ法皇の使者ミルチツの勸告にしたがひ出來得べくば法皇と調和せんと欲

8 Miltitz

放逐状

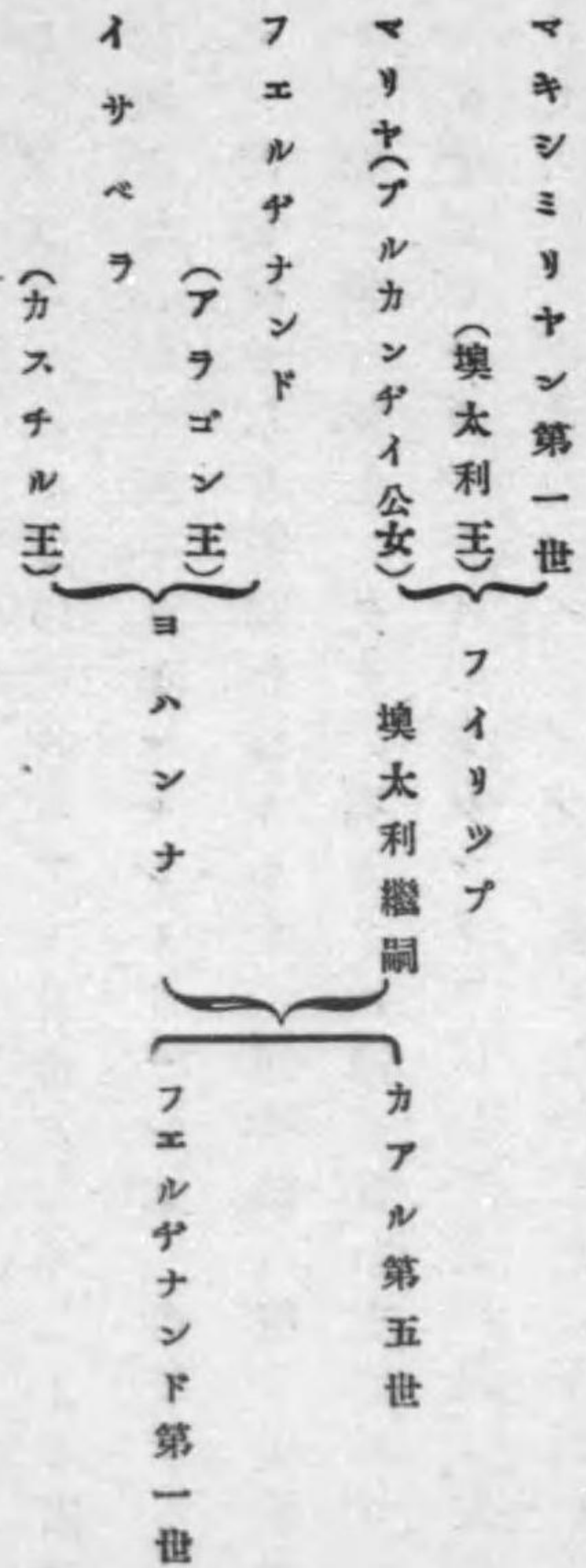
したるなり。然れども此時エックは既に法皇の發したる教會放逐の脅状を携帶して獨逸に着せり。曰くルウテルの書は異端説を教ふる故に其頒布を禁止し之を焚くべく、ルウテルには六十日の猶豫を與へ此の期限内に悔悛せずんば彼も其の徒黨も捕縛せられて所罰せらるべしと。是に至りてルウテルは斷然戰闘的態度を取れり。一五二〇年十二月十日ウイテンベルグ大學の教授及び學生を集めて法皇の放逐状及び法皇の法令集を焚けり。

第三章 獨逸帝國と宗教改革

宗教改革は是に至りて獨逸帝國の問題とならざるを得ず。向後の發展を解せんためには當時の獨逸帝國の事情を知らざるべからず。當時獨逸の皇帝は七個の大諸侯の互選によりて擧げらるる制なりき。一四三八年埃太利王なるハツプスブルグ家のアルバート皇帝となりしより累代同じ王家より皇帝を出だせしが一五一九年マキシミリヤン第一世死するに及び、德望隆きザクセン侯を推せしも固辭したりしかば、選帝侯は他の候補者たる佛國王フランシス第一世を排して先帝の孫カアル第五世を立てたり。抑々マキシミリヤンの妻はブルガンデイの皇女マリアにして其の間に生れしフィリップは早く死したるが此のフィリップの妻となりし人は西班牙のアラゴン國の王フェルデケンドとカステイルの女皇イサベラと婚して生れたるヨハンナにして他に後嗣なかりし故一五一六年フェルデナンドの死するや孫カアル西班牙の王位を襲ひしがマキシミリヤン死するに及び、埃太利及びブルガン

カアル第五世

デいの王冠も亦彼の頭に落ち來れり。斯くて彼は西班牙全國及び之れに屬せる以太利及び新大陸に於ける領地、ブルガンデイ公國と其の領土なるネエデルランドの土地に君臨し、今や又神聖羅馬帝國の冠を戴くこととなれり。

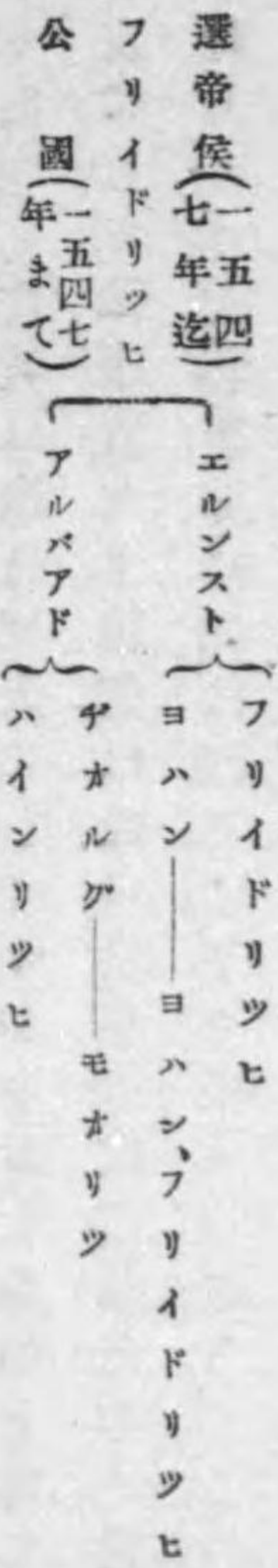


皇帝の領土是の如く延長せし上に外には土耳其の人の境を壓して迫るあり、佛王フランス第一世との戦あり。カアル第五世は獨逸語を語ることはざりしほどにて、獨逸の國民に親まれず、又力を獨逸の内政に專にする餘地なくして、ルウテル等の改革を好まざりしも、之を壓伏するに力を用ゆること能はざりき。且つ獨逸の國情は皇帝の權力以外に諸侯の權力大なるを以てザクセン選帝侯にして改革運動に同情あれば或る程度まで之を保護することを得たるなり。

獨逸の同
情と宗教
改革點

ザクセン
侯

當時のザクセン選帝侯はフリードリッヒなり。賢明の譽あり。國民の權利自由を維持するに熱心にして又聖書を尊重し免罪符の販賣を惡めり。此等の事は彼をしてルウテルに同情を有し之を保護せしめたるべけれど、彼の信仰は依然として中世的にして親ら一度聖地順禮をなせしことあり、聖者の遺物を尊崇したり。ルウテルの神學に同意したるにあらず。一五二五年死して其の弟ヨハン位を嗣ぎヨハン死して其の子ヨハン・フリードリッヒ之れを嗣げり。此の二人は其の信仰に於ても純然たるプロテスタントにして父子ともにアウグスブルグの信條に同意せり。ヨハン、フリードリッヒの世に選帝侯の權は奪はれてザクセン公國に與へられたり。このザクセン選帝侯とザクセン公國の兩家は原と同じ血統より出でたり。其の系統左の如し。



羅馬法皇

更に時の法皇レオ第十世は如何なる人なりしか。彼は一五一三年羅馬法

皇の位に上り一五二一年まで位に在り。彼はフィレンチエの富豪メヂチ家より出づ。性質は温良寛大にして平和を愛し美術を愛したり。ラファエルの友にして保護者たり。繪畫は此の法皇の代に榮えしと雖も彫刻は漸く衰頽の兆あり。文藝復興時代は既でに下り坂となれり。この法皇は宗教家としては熱心と誠實を欠き奢侈逸樂を愛し高尚なる志は消耗せられぬ。

カアル第五世は一修道僧ルウテルが一個人の私説を立てて世界の基督者が千年以上信仰し來りたる教義に反對し人心を攪亂するを以て赦し難き事なりとし、領土と身命を塔して之を鎮壓しコンスタンツ及び其の後の大會議の決定を維持することを己の責任なりと信じ、且つ佛國フランスと戦ふべき機會漸く迫るに當り、法皇をして彼に與せずして我に助を藉さしめんとし帝國の舊き都府の一なるウオルムスに即位後第一の國會を召集しぬ。會議は一五二一年一月二十五日に開かれたり。佛蘭西との間に避け難かるべき戦争に對する準備も議題の一つなりしも最も人の注意を惹きし大問題はルウテルの處分にてありき。法皇レオ十世は皇帝に迫りてルウテルを罪人と

なさんと欲してアレアンダなるものを使として會議に出席せしめたり。アレアンダは長き演説をなしルウテルを攻撃せしが、カアル帝は遂に身の上安全の保證を附してルウテルをウオルムスに召喚したり。ルウテルは三月廿六日に此命令に接し死を決して出立し、途中到る處非常なる歓迎を受け王侯の行幸の如き勢にて四月十六日ウオルムスに到着せり。十七日議場に出席したる彼は二個條の訊問を受けたり。第一は二十五部の著書を己が作と認むるや、第二は之を取り消すべきやと云ふにあり。第一の問に對しては直に其の自著なるを答へ、第二の問に對しては翌日まで猶豫を求めたる後、私見には誤りあるべきも聖書に原けるものに至りては聖書を以て之を破るに非ずんば取り消し難きことを主張し、然して最後に「神よ我を助け給へ、ア・メン」云へり。皇帝は勅令を發してルウテルの著書を禁じ、彼を帝國の罪人なりと宣言し、何人にも彼に出會ふものは捕へて之を引き渡すべしと命令し、此命令は保證の期日盡くる日より効力を生ずべしと定めたり。ルウテルの一身は風前の燈の如く危かりき。四月二十六日ウオルムスを發しウイテンベルグに歸る途中一隊の騎兵の爲に拉せられて人知れずワルトブルヒ

の城中に運ばれぬ。是れザクセン侯の計らひにてありしなり。彼は此の隱家にありて武士の如く装ひ専心新約聖書の翻譯に従事したり。

ルウテルが新約聖書の翻譯に着手せしは一五二一年の十一月或は十二月にして翌年三月既に稿を脱しメランクトン及び他の友人の訂正を経て同年九月出版せり。一五三四年まで十六回訂正を加へ五十版を重ねたり。舊約の翻譯はウイテンベルクに歸りて後數人の友人と共に之に従事し一五三四年業を卒へたり。ルウテルは聖書を普通人民の用ゐつゝある言語に譯し得んために苦心し之が爲にあらゆる勞力を吝まざりき。ルウテル譯の聖書出で、獨逸の國語は定まりたりと稱せらる。

ルウテルが聖書翻譯に着手せし頃は恰もメランヒトンが其の著書「神學通義」を書き卒りたる時なりき。此の書はプロテスタント改革者の神學を系統的に論述したる最初の著述にして、爾後半世紀間はルウテル派教會に於て神學の教科書として用ゐられたり。此の書の大旨を云へば、權威は聖書に在りとなし、信仰を説明して、基督我が罪のために死して我を活したることを確かに信賴することなりと解釋し、禮典は洗禮と聖餐式の二つに止まると論せり。

斯の如き組織的の著述の外に普通の讀者の爲に改革主義を説明し傳播せしむる爲に書かれたる小冊子雜著の數は夥しきものにて、宗教改革の運動は殆んど獨逸の書籍賣買の業を作り出したりと云ふを得べきほごなりき。

さて茲にルウテルをして長くワルトブルヒ城中の靜居を樂しむと能はざらしめし事情生じ來れり。當時獨逸に於ける改革の運動は總てルウテルの統率の下に在りし如く想はゞ誤りにて、其の實は斯く單純ならず急潮緩流相混せり。一方にはルウテルを以て過激なりと爲せるエラズムスの如き人あれば、一方には彼の改革を手緩しと思ふ人もありたり。ルウテルの友人カアルスタットは熱烈の人なれども思慮を缺く所あり。ルウテルの不在の間に禮拜の儀式を變更し、聖餐式より祭の分子を除き、聖餐式前の懺悔を廢し、葡萄酒をも陪餐者に與へたり。斯の種の事に關してはルウテルは天性や、保守に過ぐる嫌ありたればカアルスタットの改革必ずしも過激にあらずと雖も當時は然か思はれぬ。この時に當りツイカウの預言者と呼ばれたるトマス・ミュンツェル、ニコラス・ストルク、マルクス・スツブネル(第一の人は牧師にして他は機業家なり)はウイテンベルヒに來りぬ。彼等は小兒の洗禮を認めず、聖

2 Karlstadt

3 Zickaw
4 Thomas Münzer
5 Nicolas Storch
6 Marcus Stubner

ルウテル
の歸來

佛國との
戦争

靈の啓導を説きて聖書及び定りたる教職を輕じ、社會の組織を根底より改むべしと主張し、政治學術を無用なりとし、世界の終末の近きを唱へたり。ミユンチエル等の來るやカアルスタッドは之を歓迎し、メラントンは惑ひ、ウイッテンベルヒは混亂を極めたり。是に於てルウテルは一五二二年三月歸り來れり。八箇間の説教によりて十分に秩序を回復し、人心の向ふ所を知らしめたり。彼の力量は此の時最も善く發揮せられたり。

斯かる困難あり、又ウオルムス會議の宣告は其の儘に存せしに係らず、爾後八九年間改革主義は獨逸全帝國を席卷するの勢ありき。修道院を出で、之に従ふもの多かりしほごなれば、まして普通の牧師監督の間には更に大なる勢力を占め得たり。ウルリッヒ・フオン・フッテン等によりて代表せられたる少壯の人文學者も賛成の意を表せり。且つ一五二一年よりカアル五世は佛國王フランシスと戦を開き、干戈結んで解けざること二十年、東には又土耳其兵の屢々境を壓し來るあり。此等の外戦の斷續は改革運動の盛衰利害に大なる關係あれば略記する必要あり。

カアル第五世とフランシス第一世との戦は四回あり、第一戦(一五二二—一五二

ソリマン
第一世の
西侵

六はフランシス一世が以太利に入りミラノを占領したるに始まりて以太利に於て戦はれ、パピアの戦に佛王大敗して虜となり、翌年マドリド條約を結び和議成る。◎第二戦(一五二七—一五二九)佛王法皇と結び獨帝と戦ふ。再び獨軍の勝に歸し羅馬を陥れカムブレ條約を結ぶ◎第三戦(一五三六—一五三八)フランシスは土耳其帝と呼應し報復を圖りしも三年の後戦に疲れ法皇の調停によりニイス條約を結んで講和す◎第四戦(一五四二—一五四四)佛は土耳其と結び、獨は英王と結びて戦ひ獨帝勝利を得、ハレスピイに於て條約を結びフランシスは以太利に對する要求を放棄せり。

土耳其のソリマン第一世は一五二〇年乃至一五六六年サルタンの位を占め土耳其帝國の威力を絶頂に登らしめぬ。一五二六年ハンガリーを攻め國王ルイ二世を襲ひ、一五二九年ハンガリーの都ブダペストを陥れ更に進んでザインナを圍む成功せずして退く。一五三一年復々ハンガリーを侵す。カアル五世之を撃退す。其の後ハンガリーを襲ふこと二回に及びたり。

法皇レオ第十世は一五二一年死して翌年正月アドリアン第六世位に即きしが在位二年に満たずして死し、クレメンス第七世之に代り一五二三年より一五三四年まで位に在り、メヂチ家の人にして全然佛王の勢力に支配せら

ニウレン
ベルグ國7 Nürnberg
8 Speier第一スバ
イエレン國

れたり。此れ皆改革運動の發展に有利なる事情なりき。
一五二二年にニウレンベルグに開かれたる國會に於ては、法皇よりウオル
ムス國會の決議の實行を促し來りしに對し、羅馬教會に對する百個條の不滿
を擧げて革正を求め、一五二四年一月同處に開かれたる國會も亦成るべくウ
オルムスの決議を實行すべしと體良き決議をなすに過ぎざりき。此の時新
教徒は既に國會に多數を占めたるなり。同じ年の七月加特力黨に屬するア
ウストリア公バイエルン公及び南獨地方の監督レエゲンスブルグに會して
同盟を結び改革主義の蔓延を阻止せんと力められたれども一五二六年スバイエ
ルに開かれたる國會に於ては、他日宗教大會議を開くまでは各邦神と皇帝と
の前に答へ得ると信ずる如く處置すべしと決議したり。ルウテル黨の各邦
各都府は此の決議を解して、任意に自邦の教會を組織し得る權ありとなし禮
拜を變更し、北獨逸の全部(ブランデンブルヒ、サクセン公國、ブランスイック、ウ
オルフェンビウテルを除くの外)は三年を出でずしてルウテルに與すること
となれり。

然れども此の順潮は長く續く能はず、反動の勢を誘ふべき禍機既に伏在し

農民の亂

たり。第一はスバイエル會議前即ち一五二四年の暮より翌年の春にかけて
獨逸の西南部に起りたる農民の亂なり。既に記せし如くウイッテンベルヒ
の近傍に於てはミューンテェルの徒の勢力夙く落ちたれども彼等の過激なる
説教はルウテル等の勢力の及ばざる地方の人心を動かし社會的の革命を叫
ばしめたり。實際獨逸の細民の愁苦輕からず、彼等が要求したる牧師選舉の
權利、強制勞働廢止、苛税の輕減等正當なるものありたり。たゞ過激なる革命
派の運動之と相混するに至れり。之に對して如何にすべきかルウテルの苦
心せし所なるべきも、彼は遂に此種の運動に係はることを避け、農民等干戈を執
つて起つに及び兵力を以て之を鎮壓すべきことを貴族に勧めたり。かくて
一五二五年の夏騒亂は全く鎮定に歸したれども死せるもの十五萬人の多き
に上れり。ルウテルは非常なる苦境に立てり之に處するとは何人も難しと
する所なるべきも彼も亦幾分機宜を失せし責免るべからず。たしかに改革
の一大打撃なりき。此より後ルウテルは復た下層の階級の人民の同情を得
ること能はざることなれり。此と略ぼ時を同じくしてルウテルとエラズム
ス及びエラズムスによりて代表せられたる人文學者の一派との間の離隔ま

ルウテル
とエラズ
ムス

すく明かになりぬ。エラスムスは文藝の人なるが故に人の文學を忘れて神學論に熱中するを喜ばず。ルウテルは又彼れの態度曖昧なるを嫌ひたりき。一五二四年の秋エラスムスは自由意志に關してルウテルと反對の意見を發表したり、彼は希臘神學の系統を承け、ルウテルが全くアウグスチヌスの説を採れるに反對せるなり。翌年冬ルウテルは之を反駁せり。ルウテルの用ゐたる言語往々激烈にしてエラスムスを激せしめ益々プロテスタントと反對の地に立たしめぬ。

其の頃またルウテルの結婚事件あり。妻となりしはカタリナ・フォン・ポオラと云へる尼なりし婦人にして一五二五年六月十三日結婚式を舉行したり。新に作りたる家庭はルウテルに大なる慰安を與へ、且つ實行を以て獨身主義を打破する力ありしと雖も、當時は敵人に嘲笑の好材料を供し、エラスムスの如き、初め悲劇と見えし宗教改革は其の實結婚を以て終りたる喜劇にてありきと云へり。此等の事相合して改革運動の進歩に多少の蹉跌を來したり。嚮に第一回スバイエル會議の開かれし頃は土耳其帝ソリマン第一世の兵境を壓して來るあり、法皇は佛王と同盟してカアル第五世に對抗せんとする

ルウテルの結婚
Katharina von Bora

第二回
スバイエル會議

プロテスタントの
名の起原

なり、カアルは勉めて國內の平和を維持し外に向ふを要する時なりし故改革黨に對する態度寛大なりき。然るに一五二九年佛國との第二戰に勝を得、法皇と佛王との聯合軍を撃破して八月カムブレエ條約を締結するや、力を内政に用ふる機來れりとなし、一五二九年再びスバイエルに國會を開きたり。此の會議に於ては加特力教徒優勢にして、第一回スバイエル會議の決議を取消し、ウオルムス會議の定めを遵守せるものは其の儘に繼續すべし、之を更へたる地方に於ては此の上改むる所あるべからず。ミサを唱ふるを禁ずべからず、如何なる宗教團體の歳入權限をも奪ふべからず。基督の眞の體眞の血の禮典を否定する宗派はアナバプテストと同じく之を禁ずべし。改革派の諸侯少數なりし故他に執るべき方法を知らず之に對して抗議を提出したり。之に署名せるものはザクセン選侯、ヘッセン、ブランデンブルグ、リウネベルグ、アンハルトの君主にして他に十四個の都府の名を列したり。²プロテスタント即ち抗議者の名稱は之より生ぜり。

此れ實にウオルムス國會以後改革運動の最も危機に際したる時にしてプロテスタントたるものの協同一致を要せり。是に於てルウテルと瑞西の改

2 Protestant
カマル
アル
會見

3 Schwabach

會
ア
ウ
グ
ス
ル
グ
國

4 Augsburg
5 Coburg

革者ツキンググリーの間に斡旋する者あり。二人は一五二九年十月マルブルグに於て會見せしが、晚餐式に關する解釋に於てのみ意見一致するに至らずして別れたり(次章参照)。然れどもマルブルグ信條として起草したる十五箇條のうち十四箇條までは二人の同意したる所にして、ルウテルは其の後多少の訂正を加へて之を用ゐたり。これルウテル教會の最初の信條にして同年十月十六日シュワバツハの集會に於て之を採用しシュワバツハ信條と稱せり。翌一五三〇年春カアル第五世はポロニヤに於て法皇の手より皇帝の冠を授けられ、此の地より召集令を發して六月アウグスブルグに國會を開けり。其の目的は舊新兩教派の主張の間に調和の點を見出して宗教上の統一を成就せんとするにあり。皇帝はプロテスタント徒の信仰の要領を記して提出せんことを求めしかば、メラントンははじめ數人の神學者は信仰告白の起草に着手したり。ルウテルはウォルムス國會の禁令未だ解除せられざるを以てアウグスブルグに行かず、コオブルグに在り。彼はメラントンの態度餘りに交讓的なるを憂ひ、時々助言を與へたり。斯くて成りし「アウグスブルグ信仰告白」は七諸侯と二市の調印を以て一五三〇年六月二十五日皇帝と

ア
ウ
グ
ス
ル
グ
國
の
信
仰
告
白

國會の前に朗讀せられたり。此の告白は二部に分たる。第一部は二十一箇條より成り、神赦罪、神子の諸項に始まり、善行、聖者禮拜に終り、簡明に其の信仰を表白す。第二部は之に比して詳細なる六箇條より成り、晚餐式の聖杯、教職の獨身、ミサのこと、懺悔、修道院の誓等につき羅馬教會の典式思想と一致せざる點を辨す。然かも全體の調子勉めて争氣を避け、聖書を唯一權威とする意見を主張せず、法皇の主上權に反對せる言無く、聖餐式の見解も化體説を排する態度を避け、アナバプチストの如き急激派を否認せることを明にせり。然れどもプロテスタントの根本主義は之を維持することに於て過たず。プロテスタントのうちにもツキングリーの勢力の下にある南方の諸市は此の告白を以て軟弱なりとし別に告白を提出せるほどなりき。然れども加特力派の多數はメラントンの立場にさへ同意し難しとしエック等の起草したる辯駁書は八月十三日朗讀せられ、兩派の懸隔彌々明になりぬ。然れども溫和派の盡力するありて八月十六日雙方の神學者の協議會は開かれぬ。エックの巧妙なるメラントンの妥協的なるはともに調和の議を進捗せしめしが、法皇の主上權の神權なるを認むるや否やに至りてルウテルは斷然と

6 Campeggio
7 Schmalkalden

シユマルカ
ルアン
同盟

ニウ
ルン
ベル
グ和
約

して讓歩に反對し、プロテスタントの諸侯の中にも強硬なる態度を持せるものあり。調和の望絶えたるとは明になりぬ。法皇の代人なるカアヂナル、カムベギオの如きは兵力を以て改革運動を撲滅すべき時機なりと勧めたれども、舊教の諸侯中に反對するものあり。多數の決議によりプロテスタントの信仰告白は否決せられたれば一五三一年四月十五日まで猶豫を與へ其の後は之を許さるること、此の期間何等の改革を行ふべからず、加特力教徒の禮拜を妨ぐべからざることを決議せり。プロテスタントの諸侯と十四都市の代表者は之に抗議を宣言して席を去れり。彼等は其年十二月⁷シユマルカルデンに會合して同盟を結べり。之に調印したるはザクセン、ヘッセン、リウネベルグ、アンハルト、マンズフェルド等の君侯なりき。

一五三二年の春土耳其帝ソリマン二世は再び大軍を興して西侵せり。皇帝はプロテスタントの諸侯の援を借らざるを得ず。是に於てニウレンベルグに於て新教徒と和約を結び、法皇が宗教大會議を召集するまでは現状を更へざること、其の代にプロテスタントは彼を助けて土軍を防ぐべきことを約したり。斯かる中法皇クレメンヌ第七世は死してパウル三世(一五三九)

プロ
テス
タ
ン
トの
勢
振
ふ

ヘッ
セン
侯
多
妻
問
題

位を襲ぎ、一五三六年には獨佛の第三戰始まりて四年に亘り、カアルは獨逸に來ること能はざりしこと九年の長きに及び、新教撲滅に従事するに違なかりき。之より先き一五三一年ツヤングリイ戰死せしより一五三六年南獨の牧師等はルウテルと會見して晚餐式の事のみは未定の問題となし、他の事に關しては意見悉く一致して所謂「ウィッテンベルヒ協約」なるものを定めたり。シユマルカルデン同盟の勢力復た大に振ひ一五三九年ザクセン公國とブランドンブルグの兩大國の加はるあり。加持力教領内に於てもプロテスタントに歸する者多く、グインナの如きもルウテル派に歸するもの多く、加持力の大學は學生の數寥寥として、バイエルン州に於ては修道者よりも修道院の數多しと云はれしほごなりき。

斯かる中非運は再びプロテスタントの上に落ち來れり。ヘッセン侯の多妻問題は彼等に取りては大打撃にてありき。ヘッセン侯フィリップは十九歳の時ザクセン公の娘を娶りしが此の時に至り夫婦の關係を維持すること難く精神上悪しき結果あるを以てかゝる特別な場合には第二の妻を娶るも不可ならずと云ふ理由書を草し、ルウテル、メラクソン等之に同意して署

ハツセン
サクセン
侯の變節

ルウテル
の死

名したり。ルウテル等の本意は明に知るを得ずと雖も、其行動は大なる非難を招き名譽を損したり。又ヘツセン侯とサクセン公マツリツが皇帝に欺かれて同志を賣れるあり。一方には加持力教會は猛然として覺醒し來り、一五四〇年にはイグナチウス・ロヨラ耶蘇教社を興し一五四二年には其の友フランシスコ・ザビエ東洋傳道の途に上りぬ。一五四五年より一五四七年までトレントに開かれたる大會議は強硬なる保守的方針を執ることに決したりか
 かる中マルチン・ルウテルは死せり。正に一五四六年二月十八日なりき。

ルウテルの家庭。ルウテル結婚の事は既に記したる如し。彼の妻となりしかマリナ・フォン・ボハラは尼寺を遁れてルウテルの保護を受け居りしが結婚を約したる學生變心して破約したり。ルウテルは之を憐み友人グラツツに媒せしにかマリナは之を好まずルウテルがルウテルの友アムスドルフならば嫁すべしと云へり。アムスドルフは獨身の志固かりければルウテル之を娶ることなれり。夫婦の間に三男三女を擧げたり。二人の女早く死す。◎日常生活ルウテルは毎朝私の祈を終りて後家族とともに十誡使徒信條主の祈及び詩篇を讀むを常とす。彼が祈禱を勉めたる事は一五三〇年アウグスブルグ會議の結果を待ちつつコナルグと云へる地に留まりし時の事をグイトリヒと云へる人、

メラククトンに報じて「ルウテルは毎日三時間を祈禱の爲に用ゐざるとなし」と云へるによりても知るを得べし。彼は又聖書に精通し「余は青年の頃より幾度となく聖書を通讀して之を誦じたれば如何なる句にても之を聞けば直に其の所在を答へ得べし」と云へり。ルウテルは客を愛し食事の時客を招くこと多く食後は朋友兒女と歌をうたひ談話するを好み。彼は又昔譚童話を樂しみ自からイソップの物語を好み又繪畫を好みたり。彼は又昔譚童話を樂しみ自からイソップの物語を譯したり。彼の談話集を讀まば惡魔妖怪の話多きを見るべし。◎ルウテルの著作。最も重要なものは聖書の翻譯なるが、聖書と同じく廣く行はれしは問答書にして大小二種あり。何れも一五二九年の作なり。彼は又詩才に富む。作る所の讚美歌三十七篇あり。其の最も有名なるは、「神は我が城なり」Ein feste Burg ist Unser Gottの一篇なり。其の外論文に於ては上に擧げたる三大論文あり。又聖書の註解あり。書翰も亦愛讀せらる。◎ルウテルの死。彼は晩年健康衰へ苦心に疲れ早く永久の休息に入らんことを願ひしが一五四六年の春故郷なるマンズフェルド伯爵家に財産の争あり。ルウテルは調停を托せられ三人の子を伴ひて歸郷し目的を果して歸路に就かんとせしが其の夜より病を得翌朝溘然として死せり。齡六十三歳。

第四章 ツキングライの改革

ツキングライの改革運動はルウテルと相識る事なく期せずして殆んど時を同じくして起れり。彼が活動せる舞臺は瑞西のうち獨逸語の行はるる部分にして、佛蘭西語の行はるる部分はゼネバを中心とせるカルヴインの改革を待てり。瑞西は當時に於ても單に山林牧野の國にあらず。ライン河畔一帶の地は山開け土肥えて、北歐より南歐に通ずる要路に當りしかば之に沿へる各都府は富み且つ知識進歩したり。最古の大學此處に建てられ、神秘的思想家此處に教へ、中世の種々なる思想此處を源とせるもの多かりき。瑞西は神聖羅馬帝國の一部分をなしハプスブルグ家の壓迫に對して自ら衛る爲に團結したる者なり。一二九一年にウリ、シュヴイツ、ウンテルワルデンの三州相同盟して核子となり他の州次第に之に加はりて一五一三年には十三州となれり。公に獨逸帝國より獨立したるにあらざれども獨立の實ありき。ウルリッヒ・ツキングライは一四八四年一月一日今のセント・ガルレン湖の

瑞西の國

1 Uri
2 Schwyz
3 Unterwalden

ツキングライ

4 Ulrich Zwingli
5 Heinrich Wölflin

中ウイルドハウスと云へる村に生れたり。ルウテルより一歳若けれども實際は僅かに二月後れて生れたり。家貧しからず、幼時より良き教育を受けぬ。十五歳の頃ベルンの⁵ハインリッヒ・ウエルフリンと云へる名高き人文學者の門に入り、二年の後ウインナに遊學して古文學を學び、一五〇二年バアセルに歸りて羅句語を教へ且つ哲學を研究せり。彼は新しき學問に對して深き同情を有し且つ音樂に堪能なりし事等はルウテルと相似たれども、ツキングライはルウテルの如く深刻なる宗教的の經驗を経しにあらす、寧ろ知識的の批判により改革の思想を抱くに至りたるものなり。彼はルウテルよりもより多く文藝復興の兒なりき。一五〇六年グラルス⁴の村牧師となりしが其の頃より新約聖書を読み得んために希臘語を自修し、又エラスムスと文通を始めたり。彼は又以太利に雇兵として行く瑞西人の軍隊の牧師となりて兩三回以太利に行きしことありて深く雇兵となるの弊を感じたり。力ある説教と愛國的精神により其の名聲瑞西の北部に揚りぬ。一五一六年アインジイデルンの牧師となれり。此の地に有名なる修道院あり、又廟ありて參拜者多かりき。ツキングライは之を目撃して益々當時、民衆の信仰の聖書の教を距

ると遠きを感じ、改革的の精神を刺戟せられたり。一五一九年更にチウリッヒに移り牧師となる。

チウリッヒは當時人口七千人に過ぎざる小都府なりしも、政治上に勢力あり且つ富める故を以て瑞西國中の著名なる都府の一なりき。且つ市民の知識高く進歩的の氣象に富みたり。ツキンググリの思想は初めルウテルと相聞せずして起りたれども、ルウテルの議論は既に此の地の人に知られ又ツキンググリのにも少からざる影響を及せり。改革の叫びは此處に於ても亦免罪符販賣によりて喚び起され討論によりて發展せり。ツキンググリは之れが爲に六十七箇條の論題を提出せり。ルウテルの九十五條は終に討論せられざりしが、ツキンググリの其れは實際論戰の主題とせられたるのみならず此の討論の結果に依りて市は其の向背を決すべかりしなり。然してツキンググリイ勝を得てチウリッヒ全市は彼の説を採用せり。チウリッヒに於ける改革の性質を知るは宗教改革の發展を詳にする爲に必要なり。ツキンググリの改革はルウテルよりも歩を進め、カルヴァインの爲に途を開きたるもの多ければなり。禮拜の儀式に於てもルウテルは保守的にして破壊を好まざり

しがチウリッヒに於ては一層根本的の改革を行ひ羅馬教的の臭味を止めず。英米蘭の諸國に行はるゝ教會の禮拜の如き單純なる型を開きたるはカルヴァインの前にツキンググリあり。教會の政治に於ても、ルウテル派の教會に於ては獨逸の事情に制せられ諸侯伯の統轄の下に教會を置くこととなしたるに反しツキンググリの教會に於ては教會の主權は大會に存し其の大會は牧師及び各教會の代表者二人宛と市の政府の代表者八人を以て組織せるものなりき。又ツキンググリの改革がルウテルの其れよりも滞なく進行するを得し理由の一はツキンググリ其人の人格に在り。彼はルウテルよりも冷靜にして知識的なる人なりしを以て躊躇せずして道理の指示する所を行ひ得たるなり。且つ彼はルウテルよりも政治家的の器量を具へしが如し。其のみならず瑞西の政體の獨逸と異りて純然たる民主國なりし故に人民多數の賛成を得たることは直に之を行ふことを得べかりしなり。かゝる所に於ては改革者たるものルウテルの如く政治上の關係より離れて立つことは望み難き事なり。然ればツキンググリもカルヴァインも政治上の指導者たる地位を占めて改革の事業を成就したるなり。

改革の運動はチウリッヒを中心として北瑞西及び南獨逸に波及しつゝありき。ベルンに於てはベルトオールド・ハレル(一五四九二)及びセバスタアン・マイヤアの兩説教者ツキングリイの説を賛成し市の當局者は多年向背に惑ひしが遂に討論に依りて事を定むることとなり。ツキングリイはじめ他の諸市より有力者を招待して一五二八年正月廿六日より二月七日まで討論會を開きプロテスタントの勝に歸してベルンはチウリッヒと同じ改革を行へり。バアゼルの改革は主としてヨハン・エコランバデウス(一五四三二)の力に依れり。彼は北瑞西の改革史に於てはツキングリイに亞ぐ人物なり。牧師にして且つ大學の教授たり。始めエラスムスと親しく新約聖書の出版を助けルウテルの感化を受け更に又ツキングリイと交りて其の説に同意し爾來ツキングリイと親友となれり。彼の講演と説教は大なる動搖を起し此處も亦討論によりて事を定め一五二五年二月市會はエコランバデウスを聖マルチン會堂の説教者となし禮拜と政治を改むる全權を托したり。北瑞西の大都府は斯の如く十年を出でずしてプロテスタントに歸したれば此等よりも小さき都府にして之に倣ふ者少からず延いて南獨の都府スト

ラスブルグにまで及ぶに至れり。ストラスブルグの改革に與つて最も力ある人物はマルチン・ブツェル(一五五九二)なり。彼は親しくルウテルの言を聽いて其の味方となりストラスブルグに於ては聖アウレリアン會堂の牧師となり二十五年の間其の地の宗教的指導者となりルウテル、メランクトン以外彼の右に出づる者なき勢力を獨逸に揮ひたり。彼は又ツキングリイとカルダインの思想の連鎖たる地位を占む。後更に之を記すべし(第六) 都府州はルウツェルンの外はプロテスタントに歸したるに反し山林州は固く改革を拒み瑞西の同盟は宗教改革に對する態度に於て二つに分裂したり。然して羅馬教の味方は國會に勝を制してプロテスタントを鎮壓せんとせしよりプロテスタント諸市は一五二七年同盟を結びしが反對黨なるルウツェルン、ツグ、ジュザイツ、ウリ、ウンテルバルテンは一五二九年に同盟を結び相對峙せり。かゝる中シユピッツ州に於て一人のプロテスタントの牧師を異端として焚殺したりしが此の事遂に兵火に訴ふるの導火線となり兩黨各々兵を催して對陣したりしが未だ戦はずして條約は成れり。之をカッペルの第一條約と云ふ。此の條約により山林州は軍費を拂ふ事各州の信仰は

多数によつて之を定むる事、宗教上の爲に争端を開かざる事を約せり。然れども是れ一時の休戦に過ぎずして軋轢益々甚だしく都府州の間にも争あるに乘じ一五三一年十月の始め山林州は不意に八千人を以てチウリッヒに侵入したり。プロテスタントは急に二千人を集めカッベルに戦ひしが大に敗れて戦死する者多く、ツキングリイも亦戦死せり。一五三一年第二回のカッベル條約は結ばれぬ。之によれば都府洲は軍費を償ひ、五個の山林州は羅馬教を守ることに定めたり。かくて瑞西の小天地さへ二に分れざるを得ざることは事實上に示されたり。

ツキングリイとルウテルとの會見は第一カッベル條約と第二カッベル條約の間にありし事件なるが、便利の爲に此處に大略を記すべし。ルウテルとツキングリイとは根本の思想に於て相一致したゞ多少見方を異にせる所ありしが、晚餐式の見解に就ては相容れざるものありき。化體説を取らざることは一なれども、神秘的なるルウテルは、基督の血と肉は或る神秘なる方法を以てルウテルは火の熱鐵の中に在るに喩へたり。麵包と葡萄酒の中に宿ると信せざるを得ざりき。ツキングリイも一五二三年までは同様の見解を持し

たりしが和蘭のハアグの法律家コルネリス・ホオエンの書翰によりて翻然説を改め晚餐式を以て一の記念にして且つ象徴なりと見るに至れり。然してルウテルとツキングリイの論争はストラスブルグの改革者ブツチエル等が之れに就て兩者の意見を聞きしに由來し、一五二五年より一五二八年まで交々著書若くは説教を以て相辯難せしが、ツキングリイの説を採る者次第に多く、バアセルのエコランバデウス、ストラスブルグのブツチエル等之を賛成し、ヘッセン侯フィリップも之に傾けり。此時に當りプロテスタントの政治的地位は頗る危急に陥り一致團結を要する時なりしかば、ヘッセン侯其の間に斡旋して兩雄の會見を促したり。ツキングリイは政治家的の經綸に富める人なれば、瑞西と獨逸のプロテスタントを合同せしめ、佛王フランシスと結んでカアル五世を壓しプロテスタント教を公認せしめんと謀れり。ルウテル等はかゝる經綸あるに非ずたゞザクセン侯に促されて同意せしまでなりき。斯くて一五二九年十月一日マルブルグの會見となり、始めツキングリイはメランクトンと、ルウテルはエコランバデウスと交渉し後公式の協議開かれしが、ルウテルは固く執りて一步も譲らざりければ妥協の目的は達せらるべく

もあらず、ルウテルはツキングリイと握手することを拒みたりき。是に至りてはルウテルの偏狭事を破りたるの譏を免れ難しと雖も、ルウテルは實際ツキングリイの如き説を持する者は基督者に非すと信じ居たりしなり。此の會見の結果としてルウテルは十五箇條より成る簡單なる信條を編成し其の十四箇條までは兩者の意見一致せる事を示したり。ルウテルは公式の意味ある握手を拒みたれども、別るゝに臨みては手を握つて敬愛の意を表することを否まざりき。

第五章 カルヴインの改革

カルヴインの改革の事業は瑞西の佛蘭西語の行はるゝ部分に於て成されたり。然れども彼は佛國に生れ佛國にて成長したれば先づ佛蘭西に於ける改革の先覺者の事を記さるべからず。

佛國に於て、宗教改革は文藝復興と密なる關係を有して起れり。先づ記すべき人物はジャック・ルフェーブル(一五四五—一五三六)なり。彼は元來人文學者なり、短軀にして博學、歐洲諸國に遊んで知識を蓄へ、一五〇七年後は巴里の一修道院に住みて聖書の研究に力を専にし、一五〇八年詩篇の註解を著し、一五一二年パウロの書翰の註解を著せしが、其の序文に聖書の權威を説き、人の救は功德によらざるを主張し、教職の獨身生活を批評し、ルウテル未だ現れざる以前既にルウテルと同一見解を開き得たり。彼は其の少き學生ファールルの手を執りて曰く「世界は將に更新せられんとす、君之を見るべし」と。彼は猶も聖書の研究を繼續して一五二二年に福音書の註解を著せしが巴里のソルボン

J. Jacques Lefevre
アルフェー
ブル

ヌ神學院は此の書を禁制したり。ルフェーブルは巴里を去りて²モオの監督
ブリコネエの許に身を寄せぬ。

2 Meaux
3 Briçonnet

4 Guillaume Farel
ルフェーブル

3ブリコネエ(一五四三)はルフェーブルが住みし修道院の長たりき。一五二三年モオ(巴理を距ると二十哩)の監督に任せらるゝやルフェーブルを教區に招き改革主義の同志を集めフアーレルも茲に來りぬ。一五三〇年よりルフェーブルは聖書を羅旬譯より佛語に翻譯しモオは爲に一のウイッテンベルヒたらんとせり。然るにソルボンヌ神學院及び巴里の高等學院は之を見て驚き異端の鎮壓に着手したり。ブリコネエは迫害と戦ふ硬骨の人に非ず、ルウラルの説に反對の意を表白し、フアーレル先づ此の地を去り、ルフェーブル亦去りてストラスブルグに赴きぬ。後國王フランスは之を招き宮中に於て兒女の教育を托したりしが身安からざる爲にナバアル后マルガレタ(第十^ニ章^{ナリ})の懇旨に従ひ其の宮廷に身を托して餘年を過したり。一身の靜安を貪りて主義の爲に戦ひ得ざりしことは彼に大なる苦悶を與へたり。
ルフェーブルの弟子ギヨーム・フアーレル(一四八九)は其の師とは別なる性格の人なり。彼はカップに生れ、巴里に遊びてルフェーブルの教育を受け、モ

6 Pierre Viret
7 Antoine Froment

6 John Calvin
(Jean Cauvin)
シオン・カルヴァイン

法學の研

オに來りて説教せしが其の熱烈にして戰鬪的な態度は監督の忌む所となり説教の許を取消され、去りてバゼルに行く此處にてエコラムバデウスに歓迎せられしも、エラスムスに敵視せられ、復去つてストラスブルグに行き、ベルンに移り、ベルン市がプロテスタント主義に歸するやベルンの政府より依頼せられ佛語の用ひらるゝ都市地方を巡りてプロテスタント主義を宣傳せり。彼はビル・ウイレエ(一五七一)及びアントアン・フロメン(一五八〇)の二人の同志を得たり。佛語瑞西の重なる都府は大抵此の三人の力によりてプロテスタントに歸せり。ゼネバ(佛蘭西名)も其の一なりき。

シオン・カルヴァインは一五〇九年七月十日佛蘭西のピカルヂイ縣のノヨンと云へる都府に生る。巴里の北東七十哩にあり。總じてピカルヂイ人は獨立心と義烈の精神に富み、執着力強きを以て聞ゆ。カルヴァインの父ゼラルは法律家にして其の地の監督の書記を勤め人の尊敬を受けたり。母も亦敬虔にして美麗なる婦人なりき。父は神學豫備の教育を受けしめんがため、其の子十四歳の時巴里に遊學せしめたり。業を卒ふる頃父は監督と争ふことありて職を退きしに因り、其の子に法律を學ばしめんとして一五二八年オル

レアンの法律學校に入らしめぬ。後間もなくブウルジュの大學に移り、一五三一年の春父死して故郷に歸るまで此の學校に學べり。カルヴインが當時第一流の學者の下にありて法學を修めたるは將來の事業を益したると少からざりき。初めオルレアン大學の教授たり後ブウルジュに移りし教授メルキオル・ウォルマルと云へる人あり。希臘語希伯來語の學者なり。瑞西人にしてルウテル黨なるがカルヴインに勸めて希臘語の新約聖書を讀ましめ、獨逸の改革者の著書を紹介したり。彼のカルヴインに於ける關係はスタウビッツのルウテルに於けるに似たるものあり。他年ゼネバに於てカルヴインの後繼者なりしセオドル・ベザは當時十二歳の少年にしてウォルマルの家に寓せり。カルヴインも亦同じ家に居りしとも云ふ。父死してカルヴインは好む方に目的を立つることを得るに至りし故、文學を修めんがために再びパリに行き人文學者の講筵に列り博く古今の文學に通せり。二十三歳の時セネカの寛容論 *De Clementia* の註解を著し其の造詣を示したり。彼は又師父の書にも精通せり。然れどもカルヴインは博學のみならず、沈潜反復の人にてありき。

7 Wolmar
8 Theodore Beza
アウ
ル
マ

カルヴインは既にウォルマルより改革の思想を鼓吹せられ其の後彼が就て學びたる教師にも又彼の親戚にもプロテスタント主義に賛成する人あり。巴里に於て寄寓せし家の主人亦同主義の人にして其後焚き殺されたり。カルヴインが遂にプロテスタントの信仰に歸せしは何時なりしかは詳かならざれども忽然の回心ありしことは明かなり。

カルヴインは詩篇の註解の序文に自己の經驗の一端を漏らせる一節あり。曰く「余は父を喜ばさんがために忠實に此(法學の研究を云ふ)に身を委ねんと試みたれども神は秘密なる攝理によりて他の途に我が方向を轉せしめたり。先づ法皇敎の迷信に固着して深き泥濘より引き出さるること容易ならざりし時神は突然の回心によりて、年齢に比べては頑固なりし我が心を、教ふるに足るものとなせり。」

彼が改革の意見を發表すべき機會は偶然にして來れり。ニコラス・コオブと云へる友人一五三三年巴里大學の學監に擧げられ、十月一日諸聖者祭日に行はれたる就職式に於て一場の演説をなせり。此の演説は大膽に福音主義を發表したるものにして一大波瀾を捲き起し、コオブは難をバアゼルに避

くるに至れり。此の演説は實際カルヴァインの起草せるものなること(或は彼の助力に成るものなりとも云ふ)隠れなかりければ、彼も亦都を遁れて一時巴里の南八十哩になるオングレエムと云へる地に走り、チレエと云へる老牧師の許に身を寄せて一冬を此處に過しぬ。此の間ルフェブルを訪ひしこともあり。チレエは學者にして藏書に富めり。カルヴァインは後年大著述を成すの基を立てしならん。然るに巴里に於て迫害の焰再燃して殉教するものありと聞き、カルヴァインはチレエとともに國を去り、ストラスブルグを経てバゼルに赴きたるは一五三五年の春なりき。

カルヴァインは暫くバゼルに留りぬ。ブリンガアと交を結び、又た希伯來語を學びなごせり。然れども此の時期に成したる大事業は有名なる『基督教綱要』の著述にあり。其の成りしは一五三五年八月にして一五三六年刊行せらる。羅句文を以て書かれたり。此の書巻頭に附するに佛國フランス第一世に呈する書を以てせり、美麗なる文章と整然たる議論を用ひて佛國の改革者の目的、性質、信仰を表明せる大文字なり。此の書の本體は組織單純にして量亦大ならず、律法、信仰、祈禱、眞の禮典、僞の禮典、基督教の自由の六章より成

1 Angoulême
2 Du Tillet
去る佛蘭西を
要基督教綱

3 Institutio religionis
christianae
(Institutes of the Christian
Religion)

れり。是れ第一版なり。カルヴァインは終生此の著に筆を加へぬ。一五三九年一五五九年に出したる改版に於ては其の内容次第に充實整頓し分量亦著しく増加せり。一五四一年カルヴァイン親から佛文を以て同じ書を出したり。然れども根底の意見に於ては第一版と變する所あらず。カルヴァインが第一版を出せし時は年僅に二十七歳なりき。世界の歴史に比類稀なる變動を起さしめたる書籍は此の一青年の手によりて成されたり。

一五三六年二月カルヴァインは以太利に遊び、フェルララの公爵夫人ルネエの客となれり。此の婦人は敬虔にして、新教徒に同情厚かりし人なり。暫時滞在して後ストラスブルグさして歸りしが、戦亂の爲め道路杜絶せし故迂回してゼネバを経過せる路を取れり。ゼネバには一夜だけ留まるの豫定なりしが、フアーレルは此の事を聞きて訪ひ來り、此の地に留まりて共に改革の事業に當らんことを勧め、強いてカルヴァインをして之に従はしめぬ。

カルヴァイン自から詩篇の註解の序に此の事を記して曰く「フアーレルは福音を
進抄せしむる爲め非常の熱心に燃えて余を引き留めん爲に總ての神經を引き
張れり。我が志は靜かに學問に従事するにあれば他の事業に關係せざること

伊太利行

ゼネバに
留る

を欲すといふことを聞くや、懇願にては目的を達せざるを見て、遂に詛ひの言を發し、余にして斯の如き切迫せる必要を目前に見ながら助を貸さずして去らば、神は必ず余の静居と勉學を詛ひ給ふべしと言へり。之を聞きて余は恐怖に打たれ計畫したる旅行を思ひ止まれり。』

此處に少しくゼネバの政治と此の時までの改革の次第を記せざるを得ず。ゼネバ市の政治的地位は複雑なりき。大體サボア侯の管轄に屬すれども市民は亦多大の自治權を有せり。政權の所在はサボア侯の代官と市民の會議と一人の監督の三に分れしが第十五世紀の半ばサボアの家の一入法皇の位に登りし者位を退い、後ゼネバの監督となりし以來サボア家の權力は監督の權と一に合したり。隨つてサボア家に反抗するの精神は亦監督に反抗するの精神となれり。一五三〇年監督は兵力を以て反對の勢力を壓倒せんとせしかば市民はベルン及びフライブルグの援助を得てサボア家の兵を破りたり。之より後市民の權利増進し、市政は實際三種の議會によりて支配せられたり。先づ上に小議會若くは評議會なるものあり、其の下に二百人議會あり、更に又市民の總會あり。大事は順次に各議會の議を経て後總會に於て確

定すべかりき。宗教改革の問題は此の種類に屬せり。

ルウテルの著書は一五二一年頃既にゼネバにも傳はりたれども、一般の動搖の始まりは一五三二年の夏法皇クレメンス七世が市内に於て免罪符を賣らしめし時にあり。民心頗る沸騰して改革の氣焰大に揚りたれども羅馬教の勢猶ほ強かりしが、一五三二年の十月フアーレルがベルンに於ける改革の事業を完成したる勢を以てゼネバに來りしかば改革黨は大に力を得、兩黨の争ひ激烈を加へ、フアーレルは一時市外に遁れざるを得ざりしもベルンの援助とフロメン及びグイレエ(見前)二人の有力なる助けによりて事業効を奏し一五三五年の八月二百人會議はミサを行ふことを禁じゼネバ市は全くプロテスタントの市となりぬ。フアーレル、グイレエは力を合せて風俗を改め規律を嚴にすることを力めしかど反對の勢力亦強くして苦心慘憺たる折しもフアーレルの慧眼は己よりも更に偉大なる人物を見出したるなり。

カルヴァインは先づフアーレルの補助者として教會に於て聖書を講ずることを始めぬ。フアーレルは四十七歳カルヴァインは之より若きこと二十歳なりしも二人は友として相許し心を一にして志を行へり。一五三七年カルヴ

5 Neuchatel
グケルスト
インケトラ
ンカに於
ル於

インは三人の牧師の一人となり益々嚴格に理想を行ふことを力めぬ。然るに市民は之に堪へず、反抗の勢盛にして一五三八年四月市の二百人議會及び總會はフアーレル、カルグインの二人を市外に放逐することを決議せり。フアーレルは前に牧師たりしニウシヤテルに行きカルグキンはストラスブルグに行きて其の地に避難せる佛國のプロラスタント教徒の結べる教會の説教者となれり。

カルグインは三年間ストラスブルグに在りしが此の間は文學的事業に力を用ゐるを得、聖書の註解を著し、又「基督教綱要」を増補したり。メランクトンと會見せしも此の時にあり。其の會見は前後三回に止まりしが其の後も文書の往復を斷たざりき。其の書翰は頗る交情の篤きを見る。カルグインが結婚せしもストラスブルグ滞在中なりき。妻となりし人は和蘭より通れ來りし寡婦にて數人の連れ子あり。結婚式を挙げしは一五四〇年八月にして共に家を成すこと九年の後妻は一人の子を遺して死せり。彼は復た婚せず。ストラスブルグに在る間カルグインは貧窮の爲に困みたり。

斯かる間にゼネバ市は數名の牧師を招きしも難局に當るべき人に非ず、擾

結婚

カルグ
イン、
ゼネ
バに
歸るカルグ
インの
事業6 Ordonnances
Ecclesiastiques

教會法

亂益々甚だしかりき。時危くして偉人を懷ふ。カルグイン等の放逐に反對せし人々再び勢力を得て彼等と呼び還すことを決議せり。是れ一五四〇年九月のことにしてカルグインは頗る躊躇したれども再三の懇願とフアーレルの熱切なる勸告によりて翌年九月再びゼネバに入ることゝなれり。

此より後カルグインは死に至るまで二十三年間ゼネバの爲に力を盡したり。其の内前の十三年は苦戦の時代にして、後の九年は勝利の時代と云ふべし。彼は當時に於て最も教父の書に精通せる人にして、第三世紀に至るまでの教會の政治の簡單と規律の嚴格なることを愛せり。其の理想は自然に歴史によりて養はれ、此の理想を極力ゼネバに行はんと勉めり。彼が「基督教綱要」に於て述べたる純理想とゼネバに於て實行したる所のものは必ずしも符節を合せりと云ふべからず、土地の事情に應じて斟酌したる個條もありたり。彼がゼネバに於て實現せんとせし所は政教一致にして、純然たる神政セオクラシーの建設を理想としたり。其の第一着としてゼネバに歸りたる年、小議會の依頼に應じて教會法を起草し、二百人議會の決議を経て法律となれり。此の法律に依れる教會政治は殆んど使徒時代の其れと同じく監督なく、國家の干渉を

受けざるものなりき。教會の職員は牧師、教師(神學教授を含む)、長老、執事の四種にして、説教の任に當る牧師、教會に於て最も主要なる地位を占む。牧師は市内の牧師會にて撰定し、市の議會に附し、其の教會の同意を得て確定す。長老は教會の政治を司り、執事は會計及び慈善のことを管掌す。是れ即ち今日の長老教會政治の規範を立てたるものなり。然してゼネバに於ては市民は悉く教會員にして信仰の告白に同意することを誓約せざるべからず。小兒の爲にも簡單なる問答書を編成して之を教へたり。斯の如く市是れ教會なり、其の風俗、道徳を取り縮る爲に特別の機關なかるべからず。カルヴァンは評議會なるものを組織したり。此の會議は牧師五人、長老十二人(内十人は二百人議會を代表し二人は六十人議會を代表せり)より成れるものにして政教兩面に跨りて其の中樞となれり。此の會議は毎週一回集會して教會の規律と市民の道徳とを管理せり。カルヴァンは牧師として會議の一員たるに過ぎざりしも、最後の權威の所在なる聖書の解釋者たる特別の地位を占め、然して彼の解釋は殆んど無謬たるの自信を有せしかば、實際王者の權威を有したり。當時ゼネバの風俗は頹廢を極めたりしが評議會は規律を行ふと峻嚴に

して假借せず、飲酒、舞踏、奢侈、卑猥なる歌など之れを嚴禁したり。評議會は教會放逐以外に刑法上の處分を加へ得る權能なく、其は他の法廷に屬したれども實際上評議會の定むるまゝに成りしなり。一五四二年より一五四六年に至る間に於て法に觸れて死刑に處せらるゝもの五十八人、追放せらるゝもの七十六人の上に出でたり。其の甚だしき例を擧ぐれば、舞踏したる爲に罰せられしものあり、山羊の鳴くを聞きて、彼は美しき詩篇を唱ふと言ひし爲め三ヶ月の追放に處せられしものあり。説教を聽きて笑ひたる者亦三ヶ月の禁錮に處せられ、父母を打ちし少女斬首せられ、魔法遣ひなりとの故を以て死刑に處せられたる女少からざりき。

斯かる峻嚴なる政治に對して當然種々なる反對は起れり。心靈派と稱せる思想上の自由派(此の派は汎神的神秘的思想家の一群にして佛蘭西に蔓りゼネバにも入り來りたり)及び政治上の自由主義者交々カルヴァンに反對せり。此等よりも更に有力なる敵は教理上の反對者なりき。セバスタアン・カステリオは(一五五三)カルヴァンの友人にして神學校を監せしが聖書に批評を加へし爲に其の職を奪はれ、セネバを去りぬ。醫者ゼロオム・ホルセク亦豫

定説に反対せるが爲に禁錮せられ後追放せられぬ。

セバスタチヤン・カルテリオはセネパ湖の西敷哩なる佛蘭西の地に生れ、貧困の間に生長し、リオンに學んで人文學の空氣に養はれ、廿五歳にして才藻燦然たる古文學の學者となりぬ。其の頃改革主義の門徒となり、ストラスブルクに於てカルヴァインと相識れり。カルヴァイン再びセネパに歸るに及び之を迎へてセネパの學校の主幹に任ぜり。然るに彼は舊約の雅歌は昔の戀歌にして、當時普通に解せられたる如く基督と教會との關係を云へるものにあらずとの意見を發表するやカルヴァインと衝突せり。カステリオは乃ち辭に其の職を辭してバアセルに去りぬ。一五四五年より一五五五年まで十年間ここに住みしが、多くの家族を支ふるために彼は印刷業者の爲に校正を爲し、或はライン河の流水を拾ひて、辛き生計を營めり。此の間彼は全聖書を羅旬語及び佛蘭西語に譯する事業に心血を注ぎぬ。其譯に於ては普通人民の要求に切實ならんことを方針とせり。羅旬譯聖書は一五五一年に、佛語譯は一五五五年に出版せられたり。又彼は信仰自由の爲に辨する目的を以て一五五四年匿名の書を著せり。

然れども最も人の耳目を聳動せしはミグエル・セルヴェトオ(一五五〇)の禁殺なり。セルヴェトオは西班牙の人なり。急激なる自由思想を懷き、二十餘

セルゲエ
トガの
殺の禁

歳の頃「三一神説の誤謬」と題する著あり。一五四〇年より一五五三年までウインナに住めり。一五五三年「基督教の挽回」と名くる書を著して、ニカヤ會議に定りたる三一神説とカルケドン會議の基督論と小兒の洗禮と此の三つは教會腐敗の大原因なりと論じたり(第十八章)。彼はカルヴァインと文通せしとあり。ウインナに於て其の著書の爲に嚴刑に處せられんとするや、何故なるや遁れてゼネバに來りたり。潜伏一ヶ月の後去らんとする際發見する所となりて禁錮せられたり。カルヴァインはセルヴェトオを以て三一神の教理を否定し聖書の權威を無視する極めて危険なる異端なりとして死刑を主張せり。市の議會は瑞西の各カントンの意見を徴したるに、答は皆セルヴェトオに不利にして、メランクトンさへも死刑に賛成したり。ここに於てセルヴェトオは一五五三年十月二十七日禁殺せらる(カルヴァインは實に之よりも寛なる處刑の方法を執ることを勸告したり)。カステリオの如き少數の人は反對の聲を擧げたれども、基督教國の輿論はカルヴァインの處置を是認したり。時代の思想は是の如きものなりき。

カルヴァインの處理せし所敢て盡く當を得たりと云ふべからざるも、徹底せ

る理想を抱き、一切の反對と戦ふて之を征服し、毅然として其の志を貫き得たる峻烈なる精神は歴史上稀に見る所の偉觀と稱せざるを得ず。彼はセネバの産業を盛にする爲に絹織物の業を興しぬ。又市民の教育に盡瘁し、今は大學となれる學校を建て、先づ文科神學科を設け、書を以て學長となし、カルヴィン自からも講演をなせり。彼の死する頃學生は大學部と豫備部を合せて千五百人に及びべり。有力なる牧師は此の學校に於て養成せられたり。カルヴィンの感化を受けんために歐洲各國より來り學ぶ者頗る多く、五年間に千三百餘人に上れり。蘇格蘭の改革者ジョン・ノックスの如きも其の一人にてありき。

斯くてカルヴィンは歐羅巴のプロテスタント教徒を鼓舞統率せる偉大な勢力となりぬ。瑞西以外に及びたる彼の勢力を略記すれば、(一)佛國のプロテスタント即ちユウゲノオの徒は全くカルヴィンの指導を受け、カルヴィンの信仰に養はれ、一五五二年巴理の大會に於て採用したる信條は大體カルヴィン主義の神學に據れり。(二)蘇格蘭の改革はジョン・ノックスに依りて成されたれば、一五六〇年制定せられたる信條も純然たるカルヴィン式

歐洲に於けるカルヴィンの勢力

のものなり。(三)英國の教會は大に趣を異にせりと雖も國教會の信條なる「三十九個信條」には明かにカルヴィンの思想の感化を見るべし。ピウリタンの信仰に至りては全くカルヴィンの神學を基礎とせるものなり。(四)和蘭教會の教理の基礎たるベルジック信條は一五六一年ガイド・プレエの起草にかかり純然たるカルヴィンのなり。(五)ツキングリーの勢力の下にありし獨逸語の行はるる瑞西の諸市ツウリッヒ、バアセル、ベルン等は初めカルヴィンを好まざりしに係らず遂に彼の勢力の範圍に入るととなれり。ツウリッヒの改革者プリンガア(一五七五)は温和なる人なりし故カルヴィンと協議して晚餐式に關する意見の一致を圖り雙方共に多少の讓歩をなして其の目的を達したり。此を初めとしてバアセル、ネエシャテル、シャフハウゼン等之に和しべルンもカルヴィン死後亦歩調を一にするに至れり。(六)カウヴィンの勢力は獨逸にすら及びたり。下バルツの選帝侯フリードリッヒ三世之を歡迎して一五六三年「ハイルベルグ問答」編纂せらる。起草者はザカリヤス・ウルシノス(一五三三)及びカスパー・オレヴィアヌス(一五三七)なり。二人はカルヴィン及びプリンガアの弟子にして又友人なり。獨逸に於けるカルヴィン主義

の神學者なり。「ハイデルベルグ問答書」はプロテスタント教會の信條のうち最も穩雅なるを以て聞こゆ。故に獨逸のみならず和蘭蘇格蘭及び米國のレフオームド教會之を採用せり(日本に於ても今の日本基督教會の前身たる「日本一致教會」に於ては之を信條となせり。『海徳山問答』と名くる譯文)カルヴァイン主義の教會はナツサウ、ブレエメン、ヘッセン、ブランデンブルグの諸州にも根據を据えたり。

カルヴァイン主義が斯くの如き偉大なる勢力を揮ひし所以の一は、カルヴァイン其人が世界的の指導者なる力量材能を具へしに因ることは勿論なれども他に理由無きに非ず。之をルウテルに比較するに、(一)其の神學一層統一あり。此は次章に於て詳述すべし。(二)ルウテル派の教會の政治は其の州の君侯の支配を受く、且つ禮拜の儀式に於て改革中途に止まれるもの少からず、カルヴァイン派の教會の旗幟鮮明なるに及はず。故にカルヴァイン派の政治は世界各國に適用せられ易き利益を有す。(三)カルヴァイン派の教會に於ては基督教生活の訓練に重きを置き實効を擧げしこと遙かに他の改革者の其れに勝りたり。(四)ルウテル及びツッキングライは再洗禮派(リバイバル)の如き狂熱に近き流派を斥けたれどもカルヴァインは寧ろ之を尊敬し利用したり。カルヴァイン主義は此等

カルヴァイン主義の勢力ありし理由

カルヴァインの死

の長所を有せしかどもルウテル及びツッキングライの下に成長せし教會に對して敢て對抗の態度を執らず、反つて調和包容の道を講じたり。是れ其の大を成せし所以なり。

カルヴァインは説教者として隔週毎日説教をなし、毎週三回神學の講義をなし、著述に従事し、外は各國の同志と交通して彼等の爲に參畫する等日々の生活多忙を極めたり。睡眠少く、數年間一日一食に止まれり。此等の事の爲に體力を銷耗し、一五六四年五月廿七日五十五歳にして死せり。

人物及び著書

カルヴァインの人物 彼は中身にして肉瘦せ髪黒く鼻隆く額廣く眼光人を射れり。神經鋭敏にして敵中に突進する如き勇猛の氣象に富まずと雖も、一たび危険身に迫り來るに達へば勇氣内より發して千萬人をも怖れざる概ありき。彼はルウテルの如く平民の友となり得る力に富まず、又自然を受するの趣味を缺けり。然れども個人的の愛情は冷かならず。推理の力は透徹明瞭にして其の辯舌は燃えたる論理なりと稱せられたり。著書『基督教綱要』は其の主なるものにして聖書註解も亦多し。シャーフ曰く「ルウテルを以て翻譯者の王とすればカルヴァインは註解者の王なりき」と。彼は三度問答書を著したり。其の他教會政治に關するもの説教書翰等甚だ多し。セネカの註解のとは上に述べたり。

カルヴァインは好き後繼者を得たり。其の人はセオドオル・ベザなり。一五
 一九年佛領ブルガンデイに生る、名門の出なり。ウォルマルの門下に於てカ
 ルヴァインと相識れることは既に記したり。其の後巴里に出でて文雅の社會
 に入し詩人の名を得たるが行爲は嚴格ならざりき。一旦重病に罹りて覺
 醒し一五四八年ゼネバに來りしがヴァイレエの紹介によりロオゼエンにて希
 臘語を教授せしが一五五八年ゼネバに移り神學校の學長となり、カルヴァイ
 ンの事業を輔く。カルヴァイン死するに及び其の遺業を紹げり。彼はカルヴァ
 インの如き創始的天才無しと雖も、紳士の品位あり、人に長たるの器量あり、
 且つ世故に鍛練し、勇氣亦乏しからず。一六〇五年八十六歳にて死するに至
 るまでカルヴァイン系のプロテスタントの指導者たる名を墜さざりき。ベザ
 はカルヴァイン傳を著せり。其の外著述頗る多し。

ベザの名はベザ原本と名くる新約聖書原本により傳へらる。この原本二種あ
 り。一は一五六二年にリオンの聖アイレネッスの修道院に發見してケムブリ
 ュヂヤ大學に寄贈したるもの今も同大學の圖書館に在り。他の一は今巴里の博
 物館に藏せらる。

Theodore Beza
 ベザ

ベザ原本

第六章 改革者の神學

宗教改革は文藝復興によりて産み出だされしにあらず。宗教改革の主動
 者は理知の光に照して舊き教理を批判し新しき思想の系統を建てたるにあ
 らず。彼等は知りて爲せしよりも爲して後知りしこと多かりき。ベアアド
 の云ひし如く「彼等は微光の裡に事を爲せり。彼等は試みつゝ徐々に己の活
 動を了解するに至りたり。彼等は一度ならず自から懐きたる主義の論理的
 に歸着する所を取るを避けたりき。彼等の事實は彼等が知りしよりも偉大
 なる所多かりき」。ルウテルがエルフルトの修道院に入りし時以來心血を搾
 りて考へたる問題は、如何にして自己の靈魂は救はるべきてふ事なりき。此
 の問題の解決を得んために彼は聖書を讀めり、此の問題に就き正しき道なり
 と信する所に反したる免罪符の賣買に反對せり。此の精神、此の實驗こそゾ
 ロテスタントの神學の開發を指導したる中心主義なりしなれ。されば改革
 者の神學思想は主として救拯論の一面に傾注せられ、オリゲネスの如くアウ

改革者の
 中心問題

信仰

グスマヌスの如く教理の全局面に研究の光を注ぐに至らざりき。救拯論以外の問題に就ては彼等は全體承繼的態度を執り、基督の人格や意識の問題に就きて思想を勞したりと見えす。我等を救ふ基督の事實と、之を受け入るる信仰是れ即ち改革者の思想の集中したる焦點なりと知るべし。ルウテルは基督教を如何なるものと見しやと云ふことに就き、ハルナックは曰く「基督は基督に於て己を啓示し其の心を開きたる活ける神に關する活ける確認なり。客觀的に云へば耶蘇基督、彼の人格と事業なり。主觀的に云へば信仰なり。信仰の内容は恩恵の神なり、罪の赦なり。」

ルウテルの説く所の信仰とは何ぞや。彼は曰く「信仰に二種あり。一は神に關する信仰にして、神に就きて教へられたる所は眞實なりと信するの意なり。此の種は信仰と云はんよりも寧ろ智識の一種なり。第二種の信仰は神に於ける信仰是れなり、即ち彼に信頼し、彼に交渉し得ることを一心に思ひ、彼は示されたる如くあり、又我に然か爲すべしと疑はずして信することなり。生くるにも死ぬるにも神に依る信仰ある者のみ基督者なり。」

信仰の内的方面を高調したるルウテルの思想はタウレル一派の神秘家よ

信仰に依りて義とせらるる教理

り得來りたる所少からざるべし。然れどもルウテルの所謂信仰は單に直覺瞑想を專とする神秘家の信仰とは趣を異にし、信仰の客觀的基礎なる基督に繋される信仰なり。神に信頼するは即ち耶蘇基督の生涯と事業に現れたる神に信頼するなり、是に於て信仰は信仰に依りて義とせらるる、教理と關聯して見ざるべからず。

信仰に依りて義とせらるる、と云ふ教理はルウテルが之を掲げて呼號したる三大本義の第一として數へらる。是れ彼がパウロの書翰を精讀し又スタウピッツの指導に依りて漸く明かに認め得たる眞理なり。中世の基督教の思想は行に依りて義とせらるる、ことに歸し、改革者は信仰に依りて義とせらるる、ことを主張したりとて相對照するは未だ精確ならず。ルウテル等も善行の必要を説かざりしに非ず、たゞ自己の行の不完全なる、之を基督の行の完全なるに比べてはとて見るに足らず、基督の行を攝取することに依りて罪の赦と救を得べしと信す。此の攝取の機能是れ即ち信仰なり、然れども此のみ信仰に非ず、信仰は上に云へる如くより大にして根本的なる靈魂の活動なり。中世の基督教とても行を以て完全なりと信じたるにあらざれども之に

功德ある如く思ひたり。又信をば専ら或る事實を承認するの意に解したり。然して神の恩恵は直に信する者に與へらると云ふよりも、禮典及び司祭の仲保を経て受け得らるべしと信じたり。

信者は皆
司祭なり

信仰により義とせらるゝと云ふ第一の本義より、信者は皆神に近き得る司祭なりとの第二の本義は生じ來る。何となれば人は或る職に従事し、或る特別なる勤行を爲すによりて神に近きにあらず。是に於て現在の生活と日常の務皆神聖なりとの思想生ず。これ中世と近世とを區別する思想なり。ルウテルは曰く「修道者萬事を擲ちて修道院に入り、斷食し徹夜し祈禱して禁慾的の生活を送る時大なる事を行へりと見え、少女家に於て料理し洗濯し他の事を爲すとき小さき事の如く見ゆ。然れども神の命令の在る所斯かる小き業も神に仕ふる務たることはあらゆる修道僧尼の聖潔と禁慾主義に優れり」されば教職に在ると然らざると神の目より見れば高下の差別なし。これルウテルが基督者の自由と稱する所にして、歐洲の人心より僧侶を恐るゝ念を取り去りたり。

聖書の權
威

ルウテルが主張したる第三の本義と云ふべきは聖書の權威なり。是れヲ

神の言と
聖書の區
別

イブチツヒの討論の後メランクトンの啓發に因りて遂に達し得たる立場にありき。但だルウテルは羅馬教の教會權威説に反對して聖書の權威を主張したりと云ふことは意味を明にするの必要あり。羅馬教會とても其の教ふる所は聖書に原づけることを主張せり。然れども聖書を解釋する權威を教會に保留して、聖書以外より出でたる教理と傳説を聖書に讀み入れ、其の眞意より遠ざかれり。ルウテルとても聖書に歸ることを説けども聖書の文に悉く一様の權威ありと云ふに非ず。彼は神の言と聖書とを區別す。權威と無謬は主として神の言に屬し、延いて神の言を載せたる聖書に屬す。是に於て自から聖書に神的の分子と人的の分子の存在するを認む。然れども此の部分は神的にして彼の部分は人的なりと分割し得べしと云ふにあらず。ルウテル曰く「聖書の各部分神的なりとせば各部分亦盡く人的なり。超自然的現實は人間的現實の裡に包容せらる」。聖書の人間的側面に就てはルウテルは各自の批評判斷を加へ得る餘地あることを認めたり。彼は創世紀に就きて「モーセ之を書かざりしとも何かあらん」と云ひ、列王紀略は歷代志略よりも信を置くに足ると云ひ、舊約の豫言者がイスラエルの王に獻じたる助言は政

治的に云へば必ずしも名策のみにあらざりしと云へり。新約に就きて曰く『ヨハネの福音書と其の第一書、パウロの書翰、別けても羅馬書ガラテヤ書エペソ書及びペテロ前書、此等の書は汝に基督を示し、汝が之を知る必要あり又祝福あるとは此等の書に盡されたり。此等に比ぶればヤコブ書の如きは全く葉の書翰なり、其の中に何等福音的のものあるなし』蓋しルウテルの思想によれば神の言の眞髓は信仰によりて義とせらるゝの教理に外ならずして此の教理を多く説ける所を價值多きものとせり。要するに聖書を福音によりて解釋すべしと云ふことはルウテルの方針にてありき。

ルウテルの三大本義にして亦宗教改革の大本義と云ふべきもの以上擧ぐる如し。然れども他の改革者の神學との聯絡及び異同を明にせんが爲に尙ほ二個條を擧げざるべからず。意志の自由及び豫定に關する思想は其の一なり。此の一條につきてはルウテルの神學は全くアウグスチヌスに歸りたるものなり。人は罪の結果により全く意志の自由を失ひたるものにして其の救はるるや全く神の力によることを説けり。人は信仰によりて義とせらるる、其の信仰さへも人自から造る能はず神之を與へ給ふと、是れルウテルの

意志自由
及び神の
預定

メラント
ンの意
見

力を用ゐて説きし所なり。信仰既に神の與ふる所なりとせば自から預定の説なきを得ず。此の點に於てもルウテルは全くアウグスチヌスに隨へり。メラントンが後に至りルウテルと意見を異にするに至りし點爰に存す。彼はルウテルよりも多く文藝復興の空氣に養はれ、ルウテルの同化力によりて一度は全く豫定説を採り、神學通義の第一版に於ては此の立場より立論したれども後に至り人の意志は回心の際隨伴の地位に立てりと雖も猶ほ一要素たることを説けり。

贖罪論に關するルウテルの思想は刑罰代受説なり。アンセルムスの贖罪説は神の名譽を維持するの必要を本として立論したるが、ルウテルは罪の罰せらるべき必要を論據とす。アンセルムスの如く代贖か刑罰かの問題にあらずして、刑罰によれる代贖なり。改革前の改革者の中にはウイックリッフ及びウエッセル之に類せる思想を有せり。ウエッセル曰く「基督は神と人との仲保者たるに止まらず、人の爲に、正義の神と慈愛の神の間に立てる仲保者にてありき」。ルウテルはガラテヤ書第三章十三節を註して曰く「神は總て人の罪を基督の上に置き、彼に云へり、汝は我を知らずと云ひしペテロたれ、

ルウテル
の贖罪論

迫害し神を潰し人を壓制したるパウロたれ、姦淫せしダビデたれ云々。然れどもルウテルには神秘的の側面ありて、純然たる法律的の思想を補ふものありしことを忘るべからず。

ツキンググライはルウテルよりも知識の人論理の人なるが故に其宗教には知的の分子多し。且つ實驗の徑を異にせり。ルウテルの如き深みを有せずと雖もルウテルよりも廣き眼界を有す。人の現狀に就き、救に就きルウテルの唱へたる三大本義につき二人の意見は相一致せり、ただ思想の起點を異にす。ツキンググライはルウテルほどに基督中心にあらずして、寧ろ神の意志其の中心思想なり。宗教とは神を禮拜し其の意志を行ふことなり。神の意志は基督によりて示さるれども、神は其の外にもさまざまの方法を以て之を啓示せり。故に未だ基督を知り得ざる時代の善人例へばソクラテス、カトオの如き善人も天國に在るべしと云へり。基督の事業を説くや神の意志を啓示したる點を重んず。信仰とは基督に於ける神の愛に信賴することを云ふのみならず神の眞理を受け容れ彼の一切の業に現れたる攝理の愛を信するを云ふ。ツキンググライの思想の型はルウテルと異なる所是の如く多し。然して

ツキンググライの神學

其の中心思想

ツキンググライがカルヴァインを経てプロテスタントの神學に影響せる所甚だ大なるものあり。

カルヴァインの神學の本義はルウテルの開きたる徑路の外に出でず。ルウテルの主義は亦カルヴァインの主義なり。たゞカルヴァインの思想には統一あり且つ重きを置ける點異なるのみ。カルヴァインの神學の中心は預定説なりと思ふ人あれども彼の神學の中心は神の主權てふ思想に存す。彼は「基督教綱要」の中に論じて曰く「人は神を知ること、を學ぶと云ふ明白なる目的の爲に生れ又生活するなり。然して神を知る智識が果を結ぶに至らずんば其の智識は空しくしてかつ浮泛なり。其の全思想と行爲とを此の目的に向けざる人は存在の法則を完ふし得ざるものなり」。カルヴァインは神の攝理を説くこと多し。人は神の攝理即ち神の意志を學び神の命する所に忠ならざるべからず。カルヴァインをして神の意志てふ一點を高調せしめたる歴史的必要に就きてリンゼエは曰く「宗教改革は中世の基督教の外部的權威に反對して起れるものなれども、勢の赴く所一切の制限を脱し一切の權威に服せざらんとせり。彼等の訴ふる所は目に見えざる所のものなり。こゝに困難は存す。

カルヴァインの神學

中心思想

故に若し此の見るべからざるものを智識の目に見ゆるもの一なして、其の抑制力ある權威が人の意志に印象するほどなるに至らずんば、何等の抑制的權威あるなく、人は自己即ち法則なりと考ふるに至る恐れあり。『基督教綱要』が第十六世紀の爲に爲せし効用を云はば、神の見るべからざる政治と權威をば信仰の知的の目に見るべきものとなし得ること宛も中世の教會の形體が肉眼に於けると同じからしむるにあり。』

カルヴァインの預定説は單に論理の結果にあらずして實際的の信仰より出でたるものなり。彼は曰く「信仰ある人の受くることは皆神の定め給ふ命令によるものなり。我は神の御手の裡に在りてふことは信仰ある人が艱難にありて味ふ所の慰なり」と。斯く一切の事神の人を教育し訓練する所以なりとの信仰より預定説は出でたるなり。然れども彼の預定説は論理の歸着點に向ひて次第に歩を進めたることは明なり。預定説とは神が各人の生涯に起り來ることを小大となく預め定め置きりと云ふに外ならず。然らば救はれずして亡ぶることも亦神の預定の一部分なるやと云ふに、カルヴァインは『基督教綱要』の一五三六年の版に於ては之に説き及ぶ所あれども、未だ明細に之

預定説

プツツエ
ルの感化

Martin Butzer

を説くに至らず。彼の預定説の發展を知るには、他の神學者より受けたる感化も亦記憶せざるべからず。其の人は即ちストラスブルグの改革者マルチン・プツツエ(第四章参照)なり。プツツエはルウテルの感化に因りてプロテスタントに歸したれども思想に於ては其の後ツキングライとの交際によりて影響を受けしこと多し。彼はツキングライの書中に存する神の光榮てふ觀念を採りて一層之を鮮明にし之に原きて預定説を主張したり。斯くてツキングライよりカルヴァインに至る連鎖となれり。カルヴァインの『基督教綱要』の第一版(一五三六年)に於て預定説を説く所あれども他の改革者の所論以外に特殊の所あるを見ず。然るに一五三九年ストラスブルグに於て出版したる第二版に於ては特に一章を加へて預定説を唱道したり。蓋し之より先き出版せられたるプツツエルの羅馬書註解に負ふ所大なるべしと云ふ。預定と云へば救はるゝ者のみならず亡ぶることも亦預定の内なることを明言するに至れり。曰く「或る人は母の胎内に在る時より確に死すべく定められ、亡びによりて神の榮光を彰す」。然れどもカルヴァインは又、全能者の定むる所は必ず原く所の道理あり、此の道理は我等に隠れたりと雖も善にして完備せるも

二 預定説の
種2 Supralapsarian
3 Infralapsarian

のなることを説けり。一度神に撰ばれ悔改めたる人は永久に恩恵の状態より墮落することなしと云ふこともカルヴィンの神學の一部分なり。ルウテル派の教會の信條には預定説を含めども、亡ぶべく預定せらるゝこと、恩恵を離れ得ざることは其の中に加へあらず。又始祖の罪を犯せしことも亦神の預定の一部分なるやと云ふことにつき、カルヴィンの神學を奉ずる人々の中に意見二に分れ、始祖の罪を預定の中に加ふる人々を「スウブララプサリアン」(墮落の以上)と稱し、之を加へざる人々を「インフララプサリアン」(墮落の以下)と稱す。アウグスチヌスの預定説は後者に屬すべきものなるが、カルヴィンの神學は孰れに屬するやと云ふに、基督敎綱要に表れたる意見は「スウブララプサリアン」なれども、彼が起草せる「ゼチバ」の牧師の一致せる意見といふ書中の思想は殆どアウグスチヌスの意見と同じく、始祖の犯罪は神の許して定めたるものなりと説けり。贖罪論に關するカルヴィンの意見は略ぼルウテルと同じく刑罰代受説に屬すべきものなり。基督は罪人の受くべき罰を受けて神の怒を宥めたり、基督はゲッセマテ及十字架上に於て神の怒を経験せりと、是れカルヴィンの議論の主眼なり。

晚餐式に就きてカルヴィンの意見はルウテル・ツッキングリイと同じからず。「此は我が體なり」と云へる基督の言は象徴的にして文字通りにあらずと云ふはツッキングリイと一致すれども、晚餐の禮典に基督の現在せることをルウテルが主張せる精神には深き同情を有せり。たゞ其の現在するや靈的にしてルウテルの云ふ如く有形的にあらず、信じて之に陪する者の爲にのみ基督は現在すと。是れカルヴィンの議論なり。

第七章 アナバプチスト

1 Anabaptist

歴史的智識

アナバプチストの起原

宗教改革の歴史を逐ふて我等の辿り來りしは主として此の運動の本流正系なり。此の外なほ幾多の逆流あり潜流あることも亦我等の注意したる所なり。アナバプチストの如き其の主なるものなり。

アナバプチストは譯すれば再洗禮者の意なり。今日のバプチスト教會も多少歴史上の連絡なきにあらず然れどもアナバプチストの歴史は頗る複雑せるものありて近年歴史的の研究の進歩によりて在來の歴史の記述は其の真相より遠ざかると多きことを發見し記述の方法一變するに至れり。

アナバプチストはルウテルの宗教改革の影響刺戟を受けし所固より多けれどルウテルを待つて後興りしものにあらず獨立の源を有せり。彼等の先輩と見るべきものは宗教改革前より獨逸和蘭をはじめ以太利佛蘭西にまで散在したる信仰的小團體なり。彼等は中世の教會の組織と儀式の煩しきを好まず教會の祭禮に反對し禮拜は日用の國語を用ふべきことを主張し各自の家に集會して祈禱を勉め信仰の書を讀めり。彼等は教會なるものは信仰を告白したるものの團體なるべきを嚴に主張したるが故に隨つて盡く然らざりしとするも多くは小兒の洗禮を否認したるより此の時より既に「アナバプチスト」若しくは「カタバプチスト」の名を得たり。初はただ體制を具へざる團體に過ぎざりしが一五二四年此の如き團體の代員ウルツフウトに會合し一五二六年更にアウグスブルグに會し其の結果として一五二七年同地に總會を開くに至れり。此の總會に於てアナバプチストの教會の組織は成れり。即ち信仰の箇條を制定し教會の政治を定め牧師長老執事の職を置き其の代員より組織せられたる會議ありて監督は此の會議に於て撰定せられたり。此の派の首領たりし人には有力なる人物ありバルタサル・ヒウブマイエル及び³ハンス・デンクの如きその人なり。前者は先に神學の教授たりしことあり。後者は人文學者にして希臘語に精通し又深く神秘思想の流を汲めり。

アナバプチストの信仰主張に至りては必ずしも細に定りたるものあるにあらず種々異なる意見を包容し得る餘地ありしと見ゆ。其の大體の精神は

2 Balhasar Hübmaier
3 Hans Denk

アナバプチストの主義

初代の基督者の信仰、生活、行爲に倣ふを志とし、禮拜は單純なりき。無抵抗主義と非戰論とはデルクはじめ初期の徒の主張したる所なるが後迫害の烈しくなりし時必ずしも之を守らざりき。ただ教會は信仰あり更生したる人の團結たるべしと云ふは彼等の重なる主張なり。更生は各個人の事にして意識的の信仰を要す。故に彼等は小兒の洗禮に反對す。又教會の性質是の如きものなるが故に國家の支配を受け、或は國家の制定したる規則によりて治めらるべきものにあらざると主張す。救に關する意見は自力を重し律法主義に傾かざるを得ず。彼等は預定を説かずして個人の責任と能力を説く。彼等は羅馬教會に反對せしのみならず、ルウテル教會及びカルヴァイン派の教會にも合すること能はず、新舊兩教徒より迫害を受くる逆境に立ちたり。これ彼等の非なる所ありしによるべきも、或る點はアナバプチスト主張根本的にして時代に先したるによる事も認めざるべからず。

曾てウイッテンベルグに來りて騒動を起したるミュンツェル、ストルク等の人々を或る人はアナバプチストの先進と見做す。然れども彼等は再洗禮を行ひしと見へず。其の他の點に於ても性質を異にせり。アナバプチスト

の起原はミュンツェル等に關係なきが如し。寧ろツキングリイの一派に近かりき。

然れども國家的教會を有する可否及び洗禮問題につきて彼等の意見はツキングリイ等と相反したるより、チウリッヒの市會は彼等の代表者なるコンラド・グレイベルと云へる學者及び他に數人の人々をしてツキングリイと對論を試みしめたり。これ一五二五年一月のことなり。然して市會はツキングリイの議論を以て正しと決議し、小兒には盡く洗禮を授くべく之に違反するものは捕縛すべき旨を命令したり。アナバプチストは之に反對の態度を明にし、幼時受洗したる人々は再び洗禮を受けたり。是に於て禁錮及び罰金等の刑は彼等に加へられ、其の一人は死刑に處せられたり。

之を始として迫害は到る處に波及し益々酷烈を加へたり。羅馬教領に於ては更に甚しくして、埃太利領なるチオル地方に於て一年に死刑に處せられしもの千人に上り、エニスハイムと云へる地方に於ては六百人を算せりと云ふ。たゞ死刑を以てアナバプチストを罰せざりしはヘッセン侯及びザクセン撰侯のみなりき。然れども其の徒は此の如き迫害の中に立つて屈するこ

どなかりき。アナバプチストの徒の多数は寧靜を愛せる順良なる工人及び農夫にして、かゝる迫害のうちにも干戈を執つて立つことをなさず、迫害無き處に往いて身を托するを喜びたり。たゞミュンスタアに起りし事件のみは性質を異にし、アナバプチストに取りて不幸なる事件なりしのみならず、その歴史に汚點を留めたり。

ミュンスタアは監督侯の領する處にして人民非政に苦みしが、ベルナルド・ロトマンなる少き説教者あり、學識ありて雄辯なり、且つ民衆に對する同情厚かりければ次第に非常なる勢力を得たり。監督はロトマンの説教すること
を禁じ市外に去らしめんとしたれども、市民は之に従はず飽くまでロトマンを保護せんとせり。ロトマンは初よりアナバプチストにあらざりしもその思想之と近かりしが如し。然してアナバプチストの人に接するに及びて益々之に近づきしと見ゆ。アナバプチストの勢力次第に張り市の會議は此の派の人々を以て組織せられ、各地の同主義の人多く來り集まるに至れり、之に反する者は市より逐はれたり。是に於て監督の兵は市を圍み市民は勇ましく防戦せしが、圍の中に在るミュンスタア人は共產主義を實行し、且つ多妻の

ミュンスタア事件

6 Bernard Rothman

ミュンスタアの包圍

風を始めたる如き奇異なる現象を生ずるに至れり。ミュンスタアの圍は數個月に亘りしが、糧食盡き且つ内應するものありて遂に陥り人多く殺されて慘酷を極めたり。

ミュンスタアの事件により獨逸に於けるアナバプチストの勢力は一大打撃を蒙りしが、和蘭に於ける同派の運命は是の如く不幸ならざりき。⁶メッノ・シモンズなる人あり、一四九二年頃フリースランドに生れ、初は羅馬教の教師たり一五三四年頃よりアナバプチストと關係し、一五三六年和蘭の溫和なるアナバプチストの首領となれり。彼は信仰厚く溫厚にして組織の才あり。一五五九年死に至るまで自國及び獨逸にある同志を指導して狂妄に走るを戒め、忍耐勤勉にして操行正しくすべきことを教へたり。和蘭に於けるメッノナイトはウイールヘルムより認許を受け安全なるを得て今日に傳はれり。米國のペンシルベニヤ地方にメッノナイトの殖民せるもの、子孫今日まで遺れり數年前の統計によれば米國に於ける總數五萬九千人餘にして一萬二千二百七十五の教會あり、十二派に分れたり。

英國のバプチスト教會の起原亦アナバプチストと相繋れり。英國のブラ

和蘭に於けるアナバプチスト

6 Menno Simons

7 Mennonites

ウニスト或は獨立派と云はれしもの和蘭に在る間アナバプチストに接して其議論を賛成して歸國し、又アナバプチストにして英國に來り住せしもの少からず一六一二年より一六一四年倫敦に於て一個のバプチスト教會は設立せられ、發達して今日のバプチストなる一派を爲すに至れり。

第八章 羅馬教會の復興及び耶蘇教社

1 Counter-reformation

2 Ximenes

のヒメネス
の改革

プロテスタントの改革に抵抗して羅馬教會の生存と統一を維持せんと欲せば、非改革主義を以て改革主義に當るにあらずして、改革を以て改革に當らざるべからず。羅馬教會内の腐敗を淨め規律を振肅し、教理上に於ては舊來の立場を嚴守してプロテスタントに當らんと欲する運動を稱して對抗的改革となす。イグナチウス・ロヨラの率ゐたる耶蘇教社を先鋒と爲し、トレント會議に於て此の運動は完成したり。

此の運動の源を探らんとせば西班牙に於けるヒメネス(一四三六—一五一七)の改革に溯らざるべからず。但し彼はルウテルが事を起したる年に死にたることを記憶するを要す。西班牙に生れ、自國及び羅馬に學び、法皇の恩顧を受け歸國後、監督補佐となりしが、忽然此の地位を擲ちてフランセスコ・教團に加入し、嚴格なる修行を積み、遂に一四九五年トレドオの大監督に任せられ、西班牙教會の首長たる地位を占めぬ。時はフェルディナンドとイサベラの世なり。

彼等は能くヒメネスの意見を用ひて教會を廓清し、教育を振起し、新に三個の大學を立て、人文學を奨勵し、神學に於てはスコオタス及びオツカム時代の思想を排してアクイナスの神學に歸らしむることに力を盡したり。ヒメネスは強固なる意志を以て目的を遂行せり。其の結果西班牙の教職は今まで如く放縱淫逸なるものにあらず、操行堅固なる人によりて占めらるゝに至れり。他日羅馬に行はれたる改革はヒメネスが西班牙に行ひたる所を全局に及ぼしたるものと見るを得べし。

ルウテルの改革起りて後、³「カアヂナル」カムベギオ出でて、一五二四年以後形は小なれども性質之と相近き改革を南獨逸に行ひ、以太利に於ては⁴コンタリニ及びカラツファの如き有力者同じ種類の運動に力を盡したり。たゞコンタリニイは教理に於て幾分の讓歩をなしてプロテスタントと調和せんとを望み(メラシク)トシラチスボンにて會見したるとは既に記したる如し)カラツファは之に反して強硬なる態度を執るとを主張したり。而してカラツファが一五五五年パウル第四世として法皇の椅子を占むるに至り、彼一派の主義は羅馬教會の政治に實現せらるゝに至りぬ。彼は從來の法皇が文學

3 Campegy
4 Contarini
5 Coraffa

フニコ
アと
カタ
ラ

興神學と復

6 Pedro
7 St. Teresa
8 Joan de la Cruz
9 Francois de Sales

術に熱心にして宗教に冷淡なりしと全く精神を異にし、着々として道德上の革正禮拜の振起、財政の整理に力を用ひたり。彼に次いで法皇の位に上りし者も、精神に於ては皆彼に倣へり。西班牙に於て復興せられたるアクイナスの神學は以太利に於ても亦盛に研究せられぬ。羅馬教會が神學上に於て組織井然たる標準に復りしは反抗的改革を起したる一大勢力にてありき。此と共に西班牙を源として羅馬教の神秘なる敬虔の流沛然として勃興し來りぬ。西班牙に於てはアルカントラのベドロオ(一五四九)、アヴィラの聖テンサ(一五一五—一五八二)デヨンドラクルズ(一五九〇)の如き人々あり、佛蘭西に於てはセニルのフランシス(一五六七)最も有名なり。彼の感化により新教より復歸する者七萬二千人に上れりと云ふ。然れど此等の人々の名は彼等よりも戰闘的進取的なりしイグナチウス・ロヨラの背後に隠れざるを得ず。

イグナチウス・ロヨラは西班牙の貴族の子にして、一四九一年に生るロヨラは城の名にして氏名となれり(イグナチウスの名を正しく記せば Inigo Lopez de Recalde)。少年の時より武士の教育を受け、人に將たる器量を具へたり。カル五世とフランシス一世との長き戦争の初年戰場に於て左足に重傷を負

- | | | | | |
|---|--------------------|--------------------|---|-------------------|
| 盟 | 1 Francisco Xavier | 5 Nicolo Bobadella | 修 | 1 Ignatius Loyola |
| | 2 Diego Rainez | 6 Simeon Rodriguez | | |
| | 3 Alfonso Salmeron | | 學 | |
| 約 | 4 Pieiro Fevre | | | |

ひ一生跋となれり。彼は此の傷のため病床にある間聖者の傳を讀みて感奮し、一生を聖母に獻じて之が爲に戦はんと決心したり。是れ即ち一五二一年五月の事にして正に三十歳なりき。之より後彼は諸國を遍歴して祈禱と苦行を勵み一度はエルサレムに巡禮せり。歸り來りて後感ずる所あり、アルカラ及びサラマンカ(班牙にあり)に於て神學哲學を學び更に進んで巴里大學に入り、三十七歳の老書生は兀々として學を勵み七年の間在學せり。此の間彼は六人の同志を得盟約を結んで一小團を形成せり。其の人々はフランセス・コザビエー、²ヂエゴライネツ、³アルフオンソオサルメロン、⁴ペトロフアブル、⁵ニコロ・ボバデラ、⁶ジメオン・ロドリゲスの諸人なり。當初の目的はパレスチナに於て苦める基督教徒を保護するにあり。若し此の事實行し難きときは法皇の可と認むる方法を以て何ことにても忠義を勵むにあり。彼等は一五三四年八月十五日或る會堂に於て盟約を結べり。ロヨラは一五三五年一度西班牙に歸り、翌年ヴェニスに會合して聖地旅行を計畫せり。一五三七年の復活節の日彼等は羅馬に行き法皇に謁見して其の裁許を得しが當時ヴェニスと土耳其との戦の爲めにパレスチナに航すること難かりしかば其の事は思ひ止

- | | |
|--------------------|----|
| 1 Societas Jesu | 設耶 |
| (Society of Jesus) | 立蘇 |
| | 教社 |

訓練

まれり。然して法皇の命する儘に何事にも爲さんがために法皇の管轄を受くる團體を結ぶことに決し之を「耶蘇教社」と名け(ゼズイットは他より呼びし名なり)法皇の許可を受けたり。時は一五四〇年九月二十七日なりき。當初の免許狀には社員を六十人に限りたれども三年の後此の個條は削除せられたり。

耶蘇教社の組織は一朝にして成りしにあらず年を経て次第に形を成し目的も明になりたれども、其の大綱はロヨラの頭腦より出でしものなり。當初より目的とせし處は精撰せられたる少數の者一團となりて相愛し、然かも修道院の如く單に己の救を求むるを主とせず同胞の爲に盡力するにあり、然るに事に着手するに及びて鞏固なる團結を作成せんが爲に最も必要なるは服従の精神なるを觀じ得たり。是に於て階級の區別を嚴格にし、社員たる者は上長に對して絶對的服従の義務を負ふこと軍隊と一樣ならしめたり。此の社に入らんとする者先づ二個年の間試補として訓練に服す。此の前一切世間の關係を斷絶し自己の意志を殺して一意唯だ上長の命に服従せざるべからず。二年の修行は主として禁慾的苦行及び種々なる勞役より成り之を

社員の階級

- 1 Coadjutor
- 2 Professed
- 3 Confessor

社長

經て後有望なる者は學生の階級に加へらる。斯くて數年の間普通の學問を修め、然して後更に神學の研究に數年を費す。業成りて後力量ありと認めらるれば更に進んで副社員の數に加へらる。此の階級にあるものは或は學校を教へ或は傳道に従事す。斯くして數年の間事業に當り信仰と實力に於て傑出せる者は正社員の階級に進めらる。正社員は即ち教社の首腦にして其の樞機に參與す。社長以下の役員は此の中より選舉せらるるなり。社員の立つべき誓約三つあり。服従、貧困、獨身これなり。學生となる際一度誓をなし正社員となる時再び公に宣誓し、別に第四の誓を立つ。此は法皇の命するまゝ、何處へなりとも宣教の爲に赴くべしとの誓なり。孰れの階級に屬する者も其の上級の社員に服屬し之に對して責任を負ふべく、同等の人とは何等相關係する所あるべからず。すべて社員の行動は嚴密なる報告の制度によりて順次に上級の人に通達せらる。各階級の頂に社長あり。社員は皆社長を見ること基督を見るが如くすべく、ただ各自の意志のみならず、思想までも社長の命に對しては絶對的の服従を爲すを要す。社長は選舉によりて擧げられ、過失なき限り終身職に在り、羅馬を以て定住地となし、教社の任じたる社

告白

教育

4 Coimbra

長の聽告白者あり、又顧問と補助者あり、地方の長官は社長之を任命し、任期は三年とす。

内部に斯の如き團結訓練あり、其の勢力を外に張る方法に於ても彼等の爲す所は巧妙にして規模大なりき。執りし方法の主なるもの三あり。一は告白を聽くことなり、二は教育なり、三は外國傳道なり。

告白を爲すことは當時一年に一二回に止まりたるが耶蘇教社の人々は之を屢々爲すことと規則正しく爲すことを奨励したり。彼等は又王侯貴族の聽告白者たらんことを勉めたり。斯くして政治上の秘密を探り知る便を得、勢力を張る爲には好き機會を捉ふることを得たれども、彼等を墮落せしめたるもの亦實にこれなりき。

耶蘇教社が教育上に勢力を揮ふに至りしは、始より計畫してこゝに至りしにあらず、勢に乗じて之を成し得たるなり。もとは或る大學に在る耶蘇教社一味の學生を糾合して一の學社カレッジを造りたるに始まれり。斯かる學社にて最も早きものは一五四二年葡萄牙の4コイムブラに建てられしものなりき。一五四七年に西班牙のフランシスコ・ボルギアと云へる公爵ガンデアにある小